夏再び―本土決戦２０１Ｘ年―【一応完結】

ひゅうが

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏再び―本土決戦２０１Ｘ年―【一応完結】

【Ｎコード】
Ｎ４８５８ＢＱ

【作者名】
ひゅうが

【あらすじ】
――西暦２０１Ｘ年、日本は危機的状況にあった。三連動大地震の発生、南西諸島での軍事衝突、そして、日本本土侵攻。攻める側にも守る側にも予想外の日本本土決戦は、また残暑の厳しい中はじまった――
「なぜこんなことに？」
勝利の熱狂の中で一人呟くものがいれば、苦難の国の最前線でそう呟くものもいる。
なぜなら、人生同様、歴史はそういった錯誤で形成されているのだ

から。
これは、そんな21世紀最初の大国同士の「戦争」の断面を切り取った物語である・・・
※――本作はフィクションです。実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。作中の描写はいかなる差別的な事柄をも許容するものではありません。
※――「事実は小説より奇なり」と云うように、現下の情勢下では更新の継続は困難と判断し、一応のあらすじを終章として投稿したあとで更新を凍結いたします。
変事があれば削除も検討いたします。
読者の皆様におかれましてはご了承願います。

プロローグ（前書き）

番外編1として投下していたものです。
重要部分なので追加しました。

本文中には地震および津波の描写が出てきます。
苦手な方は閲覧をお勧めしません。

※　本作はフィクションです。実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。

プロローグ

――西暦２０１Ｘ年８月１５日　日本列島　太平洋側全景

「緊急地震速報です。強い揺れに警戒してください。」

かつての怪獣映画の土俗的な恐怖感をあおる音楽によく似たアラームとバイブレーションが人々のポケットの中で鳴り響いた。
ほぼ同時か少し遅れ、カタカタという忍び足のような揺れを人々は感知しはじめ、あわてて周囲を見渡し始めた。

テレビでは、ニュースやバラエティーに割り込んで青と灰と毒々しい赤いバッテンで構成された日本列島周辺の地図が表示され、「チャランチャラン」という生理的不安を意図的にあおるような警報音が鳴り始めた。
たまたま電気店の店先でそれを見ていたものや、午後のひとときを過ごしていた主婦、あるいは食事中のサラリーマンの顔からは血の気が引いていく。

その画面にはこうした文字が出ていたからだ。
「Ｍ８．９」。
あとから考えれば過大な表示であるが、その数字と紀伊半島南端の沖合に記された震源をあらわす×印、そして予想震度が６を超える真紅に塗りわけられた地図が関東地方南部から東海地方・南中部地方・南近畿地方・四国地方全土から九州に至る日本列島太平洋側の全土を占めていることからすれば、日本人の誰もが蒼白になってもおかしくない状況にあるのは確かだった。

少なからぬ人々が「シュッ」あるいは「ヒュッ」と喉に空気が通り過ぎる音を聞き、数秒後慌てて動き始めた。
火を使用している者はあわてて炎を止め、工場では強制的にブレイカーが落とされた。
新幹線や鉄道などでは緊急停止のために急ブレーキがかけられている。
机の下へ避難できた家庭内にいれた者や、耐震建築であるビルの中に逃げ込めた者、また対衝撃姿勢をとれた者が数多い点は日本という国が長年かけて培ってきた非常事態対処方針の賜物だろう。
事実、のちの調査によれば速報を耳にしたり初期微動を感知できた人間の実に7割近くが何らかの行動をとって来るべき時に備えており、残る3割も何事かが起きることを知ることができていたのだ。

早めの行動を起こすことができた人間は、日本人がなぜそんな表情をしているのか、また警報の意味が分かっていないらしい海外出身の観光客の手を強引に引っ張り「Ｅａｒｔｈｑｕａｋｅ（地震）！！Ｂｉｇ（大きい）！！Ｂｉｇ（大きい）！！」と叫びながら強引に避難させたりもしている。
すでに、日本列島の地下や海底に設置された地震計群は極めて巨大な地震が発生し、地殻が数十メートルのオーダーで跳ね上がりつつあることを電子的に東京の気象庁へと伝えていたし、そこを起点として各地の官公庁や警察署・消防署、そして国防軍関連施設に緊急警報が響いていた。
Ｊ－アラートと称される全国瞬時警報システムの成果である。
本来は核ミサイルの飛来などを想定して作られたものではあるが、大規模地震とそれに付随して発生する被害は十分に国家の安全に対する脅威だった。

蝉が、唐突に鳴き止んだ。
道端からは鳥やカラスのたぐいが一斉に空へと飛びあがり、山からはまるで煙のように鳥類猛禽類が空へと「避難」しはじめる。
飼い犬は狂ったように吠えはじめ、
さかんに生命を謳歌していた虫たちはあるいは地下から這い出そうとし、空中の蚊までもが何かにとりつかれたかのように高く舞い上がり、あるいはブロック塀にぶつかっていた。

あまりに異常な光景に子供や外国人の中には泣き叫ぶものもあるが、大人たちはその数秒の間無言だった。
そんなことをしても無駄であると彼らは体験的に知っているからだ。むしろ、事態がおさまった後に即座に行動できるように体に力をみなぎらせ、あるいは足のばねをきかせて肩幅立ちしふんばっている。のちに、観光客として浅草雷門にいたアメリカ人は「すべての日本人が軍事教練を受けているのかと思った」と述懐する緊張の数秒感が過ぎたとき、初期微動は「本震」にかわった。

和歌山県全域から高知県、三重県、愛知県、そして静岡県にかけては震度6強から7を観測。
これは、立っていられない揺れであり、また生半可な建造物では倒壊するというすさまじい揺れである。
日本以外の国であるなら、揺れに襲われた地域では超高層ビルのような比較的丈夫な建物以外はそろって自重に耐え切れず押しつぶされるほどの強さだ。
本来ならば空襲や核攻撃でも受けたような惨状が広がるはずの日本列島の太平洋側は、7割以上の建造物がそれに耐えた。
だが中身までも無事ではない。
固定されていない家具は住人の上に倒れ掛かりいやな音をたてて骨を叩き折り、高層建築では机や椅子、そして洗濯機や冷蔵庫が不用

心な人間に容赦なく「横から」襲いかかっていた。
本震の「揺れ」は音速をはるかに超えるスピードで竜のような奇妙な形をした列島を揺さぶり、地殻のやわらかい部分を何度も跳ね返りながら１０分近くにわたって人々を弄び続けた。
そして揺れが初期微動よりは少し弱いくらいにおさまった頃には、揺れを経験したほぼすべての人間がテレビやラジオのスイッチを入れ、携帯電話を取り出しワンセグ放送やインターネット回線をチェックしたりしはじめた。

あわせられたチャンネルや電子の海の向こうからは「津波」「避難」の単語が人々の耳を打つ。
すでに条件反射的に標高の高い場所を目指し始めていた人々の波に、大半の人々が加わりはじめた。
大津波警報が発令された地域では避難袋に加えて通帳や印鑑などを手にした人々が走りはじめたり自転車の上で真っ赤になりながら坂をのぼり、自動車が山を目指していた。
正常性バイアスといった楽観にとらわれた人々に平手打ちがされ、テレビの向こうからは緊迫した言葉が次々に届きはじめる。

「大津波警報が発令された地域の皆さんは、今すぐ、高い場所に避難してください。
津波は何度も押し寄せます。今すぐ、高い場所に避難してください！！！」

公共放送のアナウンサーが上ずりながら連呼する。
のちの調査では、避難対象地域では８割近くが即座に指示に従った。
数年前に東北地方を襲った悲劇の記憶は、初動としてはまず及第点に達するであろう割合で人々を動かしたのだった。

しかし、避難しなかった人々も少数は存在する。
物理的に不可能であった老人などや、この期に及んで警告を無視した連中、そして、避難するわけにはいかない人々だった。
発電所の運転員や、公共交通機関の車掌や車長たち、避難誘導にあたる警察官や公務員たち、そして軍人たち。
彼らのうちのちに命を落とすものは決して少数ではない。
だが、いったん事に及ぶと発揮される人間の義務感――あるいは覚悟か一種の諦め――に従って彼らは己の本分を果たし続けた。
死の瞬間に後悔に襲われて泣き叫ぶかもしれなかったが、彼らによって救われた人間がいることも確かである。

地震発生から１０分あまりが経過したとき、日本人たちはパニックではなく熱狂の中で自然発生的な秩序をもって未来への脱出を開始していた。
震源地からほど近い和歌山県南部では住民の大半が海のすぐそばにまで迫った山岳へ退避を完了させつつあり、東海地震の恐怖に数十年間さらされ続けた静岡県でも住民の大半が避難に向けた行動を起こしていた。

都市部では、地震によって割れた窓ガラスで身体を切り裂かれた人々や瓦礫に打たれた人々に応急処置が施され、背負われて人の列に加わっていた。
すでに命を失った躯が放置される様子はある種の割り切りであったが、のちにトラウマになる人間も少なくないだろう。
だが、今は一分一秒が惜しい。
追い立てられるように人々は速足や走りながら建物の屋上や少しでも標高の高い場所をめざしはじめた。

郊外や田舎では、軽トラックの荷台に人を乗せたご近所さんが制限速度を無視して山へ向かいつつあり、空気の読めない者はワゴン車の中に家財を詰め込んでいた。
慌てて個人的パニックが起これば強引に手を引かれ顔を張られていたし、日頃とは夫婦の力関係が逆転した家庭も数多い。
子供たちは不謹慎な昂揚感で質問を繰り返し、気が立っている両親に一喝されたりもしていた。

――すでに残っている者は少ないが、港湾や河川などでは恐るべき勢いで潮が引き、くろぐろとした海底が顔をのぞかせていた。
そんな様子は定置カメラで首都の各所に伝えられ、揺れに襲われつつも津波の心配がない人々に「これから起きること」を確信させている。
空へ舞いあがったヘリコプターや国防軍の偵察機、そして偶然目撃者になったその時点で空にいた航空機たちは、炎上する市街地と白波をたてて引き続ける潮うしおの流れをその目とディスクに刻んだ。

地震発生から２０分あまり。
高知県南部と和歌山県沿岸に津波の第一波が到達した。
最初は少しずつ水かさが上がってゆき、数十秒もしないうちにその勢いは激しい急流のようになっていく。
堤防の向こうを数分で満たすと、海はすでに黒一色になっていた。
海底の泥が巻き上げられた「黒い波」だ。
その上を白波が立ち続けている様子は、まるで地獄の河のようだった。

そして、地獄の窯の蓋が開いた。
低標高地域には時速数百キロという恐るべき速度で水が襲い掛かり、逃げ遅れた人やモノを飲み込んでいく。

少し標高がある場所にははじめひたひたと足の先を濡らす程度に、その数十秒後に水面が腰のあたりにきて同じく人やモノを黒い海に引きずり込んだ。
流された物は引きずり込まれた脆弱な人体に容赦なくぶつかり、人自身も建造物にぶつかるなどまるで洗濯機のようにもみくちゃにされた。

避難をすませることができた人々の中には、他人事で見つめていたらあわててさらに高台に逃げることになったり、油断していて黒い地獄に呑まれたものもいた。
だが、大半は５０メートルほどの少し高い場所から「黒」が街を飲み込んでいく様子を見つめていた。

「あー。」

「やられた。」

他人事のように事態を評する声があたりに響く。
他人事のようにしなければ、現実を受け入れられないのだ。
これが悪夢であるならばもう少し出来がいいはずだ。
サーフィンできるような巨大な波が襲い掛かってきたり、爆発なんかも起きるだろう。

が、この圧倒的な現実は流れ作業のように淡々と破壊をこなしていた。
かえってそれが恐ろしい。

――似たような光景は日本列島各所で見受けられた。

高知県は県庁所在地も含めた都市部や港湾部が根こそぎ押し流され、徳島県では吉野川を津波が遡り、リアス海岸が被害を拡大した愛媛県南部から大分県、宮崎県も大きな被害を受けた。
鯨で有名な和歌山県太地町や田辺市は町ごと津波がさらってゆき、はるか奥日本第二の都市、大阪市でも沿岸部が津波にのまれた。
三重・和歌山の県境新宮市から志摩半島の鳥羽にかけては悲惨だった。
震源地に最も近い場所であったうえリアス海岸独特の地形は愛媛県南部をはるかに上回る大被害をもたらし、伊勢の二見浦もどす黒く染め上げられた。

伊勢湾沿岸も被害を免れなかった。四日市のコンビナートは緊急操業停止にもかかわらず石油タンクが爆発し大被害を現出させていたし、海上では航行不能になったＬＮＧタンカーがこれまた炎上。オイルタンカーが沈没して原油をまき散らしていないだけまだマシな状況だった。
名古屋市はの熱田神宮付近にまで浸水が達し、三河湾から渥美半島を経て遠州灘に至るあたりは津波と正対し当然ながら直撃を受けていた。
浜名湖は潮をかぶり、復元された新井関ごと東海道新幹線の橋げたを押し流した。
駿河湾から奥まった富士山周辺も被害を受け、名勝美保松原はほぼ全滅状態だった。
浜岡原発が停止中であったことなど何の救いにもならない。
伊豆半島では港を次々に波がさらい、また山は土砂崩れを起こして孤立状態を強いていた。

相模湾から館山一帯も波をかぶり、３メートルほどの津波が逃げ遅れた人々を飲み込んだ。
東京湾には数年前の震災の倍近い２メートルの津波が到達していた

が、伊勢湾のようにコンビナート炎上という事態は繰り返さなかった。
しかし、被害状況を冷静に見つめることができたという点では、東京周辺の住人が一番顔色が悪かったかもしれない。
また、公共交通機関の停止は再びこの人口３０００万の巨大都市圏に帰宅困難者をあふれさせていた・・・

マグニチュードはその日のうちに８．８に修正された。

この日のうちに日本政府は「三連動大地震対策本部」を設置。
同時に来る１７日に召集予定であった臨時国会は前倒しでの召集が決定された。
だが、この時点においては当然ながら誰もが、これが「はじまり」であることに気付いてはいなかった。
そう。日本を混沌の渦に叩き込むその張本人たちでさえも。

プロローグ（後書き）

【用語解説】

「緊急地震速報」――日本が世界に誇る地震警報システム。
地震の揺れには初期微動（Ｐ波）と主要動（Ｓ波）の二種の波が混在している。
このうち初期微動の方が圧倒的に速度が速いうえ、地震の種類や強さによって特徴的な変化をきたす。
そのため、地震計を多数埋設することによる三角測量と波長分析を瞬時にコンピューターで行い、地震の規模や震源地、そして被害を予測し警報を発するシステムである。
完全な地震予知ではないものの、甚大な被害が予想される地域にて操業中の工場や公共交通機関が全力運転中に地震の揺れを受けるような事態を回避できる（スイッチを落としたり減速を開始できる）数秒から１０秒程度の猶予は確保できる。
また、近年の携帯電話高速情報通信網の発達によって個人単位で警報を発し地震に不意打ちをされることを防止する効果もあった。

「怪獣映画の土俗的な」――緊急地震速報のメロディーは不安感と注意を喚起する目的でわざと不協和音で構成されている。
その作曲にあたってはゴジラなどの怪獣映画で知られる故伊福部昭氏の楽曲が参考にされたとされる。

「Ｊアラート」――全国瞬時警報システム。
国民保護法に基づき整備が推進された緊急警報システム。
緊急地震速報などもこのシステムを用いて各自治体や機関に伝達される。

核攻撃やミサイル攻撃にも対応できるようにほとんど瞬時に警報を発することができるが、裏を返せば地震災害はそれらの戦争に匹敵する国家の危機であるといえるのだ。

「軍事教練」――日本の学校教育で行われる整列や行進の練習、避難訓練などは海外では立派な軍事教練である。

一例をあげれば、軍隊などが行う「行進」や整列などは日本人はたいてい大人になると自然にできるが、海外においては「わざわざ軍で訓練を行う」ものでもある。

集団行動も同様。ボーイスカウトなどの野外集団行動は牧歌的に思われるが、英語の「スカウト」が「斥候兵」という意味も持っていることを考えれば立派に「軍事教練を通じた心身の鍛錬」という創設意図が推し量れるだろう。

しかし日本においてこれらに文句を言う絶対平和愛好者の方々はそういない点、ある種奇妙かもしれない。

「地殻が数十メートル」――地震の発生原理については省略するが、大規模なプレート境界型地震においては一気に地殻が数十メートル跳ね上がる。それにともなって津波が発生するのである。

たいていが海面下数千メートルの海底であるため、その上の何億トンという大量の海水が持ち上げられ、それに近海の「薄い」海がおしのけられる。そのため津波は沿岸に接近するにしたがって巨大化するのである。

「被害」――本話においては8月白昼に地震ならびに津波が発生したものとした。

関東大震災において生じたような昼食調理中の火が延焼する形での火災の連鎖については緊急地震速報に加えてガス管の自動閉鎖システム、そしてブレイカー類によって防止されるものとした。

津波については被害規模は平均１０メートル程度のもの（震源地近

くを除く）としている。

「三連動大地震」――東海・東南海・南海地震を総称する。日本大震災という名も考慮に入れられたが、地震規模の点や先の大震災とまぎらわしいためこの仮称がつけられている。

「臨時国会」――作中においては国防軍関連の議論が紛糾しているため早期召集される予定となっていた。

第一話　「志布志湾＝迫撃　９月１日―Ｄａｙ＋０」（前書き）

短編連作となる予定です。
主人公はいません。

※　本作はフィクションです。実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。また、本作は娯楽を唯一の目的としています。

第一話　「志布志湾＝迫撃　９月１日―Ｄａｙ＋０」

――西暦２０１Ｘ年９月１日　日本列島　九州　志布志湾

着弾音は相変わらず続いていた。
時折巡航ミサイルの着弾を示すような爆発の連続が巻き起こり、その合間にロケット弾や１３０ミリ速射砲の弾着音が続く。
かつての沖縄――現在は「琉球人民政府と名乗る武装勢力」に制圧された敵地――で展開された鉄の暴風ほどではないものの、正確さは七十余年のうちにずいぶん進歩していた。
それは、エレクトロニクス技術において依然として旧西側諸国の後塵を拝するといわれる「彼ら」にとっても変わらない。

「奴らめ、ここで弾薬を打ち尽くすつもりか？」

「軍拡で余剰になった旧式兵器一掃のつもりなんでしょうよ！」

日本国防陸軍　第１４旅団（四国旅団）第１４戦車中隊に所属する中村和義一等陸尉は、咽頭マイク越しにもわかるような舌打ちをした。

彼が乗る１０式戦車は、ここ数年のうちに大量生産された代物で、当然ながら通信機器も最新式である。
そのため、雑音などを取り除いてクリアに彼の「チッ！」というよりは「チュッ！」といったほうが正確な舌打ちを乗員に届けていた。
それが苛立ちによるものであることは明確なのだが、その理由の大

半が、先ほど着弾した航空爆弾によって戦車自体が揺さぶられ、舌を?んでしまったからであることに乗員たちは気付いている様子だった。
うだるような暑さは、この太陽の日差しの届かない地下陣地にまで苛立ちとともに侵入してきており、今がもう9月の頭であることなど関係ないとばかりに男たちの鼻の頭に汗を浮き出させている。

「上陸第一陣まで、あと何分だ?」

中村は、話題を変えた。
自分が少し冷静になる必要があるからだった。

「もう連中は出発している頃でしょう。速力４０（ノット）とすると、あと3分といったところでしょうか。」

操縦手が忌々しそうに言った。
彼は、故郷が「奴ら」に占拠されてから微妙な立場にある。
今や祖国が大東諸島が残るだけになってしまった沖縄の生まれなのだ。

「そうか。」

中村は少し息を吐く。
空調装置があるとはいえ、赤外線探知を避けるべくこの洞窟陣地（恐るべきことに築７０年以上である）の中ではそれは切られている。
そして、は湿度１００パーセントである。
自分が吐く息もまとわりつくようで気持ち悪い。

「５Ｍ連（第5地対艦ミサイル連隊）は支援攻撃ができるでしょうか?」

操縦手が心配そうにいった。

「どうだろうな。阿蘇のあたりは激しい空戦の真っ最中だ。飽和攻撃ができる程度に航空優勢が確保できたかどうか・・・」

そこまでいったときだった。

液晶タッチパネルに、暗号化された攻撃指示が入った。

想定状況は、乙。

「やはり駄目だったか！！」

中村は歯噛みする。

この数年で軍と名乗ることになれたばかりの空軍は、築城と伊方原発を守るのに精一杯であったらしい。

さすがに、開戦初撃に伊方原発への弾道弾攻撃をやらかすだけはある。連中、手段は選ばないらしい。

航空支援はなしで、機動部隊（戦車をはじめとする戦闘車両群）による敵海岸橋頭堡への一撃離脱が命じられたのだ。

「全車、エンジン始動。」

中村は、指揮下にある５両の１０式戦車に命じた。

今頃、光ファイバーケーブルで繋がっている１８の洞窟陣地の中では同様に戦車や装甲戦闘車両のエンジンが始動されていることだろう。

火山性ガスや地熱による欺瞞、そして、日本が誇る豊かな植生と時間がもたらす劣化により今のところ彼らは無事である。

作戦の要であるＭＬＲＳ（西部方面特科隊からわざわざ抽出された）は迎撃される暇もなくモスボールされていたクラスター弾頭をまき散らすことができるだろうし、霧島山麓の特科部隊は在庫一掃セール程度には弾薬をまき散らせるはずだ。
少なくとも一斉射は。

だが、それだけだ。

つまるところ、中村たちは一撃を加えた後は尻尾を巻いて逃げ出すほかはない。
彼らは、今日中にはえびの市にまで後退することを命じられていた。最終的には九州の半分を明け渡すことになる。

いや、日本本土の４分の１かもしれないな。と中村は思った。
あの地震から２週間あまり。
未だ、日本列島の太平洋側はあの三連動大地震の痛手から復旧する糸口を掴んでいないのだ。
実質、高知沖から伊豆沖にかけては「軍事的に」無防備な状態なのである。
ああくそ。これでは、この壕が掘られた大戦末期の旧日本軍と同じようなものじゃないか。
いや、援軍がくるアテがあるだけまだマシか？

だが我が愛しの同盟国は核の恫喝をはね除けてまで日本を助けるべきか逡巡している。

「畜生め。なぜこんなことになったのだ」

車長は、それはこちらの台詞です。と返してきた。

――はじまりは、２０１Ｘ年８月１５日、終戦の日に発生した大地震だった。

紀伊半島南端、潮岬沖にて限界に達した南海プレートとユーラシアプレートの境界面は、実に２００キロあまりにわたって破断。

マグニチュード８．８に達する大地震を発生させた。

憲法改正に伴って国防軍と名を変えていた自衛隊は、直ちに災害派遣命令に基づき現地に展開。

ここ数年のゴタゴタから微妙な状況にあったアジア情勢においてパワーを見せたい在日米軍も積極的に災害派遣に加わった。

横須賀から慌ただしく出港した空母「ジョージ・ワシントン」に加え、就役したばかりの空母「ジェラルド・フォード」が日本近海に急派されたのだ。

インド・パキスタン情勢が緊張の度合いを強めつつある中で、それは米軍ができるギリギリの行動であった。

幸いなことに、数年来緊張状態が続く中国も地震に対しては哀悼の意を示し、できる限りの援助を表明していた・・・はずだった。

だが――地震から3日後、那覇基地から出発した日本国防軍部隊を見計らったかのように事件は起こる。

尖閣諸島、大正島沖において、中国海軍のフリゲート艦が攻撃を受けたと中国当局は発表。

「中国領土である尖閣諸島への治安行動を妨害した」として直ちに国連憲章の「敵国条項」に基づき対日武力攻撃を宣言したのである。

同日、再稼働後地震によって再び運転が停止していた四国電力伊方原子力発電所に対し、吉林省通化基地から3発の中距離弾道ミサイルが発射された。

弾体は運動エネルギー弾という名の劣化ウランの塊であったが、稼

働していた3号炉と停止中の1号炉のタービン建屋は破壊され、放射能漏れが発生しはじめた。

これを受け、米軍の原子力空母群は自艦の汚染を避けるべく緊急待避を実施。

国連安保理における非難の応酬は拒否権の出しあいで結論が出ず、その間に中国は、ほとんど無防備な状態になっていた宮古・八重山諸島に対し、本来は台湾に向けられていた水陸両用部隊を上陸させていた。

中華琉球の臨時政府を名乗る組織が「不当に占拠された中華民族の正当な領土の奪還」を中南海に要請したのは、地震から4日目のことだった。

それから後は流れるように事態は悪化していった。

豊後水道にて巡航ミサイル搭載のキロ型潜水艦発見と撃沈、奄美諸島強襲と電撃占領、沖縄本島の孤立。

本島自治体の一部は無防備都市宣言を出しつつあり、四国沖では国防海軍の対潜哨戒機部隊と中国潜水艦隊が死闘を展開しつつあった。

それを支援すべき九州や日本海側の各基地は、他人の不幸は蜜の味とばかりに蠢動しはじめた第三国の対応に追われていた。

そして、「琉球独立」と軍備制限を条件に奄美諸島を返還するという要求に対し日本政府がNOと返答し、米国政府が「琉球への内政干渉」を恐れて逡巡して地震から2週間が過ぎた。

奄美諸島沖に大規模輸送船団が集結。

中南海は、熱狂する国民の前で「日本への懲罰攻撃と保障占領」を高らかに宣言した。

・・・かくて、七十余年を経て、日本人は「本土決戦」を経験する

に至る。

米軍参戦までの短期間に世論の納得するような日本の屈服と南西諸島奪取を図る中国軍は、志布志湾・宮崎海岸・吹上浜の三カ所からの南九州上陸作戦を実施。

対する日本側も、西日本の動ける部隊を根こそぎ投入しての防衛戦を図る。

今、日本は再び戦争の夏を迎えつつあった――――

第一話　「志布志湾＝迫撃　９月１日―Ｄａｙ＋０」（後書き）

【用語解説】

「志布志湾」――九州は鹿児島県の東部、大隅半島の東部に位置する湾。
太平洋戦争末期には連合軍による日本本土侵攻作戦（オリンピック作戦）における上陸地点とされ、それを察知していた旧日本軍によって防御陣地が構築されていた。
作中において戦車部隊が潜んでいるのも、その頃に構築された地下洞窟陣地である。
火山性のガスや温泉、豊かな植生などにより赤外線反応が攪乱されるため隠ぺい状況はいい。
近隣の内之浦ロケット打ち上げ施設が重要な攻撃目標となったため、国防軍部隊はほぼ無傷で敵の上陸を迎えることができた。

「１０式戦車」――旧自衛隊が２０１０年に制式化した日本側最新の戦車。
諸外国のそれとは違い本州での運用を可能とするため４０トン台に軽量化されつつも主砲（国産４４口径１２０ミリ砲）と防御力をさらに強化し、百発百中ともいわれる高度な射撃能力と情報リンク（Ｃ４Ｉ）能力を持つ。その性能は、高速でドリフト走行をしながらでも２０００メートル先の標的をマルチロックし射撃（スラローム射撃）できるほど。しかも、主砲の構造見直しと新型徹甲弾の採用により実質的な打撃力は諸外国の長砲身１２０ミリ砲を上回っており、大平原における撃ち合いが生じにくい日本本土においては戦車として無敵ともいえる能力を誇る。
作中では東アジア情勢の緊迫化を受けて量産が急がれ、国防軍西部方面隊に優先配備されている。

作中では無線傍受を避けるために光ファイバーケーブルを用いて情報リンクを行い、タッチパネルに情報を表示していた。

「第１４旅団（四国旅団）」――四国の防備を担当する部隊。司令部は香川県善通寺市。しかし第１４戦車中隊は岡山県内に駐屯していたため、九州に派遣された。
これは、四国と本州を結ぶ３つの橋が特別非常事態宣言に伴う緊急避難ルートとされていたためでもある。

「第５対艦ミサイル連隊」――熊本県健軍駐屯地に所在。内陸部から発射した大型の地対艦ミサイルにより敵水上艦艇に奇襲をかけることをその任務としていた。
この目的を達するため、使用する地対艦ミサイルは高度な地形照合能力を持つほとんど巡航ミサイルに近いものである。
作中においては旧式化していた８８式地対艦誘導弾にかわり、１２式地対艦誘導弾が採用され、阿蘇山中から攻撃を行うことになっていた。

「ＭＬＲＳ」――多連装ロケットシステム。
冷戦時に、東西ドイツ国境を突破し侵攻してくる数万両のソ連戦車軍団に対抗するために開発された。
多連装というだけあって１両あたり１２発のロケット弾を搭載し、弾頭にはクラスター弾（親子弾）を採用、広範囲の敵を一気に攻撃できる大火力を誇る。
しかし、旧自衛隊時代末期にクラスター爆弾禁止条約に批准したために弾頭は封印処置がとられ、初期に導入された車両も改装されずにそのまま倉庫で埃をかぶっていた。
作中においてはこうした保管車両をかき集め、敵の上陸橋頭堡へ向けて一気に大火力を投射する役目を負っている。

「三連動大地震」――東海・東南海・南海地震が連動発生したマグニチュード８・８に達する大地震。これを受けて日本本土の東海地方から四国南部にかけては甚大な被害を蒙った。
作中においては国防軍の６個師団と２個艦隊を中核とする部隊が救援活動にあたっていた。
しかし、中国軍の侵攻に伴い８月２０日には特別非常事態宣言が発せられ、救援活動から住民の避難活動へとシフトしている。

「伊方原子力発電所」――豊後水道をのぞむ愛媛県伊方町に存在する原子力発電所。
前述の大地震において緊急停止に成功し、非常用炉心冷却装置が作動することでメルトダウンは避けられているものの、宇宙空間から降り注いだ重量２トンの劣化ウラン弾頭にタービン建屋を破壊され、一次冷却水が多量に漏出するという放射能漏れを発生させていた。

これは、核兵器を用いずに放射能汚染を発生させ、米軍の原子力空母を退避させるという目的のために実施された作戦で、核による恫喝に米政府が逡巡する理由ともなっていた。

「沖縄周辺」――先島諸島や宮古・八重山諸島は２個師団相当の部隊と艦隊により占領され、沖縄本島の北部に位置する奄美諸島も空挺軍の強襲により占領されていた。
実質、日本側防衛兵力の主力が駐留する沖縄本島は封鎖状態となっている。
また、「中華琉球」を名乗る勢力が独立宣言を発し、本島の一部にもこれに迎合する向きがあることや無防備都市宣言の兼ね合いから事態を複雑化させていた。

「国防軍」――正式名、日本国国防軍（Ｊａｐａｎ　Ｄｅｆｅｎｃｅ　Ｆｏｒｃｅ）。旧自衛隊から改組されたが、兵力その他はそれ

ほど変化していない。中国側の開戦理由のひとつとして、政権内で検討されつつあった同軍の核兵器保有構想が挙げられている。

「敵国条項」――国連憲章に定められた旧敵国への武力制裁容認条項。
対象は日本やドイツなど。
度重なる決議により空文化されていたが、廃止されず、作中において中国はこれを錦の御旗として武力行使を正当化している。

「中村和義」――日本国防陸軍の一等陸尉（大尉）、第１４旅団第１４戦車中隊の小隊長代理。
大学卒業後に幹部候補生として入隊し、そのまま戦車乗りとなった。
軍であるのに階級の呼称が旧自衛隊そのままであるのは、国防軍設置法における移行期間であるため。
彼の上官に佐藤という名の三等陸佐（少佐）がいるか、「ちくしょう、いつかころしてやる」と言っているかどうかは不明。

第二話　「中南海＝祝宴　９月１日―Ｄａｙ＋０．１」（前書き）

短編を連載化したものです。あとがきに用語解説などを追加しました。

※　本作はフィクションです。実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。また、本作の目的は娯楽のみです。

第二話　「中南海＝祝宴　9月1日―Ｄａｙ－０．１」

――西暦２０１Ｘ年９月１日　北京　中南海

「なぜこんなことになってしまったのだ・・・」

劉孟漢上校（大佐）は、周囲で繰り広げられるどんちゃん騒ぎの中でぽつりとこぼした。
はっとなって周囲をさりげなく見渡すが、まったく気付いた様子は見受けられなかった。
背広に赤いネクタイ――中華的と通称されるここ数年流行のスタイルの党幹部たちは「ロシア式」に乾杯をしているし、若手の武官にもみくちゃにされている瀋陽軍区と南京軍区の連中は完全に勝利に酔いしれていた。

バカどもが・・・！

と劉上校は絶叫したい気分になるのをこらえた。
つい先ごろ「中国軍」と正式名称を変更したかつての人民解放軍のおもに情報畑を歩いてきた彼は、今起こっている出来事が近い将来何につながるのかをよく理解していた。
ゆえに、彼は絶望していたのだ。

この中南海の地下、国家最高司令部とだけ呼ばれる巨大な核シェルターにやってきたのも、彼なりの義務感の発露と若干の破滅願望に由来するに過ぎない。

劉上校は、巨大な液晶モニターを見上げた。

中国大陸からは点線で矢印が引かれ、北琉球諸島（奄美諸島）に達し、そこからは太い直線があの奇妙な形の――竜のような島国の南端へ延びていた。
そして、矢印は種子島沖で3つに枝分かれし、陸上へと到達していた。
吹き出しのようにそれぞれには現地からの中継映像が映し出され、鹿児島や鹿屋といった都市名と黒煙、火災が鮮明に流れてきている。

祖国は、１００年来の宿敵、日本帝国主義に対し膺懲（ようちょう）の一撃を加えたのだ。
すでに国営放送はこの記念すべき一事を速報で伝え、人民は通りに繰り出し万歳を叫び続けているという。

「劉くん。」

現在までの状況を反芻していた劉は、彼のもとに近寄ってきた年嵩の将軍に、声をかけられてようやく気付いた。

「豊閣下。」

敬礼しようとする（中国軍では日本のように帽子を脱いでいる場合の敬礼は一礼するようなことはしない。）劉を、国家情報戦略室長豊赤心中将はそのままでと手で制した。
その様子は、一昔もふた昔も前の香港映画に出てくる「大人」のようで劉上校は少しだけ眉間のしわを緩めることができた。

「いよいよか。」

豊中将の興奮の混じった声に、劉はこの人もかと少しだけ失望を滲

ませつつ「はい。」と頷くにとどめた。

「まさか自分が生きているうちに対日戦争を、それも日本本土侵攻を見ることになるとは思ってもみませんでした。」

「だろうな。私もだ。おそらくここにいる党中央のお歴々も同じ思いなのだろうよ。」

だから、こうして浮かれ騒いでいるのだ。と豊は言外ににじませた。

「これで、敵も降伏してくれると助かるのだがな。」

豊は、彼が参謀本部次長をつとめていた頃のような鋭い視線を一瞬だけモニターの向こうに向け、やがて嘆息する。
そんな様子に劉は目を見開いた。

「気を付けてください。」

「構うものか。私は『対日攻撃ごときで中華人民が少なからぬ負担をもって作り上げた武力が消耗するのを恐れている』のだ。誰はばかることがある?」

それに、こんなところに盗聴器を仕掛けるような連中はいないさ。いても使えない。
わが国にはエドガー・フーバーは存在しないのだ。何せ民主主義国家だからな。と豊中将はくつくつ笑った。

彼は酔っているのかと少し鼻をきかせた劉だったが、いつものとおり彼の好物であるジャスミン茶の涼やかな香りが感じられただけだった。

豊は風呂好きで、炭酸をきかせた湯につかるのが数少ない贅沢だということを劉上校は思い出した。

「・・・くるか？」

「来ます。まちがいなく。」

5秒ほどの沈黙ののち、発せられた問に劉は即答した。

「日本人は、卑怯卑劣を何よりも嫌います。わが政府と人民は古来の正当性なるものと、正義の一字をもってことを決することができると思っています。
まして、かの国は核を持っていないし空母も持っていないと。そして――」

「ことが終われば日本人はかつてのように『従順という名の友好的な国になる』と？
なぜそうならないと思う？」

「皇室です。」

豊中将は意外なことを聞いたとばかりに少し肩を揺らし、劉の方をまじまじと見た。

「あまり知られていませんが・・・というより知ろうとするものがいないのですが、かの第2次大戦末期、日本人は本土決戦を覚悟していました。しかしそれは雲の上からの鶴の一声で停止されました。」

「知っている。」

続けろと顎で促された劉は、声のトーンを若干落とした。

「わが祖国においては、日本政府が怖気づいたあとに皇室に何らかの声明を出させれば日本人は屈服するとの意見が大勢です。しかし、よく考えてみてください。数年前の東北の大地震のとき、かの皇室は何をしました？膝を折り、被災者と語らい、そして電力不足の中で自ら率先して灯りを消した。そんな君主に対し日本人はどう思っているのか？まして、今回の大地震に対してはトップ自らが再びテレビカメラの前に立っています。」

「知っている。被害を悲しみ、悼むと。」

「そんな皇室を無視し、土足で踏み込んできた連中に対して日本人はどう思うか？かつてのソヴィエトが日本人によってどう扱われたかを見れば、そして今回は彼らの側から戦火を止める理由があるのかを考えれば答えは明らかです。――怒り狂っていますよ。まちがいなく。」

「だが、核への恐怖は彼ら自身が一番よく知っているはずだろう？」

豊は面白がるように口の端を釣り上げて、そういった。劉上校の答えがよく分かっているからだった。

「『知っているからこそ』とお答えします。窮鼠猫を噛む。核による恫喝への怒りがすべてに勝るでしょう。・・・我々は、『日本人の敵』になったのです。」

重い、しかしあきらめにも似た沈黙が満ちた。

――中国にとって、２０１Ｘ年の開戦は想定の外にあった。

いや、もっというのならば、日本列島で発生した大地震が台湾海峡をにらんだ東シナ海での大演習に重なったことが、というべきだろうか。

前年の南シナ海南沙諸島における武力衝突と、その結果としてのヴェトナム統治下島嶼「奪還」を受けての南部、広州軍区と南海艦隊の発言力増大は、時の政権とそれを支える人々にとり脅威となりつつあった。

いや、それだけではなく広州という外様以外の有力軍区や海軍艦隊などにとってもである。

何しろ、台湾海峡をにらむ南京軍区といった花形や、対日・対米攻撃の中核として第二砲兵（弾道ミサイル）隊を持つ東北部の瀋陽軍区は新兵器を揃えつつあり、そんなところに外様が口を挟んでは困るからだ。

そんな中にあって発生した日本の大地震を受け、演習中の東海艦隊はついに誘惑に負け、尖閣諸島の実力占領を企図したのである。

彼らは、数年前にそれをやろうとして、時の政権と米軍の軍事圧力により潰されたという苦い思い出があった。

作戦は想定されていた通りに進み、日本人に対し取引を強いるための対価として（そしてあわゆくば領有したい）先島諸島の軍事的空白地帯を占拠するまではほぼ完ぺきだった。

日本海軍の艦艇３隻を飽和攻撃で撃沈できたことも好材料だった。

だが、ここで終わりはしなかった。

党中央の若手や政権の中堅層において強硬論が台頭、さらには手柄を立てられなかった一部軍人たちがメディアに情報を提供する形でくすぶっていた「対日膺懲論」がすさまじい勢いで盛り上がってしまったのだ。

つまり、これを機会に「琉球諸島を中華の海の防壁に」というわけである。

幸い、琉球諸島の軍事力は日本本土へ向かっているし、日本軍の力である機動力は本土の被災地に向けられていた。

今がチャンスなのだ。

米軍介入を恐れ承認を渋った政府に対し、演習のもう一方の主力として海上にあった北海艦隊と、その指揮下にあった瀋陽軍区所在の「対艦弾道ミサイル」は東海艦隊に続けとばかりに介入。

目標を日本本土の原発として攻撃を実施した。

以前の震災において発生した原発事故を受けて米軍原子力空母が退避したことを戦訓に、核を使わずに米軍を無力化するという目的である。

それに、核ボタンは中南海が握ってたからどっちみち彼らだけでは使えなかったのだ。

ここにいたりついに政府も本格介入を決定。用意されていた作戦に基づき、戦力の空白がある北琉球諸島（奄美諸島）を、台湾海峡近くに展開していた演習部隊をもって強襲。

同時に、沖縄本島の自治体と連絡をとりいくつかと好感触を得て無防備都市宣言を発せさせることができたのであった。

米中全面核戦争による被害を恐れる米国を一定期間けん制すれば、あとは第一列島線は中華のものになる。

あとは日本政府が折れるのを待っていた――だが、日本政府はあろうことか（彼らにとり）「寛大な」和平の提案を拒否。

困惑した中国軍であったが、それは人民の激昂により否応なしに戦

意へと変わった。

かくて――中国陸海空軍は日本本土へ侵攻した。
米軍介入までの短期間のうちに日本本土に橋頭保を確立し、そこを基地にして敵首都へ直接攻撃する。
日本人への心理的衝撃を見込んだ作戦である。
泥縄的に立てられた…そしてそれ以降の作戦が決まっていない中での攻撃は、成功しつつある。
――それがいかなる結末を迎えるのか、この時点で知るものは、誰もいない。

第二話　「中南海＝祝宴　９月１日―Ｄａｙ－０．１」（後書き）

【用語解説】

「中南海」――中国の首都、北京市、紫禁城の西側の通称。中国共産党の本部や中国政府の重要施設、官邸などが密集している。日本でいう「永田町」や「霞が関」のようなもの。

「中華的」――作中においては、真紅のネクタイと星のついたネクタイピンをつけたスタイルのこと。いずれも中国の国旗にちなむ。転じて、愛国的なことを意味している。

「中国軍」――人民解放軍から名称が変更された。もともと、２００８年から英語での呼称は変更されていたのだが、それが正式名にも及んだ形である。ただし、実態はほとんど変わっていないのは日本国防軍と同様である。

「膺懲」――ようちょう、こらしめること。作中において中国政府は、日本帝国主義への膺懲をスローガンとしている。奇しくもそれは、日中戦争時における日本側報道「暴支膺懲」と酷似していた。

「南京軍区」――中国軍の地方区分のひとつ。歴史的に非常に独立性が高く、軍といいつつも独自に公社を運営していたりと海外からは「軍閥」と呼ばれる向きも多い。中部の要衝である南京を管轄し、さらに台湾海峡を挟んだ福建省もその管轄とするなど非常に重要な軍区である。

なお、名目上は陸軍と空軍を管轄するものの、海軍も補給の関係上は軍区の影響が非常に強い。
とりわけ上海の発展や政府における上海閥の浸透は同軍区の発言力を非常に増大させた。
作中においては影響下の東海艦隊と、台湾海峡上で演習中の南京軍区部隊が暴発した。

「瀋陽軍区」――かつての満州、中国東北部を管轄する。
中朝国境地帯や中露国境地帯を管轄することから南京軍区とならんで最重要と目される。
また、吉林省の通化基地には対日・対米攻撃を任務とする第二砲兵（弾道ミサイル）部隊が展開。
それらの統制は政府に握られているものの、作中においては米軍の原子力空母を標的とした「対艦弾道ミサイル」部隊は戦術兵器に分類されるために同軍区と海上艦隊との同意によって発射が可能となっていた。
核攻撃ではないものの、これを用いた原子力発電所攻撃は効果的な恫喝となり、「核を用いない米軍への効果的な一撃」となった。
また、奄美諸島を強襲した空挺軍もここの所属である。
南京軍区と同様、山東省青島に司令部を持つ北海艦隊に強い影響力を持つ。

「広州軍区」――軍区のひとつ。海南島を含む中国南部を管轄。作中においては前年に勃発したヴェトナムとの地域紛争に勝利し、南沙諸島のヴェトナム領を「奪還」するなど注目を集めつつあり、海南島の兵力増強など話題に事欠かない。
そのため発言力を増大させつつあり、上記の瀋陽・南京両軍区の焦りを生んだ。

「劉孟漢」――中国軍国家情報院所属の上校（大佐）。もとは情報畑として旧西側の大使館駐在武官を歴任。そのため海外情勢には詳しい。２１世紀初頭からは日本大使館駐在武官をつとめていた。学生時代からの恩師である豊赤心中将を尊敬している。

「豊赤心」――国家情報戦略室長。かつては人民解放軍参謀本部次長というエリートであったが、政権交代に伴い穏健派という理由でパージされた。
それでも閑職とはいえ情報畑の要職にあるあたりは彼もただの穏健派ではない。

「日本本土侵攻作戦」――もともと、作中における開戦は泥縄的に進められたものを従来存在していた作戦に基づき統合したものであった。
つまりは現地部隊の独断専行への追認である。
しかし、作戦終了後に屈服するはずの日本政府は琉球割譲を拒否。
世論は激昂し、おさまりがつかなくなってしまった。
そのため中国軍は検討されるだけであった試案のいくつかからあわてて次の作戦を立てることになってしまった。
本来は、東京への核攻撃などがオプションとされていたものの、これは第３次大戦の勃発を想定したもので米軍による報復攻撃を覚悟しなければならない。
中国側にしても核を使わずに日本本土を完全占領し維持するのはさすがに無謀と判断しており、米軍の参戦というタイムリミットが設けられている中で最大の効果を発揮する作戦が模索された。
そのひとつが、九州島南部を占領し、そこを基地として日本本土の各地に空海軍による攻撃をかけるというプランであった。
前述の全面戦争を想定したプランのうち、日本本土攻略作戦の第一段階として構想されていたこのプランは、奇しくもかつて連合軍が構想していた日本本土侵攻作戦「オリンピック作戦」に酷似してい

た。

ただし違っていたのは、日本側の空海軍戦力の殲滅を前提としたオリンピック作戦に対し、中国軍の作戦は九州南部に基地を設営することで逆に日本側の空海軍戦力を誘引する目的を持っていたことである。

対して、日本側は現有戦力での水際防御は不可能と判断（これは冷戦時からの共通認識）し、日本本土を舞台にした遊撃戦と退路遮断を企図していた。

第三話　「ワシントンD．C．＝決断　9月4日―Ｄａｙ＋3」（前書き）

続きがかけたので投下いたします。

※　この物語はフィクションです。実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。また、本作の唯一の目的は娯楽であります。この点をご理解できる方のみ、どうぞ。

第三話　「ワシントンD．C．＝決断　9月4日―Day＋3」

――アメリカ合衆国　首都　ワシントンD．C．　ホワイトハウス
大統領執務室（オーバルオフィス）

「すぐに支援に動くべきです！このままではわが国との同盟が有名無実と満天下に示す以外の何も――」

「合衆国市民を日本人を守るために核の炎にさらすのか！あの同盟にただ乗りする連中には同情以上の何をくれてやるのか！？」

またか…

アメリカ合衆国国務次官補代理　フランク・J・コッペンクラークは白い目で自身の眼前で繰り広げられているこの2週間まったく変わらない問答を見つめていた。

その奥では、同じくあきれた様子で、しかしどこか面白がるような表情で彼のボスである大統領閣下がこの様子を見つつ、指でトントンとトナカイ革のデスクマットを叩いている。

どうやらご機嫌麗しからずか。とフランクは思った。

「だいたい、火事場泥棒をすぐに非難したわりに、原子力発電所攻撃のあとは沈黙するとは何事ですか！」

「仕方がないだろう！ことはデリケートだ。あの反米感情著しい場所の独立にからむ問題だぞ。

我々はイラクのように悪者になることはできんのだ！あのアジア屈指のホットスポットで・・・」

「その反米感情を放置したのはどこの誰ですか！しかも独立ですって？
住民投票をやって日本に復帰させたのは我々ですよ！　独立だなんてことを言っているのは、それこそ冷戦の遺物たちか遅れてきた帝国主義者たちだけですよ！」

言い合いをしているのは、大統領補佐官たちだった。
民間企業から抜擢され経済通として知られるふくよかな男性と、補佐官としては珍しく軍人あがりで、前職は連邦危機管理庁のナンバー2であった細身の男性である。
政権が代わると官僚やスタッフを丸ごと入れ替えてしまう合衆国としては前者こそが典型例で、後者は異端な存在であった。

よくＴＶドラマで描写される「ボス」は、日本のようなところでは「落下傘」あるいは「天下り」と呼ばれるような人々である。
そのため、部下になったものに舐められないようにしようとあのような態度をとるのだ。
そして、そうした人々は地位が上がるにしたがって押しが強くなる。トップとなるとまた違うのだが、その下に侍る人々は、自我だけで全身が構築されているのではないかと思うほどだ。

フランクは、「太っちょ」と勝手に自分が呼んでいる方をちらりと覗いた。
彼からはうっすらとニンニクと油の匂いが漂ってきている。
デリバリーを頼んだわけではないことをフランクは知っていた。高級食材が醸し出す下品ではない香からすると、今日もいきつけのあの店へいったのだろう。
そういえば彼の前職は現在わが同盟国へ絶賛侵攻中のあの国へずいぶん投資をしていたはずだ。

まあ悪いことではない。かの国で日系企業が撤退しつつある市場へ再度侵攻を図り、そして成功したというのはビジネスの範疇であるからだ。
問題は、「太っちょ」自身が「あちら」に染まってしまっていることだった。

聞くに堪えない第二次世界大戦時の旧日本軍の蛮行とそれを反省しない日本人たち、安全保障条約を利用した経済的繁栄の享受、同盟国であるにも関わらず市場を開放しない…エトセトラエトセトラ…あの国のプロパガンダに、五大湖工業地帯の老舗企業上がりらしい恨みつらみがあわさり複雑怪奇な輪舞曲（ロンド）を奏でている。
それに国益があわさったとき、「太っちょ」はこう判断した。

「日本人など放っておけ。少し痛い目を見ればおとなしくなる。中国は『話せる』奴らだ。」

これが「太っちょ」の言い分である。
フランクにとっては恐るべきことに、こうした意見は決して無視できるものではない。
何しろ彼の祖国において中華系の人々は無視できない数がおり、その多くは今回の戦争（「紛争」ではないと彼は判断していた）においてかの国の法律と札束によってかつての祖国になびいていた。
さらには、日本人たちが経済的繁栄を享受していた頃からくすぶっていたある種の妬みがこの数年のうちにぶり返した「無関心層」、かつて中流階級と呼ばれていた現在の貧困層予備軍にも若干の伝播をみていたらしい。
彼らは訳知り顔で「中立」を唱えていた。
ああ素晴らしきかなニュー・モンロー主義！

これに対し、フランクが「コネチカット・ヤンキー」と呼んでいる

細身の男は正反対の考えを抱いているようだった。

「早く同盟国を助けろ。」

実に明瞭である。

いわく、現在の日本人が被っている悪名のいくらかは第2次世界大戦後の処理が曖昧であったことをいいことに行われたプロパガンダである。

いわく、北東アジア共通の悪役にされた日本人はそれでもかつてのように暴発しなかったではないか。

いわく、合衆国の国益に全面的に協力せよなどというのは無理なことだ。他国には他国の事情があり、その中にあってこの70年あまり日本人は協力的であった。

うん。

見まごうことなき共和党系親日派である。

ここにかの半島国家系の1世でもいたのなら口を極めて罵るだろう。

いや、殴りかかるか？

ああいけないいけない。人種的偏見はわが祖国において禁止されている。

だがまあ、この元軍人が元在日米軍の軍人として90年代前半をトウキョウで過ごしたことや、「あっち」の文化に染まっていることは気にしない方がいいのだろう。

ああくそ。

こいつらは二人とも自分の欲望に忠実なのだ。

人生という複雑怪奇な怪物を扱うのにロシア人がつくった戦車取扱い説明書程度で足りると思っているに違いない。

代わり映えのない罵りあいにシフトしそうな補佐官たちにフランクは何度目かの溜息をついた。

要するに、こうした言い合いと無味乾燥な「痛烈な非難と対話の要

求」で彼らはこの2週間あまりを空費していたのだった。
そしてその間に、沖縄周辺でおさまるはずだった戦火は日本本土にまで拡大しつつある。
おそらく、この場の誰もが思っているに違いない。「なぜこんなことになってしまったのだ…」と。

「それで。」

様子を見計らっていたらしい大統領閣下が口を開いた。

「わが同盟国の状況は?」

ぴたりと言い合いはやんだ。

はい。大統領閣下。日本人たちは九州島の南部を放棄、中部のアソ火山地帯からクマモト一帯へ戦力を引き上げ、長距離砲撃と練習機までも使った航空遊撃戦で中国軍に対抗しつつあります。
と太っちょがいえば、コネチカットヤンキーはオキナワの封鎖状態は相わからずですが、シコク沖ではヨコスカから急派された対潜部隊が順調に中国人の潜水艦を狩出しつつあります。と答えた。
経済状況はと問われれば、太っちょは、よくはありません。何しろ本土に侵攻されているのですからといった。いい気味だという表情を隠そうともしないのはいっそ清々しい。
対してコネチカットヤンキーは、日本軍はよくやっていますとこたえた。
現状日本本土の製造設備はフル稼働中で、空襲などを許してはいません。もっともこれは核兵器が使用されていないことやオキナワ封鎖のために空軍部隊がナハへ一定の圧力をかけ続けており戦力がそれほど抽出されていないこともありますが。

コネチカットヤンキーは後半は言いづらそうに言った。
それこそが、太っちょが「これは中国が全面戦争へ発展させる意図を持っていないという意思表示です」という理由であったからだった。

「なるほど。」

大統領閣下は静かに頷いた。
しばらく周囲が静かになる。

「閣下。」

フランクは、自然と口を開いた。
ここで終わってしまっていては、この2週間の繰り返しになってしまう。

「わが国は、真珠湾を忘れたのですか?」

ぎょっとした様子で補佐官たちがフランクの方を向いた。
それは、フランクが先ほど面会した日本大使館つきの武官が吐き捨てた台詞だった。
その言葉を自分が口にしたとき、フランクは胃の腑に熱い拳が叩き込まれたような気分になった。

大統領閣下は、一瞬だけ目を見開いた後、瞑目した。
ゴクリ。と誰ともなしに唾をのむ音が大統領執務室に響く。

「真珠湾を忘れるな。か。」

大統領閣下は、ぽつりと呟いた。

「そうだな。『真珠湾を忘れるな』だ。」

合衆国の方針は、こうして決した。

――アメリカ合衆国にとっても、日本本土侵攻作戦は予想外の出来事だった。

日本で発生した大地震に際し同盟国として救援を行うということは即座に決断できた。

しかし、次代の超大国となる意思をあらわにしていた中国に対しいかにあたるかは今世紀初頭以来の懸案であったし、同盟国でありながらもしばしば経済的敵国ですらあった日本にあたる方針がその懸案に振り回されていたこともまた事実であった。

そのため、これまではどちらもないがしろにせず、対等に扱うという玉虫色の解決策がとられていたのであるが、日中間の武力衝突はアメリカにそのツケを払わせようとしていたのである。

要は、

「日本と中国、どちらをとるか？」

という問題である。

あるいは、「日本人のために血を流す意味はあるのか？中国の恨みを買う意味はあるのか？」と言い換えることもできる。

日本は、深刻な社会問題への対策が一段落したとはいえ再びアメリカの経済的・軍事的脅威になる可能性は低い。

対して中国の伸び代はけた外れに大きい。であるなら、後者をとりたくなるのは自然であろう。

そして、中国側は「独立」というある種の正義に国連憲章の旧敵国条項という錦の御旗まで振りかざしてきた。
これに、アメリカ本土への核による報復という現実的な脅威があわさったとき、アメリカは逡巡せざるを得なかったのである。

だが、中国人は忘れていた。
アメリカ人は「正義」が何よりも大好きな国民である。
そして同時に、アメリカ人は「自身の正義」が否定されるのが何よりも嫌いな国民であるということを。

第三話　「ワシントンD．C．＝決断　9月4日―Day＋3」（後書き）

【用語解説】

「大統領執務室」――読んで字のごとく、アメリカ合衆国大統領が執務をする部屋のこと。ホワイトハウス本館に接続するウェストウィング（西翼）に存在し、地下には核シェルターである「大統領危機管理センター」がある。

本来は国家の緊急事態や戦争などの事案に関しては地下の「シチュエーションルーム」で検討されるのが常であるが、作中においてはシチュエーションルームを使用しておらず日中間の武力衝突に対する米国政府の逡巡があらわれている。

あくまでも通常執務の一環として情勢を見守るというのが冒頭時点での態度であった。

「合衆国大統領」――第４５代アメリカ合衆国大統領。可もなく不可もなくといった評価を受けているが、景気の一段落に伴い国防力の強化と同盟国同士の連携を重視し世界戦略を再構築する必要性に迫られているという状況において指導力が試される指導者でもある。

なお、彼が指で叩いていたトナカイ革のデスクマットはアラスカで彼が撃ったそれをなめしたもので、彼の私物である。

「国務次官補代理」――アメリカにおいて、国務次官などの官僚たちは政権交代によって容易に入れ替わる。そのため実質的に生え抜きの官僚や実力者は「代理」や「次官補」などの補佐職についていることが多い。

なんでもトップがやろうとすると過労死してしまう激務であることも理由のひとつである。

「フランク・Ｊ・コッペンクラーク」――国務次官補代理。スウェーデン系移民の家に生まれる。生家はニューイングランド州。いわゆる名門の出であるが、生え抜きのＷＡＳＰとは違い比較的自由に育った。

４歳のときに貿易代表部に勤務していた両親とともに日本に渡り、インターナショナルスクールで幼少時代を過ごす。

彼自身はいわゆる日本趣味とは一線を引いているつもりではあるが、嗜好などはちゃっかり染まっている。

いわゆる知日派といわれるが傾倒するほどではないため、国務省内の伝統的な親中派にもそれほど嫌悪されていない。

このまま無難に勤め上げてその後シンクタンクなどに天下り（アメリカにおいては人材プールの役目を果たす）する予定だったが…

「太っちょ」――名前のないかわいそうな人その１

五大湖沿岸の某都市に本拠をかまえる自動車メーカーの経営不振にともない若くして抜擢され、経営を立て直した辣腕家。

その後、現政権のスタッフとなったためロバート・マクナマラとよく比較されるが、本人は秀才どまりのためひそかなコンプレックスになっているらしい。

もっともこれは比較対象が悪く、普通に有能な人であることに疑いはない。

「コネチカット・ヤンキー」――名前のないかわいそうな人その２

その名の通り、コネチカット州出身の官僚。彼はフランクと違って北米大陸育ちである。

いまどき珍しく農場育ちから学業に励み、海軍士官として身を立てた。彼が趣味的な意味で狂いはじめたのは、第七艦隊所属の航空士官として横須賀に赴任したためである。

もっとも、彼と同様の士官は他にも数多く存在し、米軍全体での親日的傾向を生み出しているためそれほど問題ではない。

２０世紀末に日本で多発した災害を実体験したため、連邦危機管理庁への出向を二つ返事で引き受け、メキシコ湾岸でのハリケーン被害や中西部の竜巻被害の対策に尽力していた。
なぜ彼が「太っちょ」と論戦しているかというと、日中間の武力衝突に外交介入しようとした米政府に対し、中国が核による報復を仄めかしたためでもある。

「ロシア人の戦車取扱い説明書」――エスニックジョークのひとつ。いわく、
『第二次大戦中のソ連兵が戦車に乗り組むことになり、取扱説明書として１枚の紙を渡された。そこにはこうあった。「１、我が国の技術を信じよ」「２、不安になったら１を読め」』
要するに、そういうことである。

「九州情勢」――上陸後３日が経過。上陸初日に戦車部隊による海岸橋頭堡強襲が実施され、中国軍上陸部隊は少なからぬ損害を受けた。
その代償として戦車部隊は半壊するも、えびの市方面への撤収に成功している。現在鹿児島県全域と宮崎県・熊本県の一部が中国軍の占領下にあり、特別非常事態宣言により避難が実施された市街地や逃げ遅れた人々に何が起こっているのかはお察しください。
　現在、霧島山方面に展開していた国防軍部隊は阿蘇山周辺から熊本方面に防衛線を構築。３個師団と２個特科団が抵抗を継続し、閉鎖されている地方空港を利用して練習機改造の軽攻撃機やかき集められた特科部隊がゲリラ的に上陸部隊を攻撃している。
どういうわけか海軍部隊による本格的な攻撃は起こっておらず、中国側は日本側の震災被害が予想以上に深刻であると判断していた。
そのため、首都東京においては大規模な反戦デモが「企画」されつつある。

「全面戦争を望んでいない」――戦争ははじめることは簡単であるが終わらせることは難しい。そのため、日中ともに米国への接触が行われておりその中で伝えられた内容と思われる。中国側の要求は沖縄本島の米軍基地はある程度認める中での琉球独立で、そのために米国側も態度を決めかねていた。

「アメリカの正義」――この場合においては、旧日本軍による卑劣なだまし討ちを受けて立ち勝利をおさめ、そして「東アジアに平和を回復した」こと。ヴェトナム戦争というぬぐい難いトラウマを抱える米国にとって、第二次世界大戦は神聖化されるきらいがある。時間の経過とともに負の面も見直されつつあるが、現在の平和を作った大きな一因として自らをたのむということにおいては疑うものはほとんどいない。

「真珠湾を忘れるな」――米国史上で最も有名なスローガンのひとつ。

ことあるごとに繰り返されるため気分を害する日本人も多いものの、米国人自身は現在の日本を非難して言っているつもりはない。なぜならかつて日本は打ち負かされ、現在は信頼に足る同盟国であるという認識があるためである。

第四話　「東京＝傲慢　９月５日―Ｄａｙ＋４」（前書き）

※　本文中には、作中登場人物の認識に基づき一般的には不適当と思われる言動が描写されています。
許容できない方は本話後半部を読まないなど、ご注意ください。
また、本文はフィクションであり、実在の人物・団体・国家などと一切関係ありません。

※　半分以上が、演説文のような感じです。

第四話　「東京＝傲慢　9月5日―Ｄａｙ＋４」

――西暦２０１Ｘ年９月５日（日本標準時＝ＪＳＴ）　日本列島
首都東京　街頭

『　日本標準時、２０１Ｘ年９月１日…この日はわが国と同盟国にとって恥辱の日として記憶されることになるでしょう。
知ってのとおり去る８月１５日以降、中国は、わが国やその友好国の度重なる忠告と要請にも関わらず、ついにその野心をあらわにし、わが国の最重要の同盟国である日本国に対しこともあろうに日本が再び地震と津波で大きな打撃を受ける中、武力侵攻に踏み切りました。
その大義名分は「日本軍国主義の復活を抑止し懲罰を加えるとともに、中華民族固有の領土である琉球諸島を日本帝国主義の手から解放する」というものであることもご存知の方は多いでしょう。
中国の言い分は矛盾に満ちています。
琉球に独立と自由をと言いながら、「２００年前の属国は自国の領土である」という歴史的事実を曲解した言い分で領土拡大を図っているからです。
民族自決をうたいながら、琉球独立を叫ぶ人々の大半はその出自にその琉球諸島、いえオキナワにルーツを持たない人々があの五星紅旗を掲げ、中国語やその他の言語で行っているものであるということはこのスローガンが８０年以上前にヨーロッパのズデーデン地方で行われたものと同様だということを如実に示しています。
すなわち、民族主義的な帝国主義者が自己の利益のために歴史的な一事項を振りかざしているということです。
しかし、自由と民主主義、そして平和を愛する諸国民の代表として

わが合衆国政府は武力行使を非難しつつも平和裏に事態を解決すべくこの2週間、中国ならび侵攻を受けた側である日本政府に、双方が納得する形での住民投票の実施や国際調停による平和の回復を提案してまいりました。

これは、中国国民と日本国民、そしてアメリカ国民がいずれも共通の価値観を持ち、平和と繁栄を第一としていると私をはじめ政権のスタッフたちが確信していたためです。

ですが――まことに残念なことながら、この確信は裏切られました。中国軍は自ら主張する自由と平和という目的からは明らかに反する、彼らの主張する中華琉球自治区からはるかに離れた日本の主要４島のひとつに軍事侵攻したのであります。

国営放送はこれを「日本帝国主義の復活を粉砕し中華の安全を確保するための警察行動」と称賛していますが、これはまったくの虚言であります。

その証拠として、わが連邦政府の情報機関は中国軍占領下の諸地域において大規模な虐殺と略奪暴行が発生していること、そしてあらかじめ国際機関を通じて先の日本大震災の被災地からの避難民を乗せていると通告済みの日本海軍の輸送艦と民間の船舶が中国海空軍の攻撃により撃沈され、２０００名あまりの尊い生命が失われているという事実を私に報告してきました。

さらに、現在日本国の首都であるトウキョウでは、中国の国防動員法という名の第五列動員法を受けて組織された平和デモを名乗る日本在留の中国人と、それに乗った人々の手により平和デモを名乗る大規模な暴動が発生しています。

これに対し日本軍は効果的な対処ができていません。かつての歴史の負の一側面を振りかざす人々は重い過去をもって銃の引き金を封じているからです。

この一事だけでなく、過去、過去、過去、過去の字は日本政府をして自らの義務に抑制的たらしめています。

ここにいたり、私はひとつの決断をしなければなりません。
私はこの決断を皆さんにお知らせするにあたり、ひとつの言葉を思い出していただきたく思います。

「リメンバー・パールハーバー（真珠湾を忘れるな）」

かつてフランクリン・D・ルーズヴェルト大統領が議会で述べた一言です。
言わずと知れた通り、これは太平洋戦争におきましてアメリカが日本軍に対し戦い抜くスローガンとなりました。
いかなる理由があったにせよ、日本軍による先制攻撃は我々を激昂させ、結果として武力により現状を自己の都合のいいように変革できるという野心は打ち砕かれたことは歴史が証明している通りです。

しかるに、現状はどうでしょうか？
過去７０年余りを過去の過ちを悔いつつ平和のうちに過ごした日本の人々に対し、中国の指導者と軍部、そしてその扇動に乗せられた人々は過去の復讐を自己正当化の文言として安易な武力行使に及んでいます。
そこに至るまで、政治・経済的にいかなるハラスメントが行われたのか我々は思い起こす必要があります。
我々は過去の清算という言葉によってプロパガンダや、ことによると過剰表現、そして一部のまったくの虚言を正当化してしまってはいないでしょうか。
そしてそれに対する反応を安易に「過去の無反省」と断じてしまってはいないでしょうか。

いかに過去の悪しき面をプラカードにしたとしても、それを掲げる人々の意図が悪しきものであれば、それは掲げる者のシュプレヒコ

ールでうたわれる悪の権化以下に堕しているものであると言わざるを得ません。
我々は、過ちを正すべきです。
自国の安定のために他国を過剰に貶め、それをもって他国には力をもって何をしてもよいとする考えは、かつてのヒトラーよりも悪辣な「遅れてきた帝国主義」であるということを思い知らせなければいけません。
そして、我々の親しい友の苦境を救わなければなりません。

今、日本の人々は再び襲った大地震と大津波により苦しみ、その足元を見た帝国主義者たちからさらに多くを奪い取られようとしています。
これを許してはいけません。
議会にご列席ののみなさん。
私に、アメリカ合衆国憲法ならびに日米安全保障条約に基づき、信頼すべき同盟国を、日本を救う権限を与えてください。
そして、かつて我々の父祖がそうしたように、東アジアと西太平洋に平和と自由を回復するための法案に賛成票を投じてください。

そしてこの放送をお聞きの合衆国市民のみなさんや我々が信頼する同盟国の市民のみなさん、私の決断を理解し、支持してください。

「真珠湾を忘れるな」

なぜこの言葉に我々が時代を超えて共感するのか、今一度思い起こしてください。

――アメリカとこの放送をお聞きの皆さんに神のご加護がありますように。』

なぜこんなことになったのだ…

デモ隊の指揮者の一人は拳を握りしめていた。
自分たちは、この島国に真の正しい道を示しているはずだ。
しかし、なぜこんな風に口を極めて罵られなければいけないのだ!!

日本国籍である「同志」は顔を蒼白にしている。

この国の首都の、広い道路をいっぱいにしている紅の旗と中華琉球の旗は、晴天にも関わらず力を失ったようにみえる。

――なぜ、今頃!!

指揮者はそう叫びだしたい気分を抑えていた。

彼らが口を出す筋合いはない。
それを理解しているからこそ彼らは釣魚島回復の際も、琉球回復の際にも何もしなかったのではないのか!!

彼は、手先だけは器用な日本人が作った――これから中華のものとなる予定の――大型の街頭モニターの向こうで万雷の拍手を浴びているアメリカ合衆国大統領をにらみつけていた。
この国の連中は惰弱で、軍国主義者の扇動にたやすく乗るようなバカばかりだ。
だから我々がときには力をもって導いてやらねばならないのだ。
それがあの戦争で屈辱をみたアジア人の共通の義務にして権利だ。

それを理解してるからこそ、我々は――

指揮者は、ふと、街頭の「導くべき」連中から向けられる視線に気が付いた。
デモ隊が「当然の権利」としてひっくり返した日本資本主義者が祖国の労働力を搾取しての作った車や、家電製品を「奪還」していた様子をただ見つめるだけであった去勢された連中が、こちらを睨んでいる。

「帰れ・・・」

誰かが言った。

「帰れ！日本はお前たちのものじゃない！お前たちの好きにしていいところじゃない！」

「返せ！沖縄を、故郷を返せ！！」

それが引き金となった。

「黙れ！！日本人ごときがいきがるな！！」

「日本鬼子！！東洋鬼！！」

日本語のわかる留学生たちが叫び返す。
だがその声に余裕は感じられない。
１０万人の中華同胞やアジア人有志が集まったにも関わらず、その

周囲にはこんな中でも「日常生活」を送っていた日本人たちがいつのまにか集まっている。

「何とでもいえ！　今はお前たちが侵略者だ！！」

最初に叫んだ男とは別の、女が叫んだ。
指揮者は、少し顔が引きつるのを実感しながら、とっさに「本土」と同じように彼らを守っている公安（警察）官の方を見た。

だが、見つめている目は先ほどのような諦めの混じった目ではない。燃え立つような憎悪が、ジュラルミンの盾を構える警察官たちの目には宿っていた。

「この…機会主義者が！裏切り者！！」

日本人である「同志」が叫んだ。
手に持っているプラカードを警察官に投げつける。
すると、お返しとばかりに明後日の方向から「デモ隊」を囲む群衆からペットボトルが飛んできた。
たちまち、雪合戦のようにものが飛びかいはじめる。
憤慨した同胞が日本野郎に掴み掛り――

なぜだ・・・

我々は正義を示しているはずだ。と指揮官は思った。

「なぜだ！！」

日本人野郎には何をしてもいいはずのに！！

――この日、アメリカ合衆国大統領の日中武力衝突への介入宣言を受けてか、「平和裏の琉球独立・平和回復デモ」は暴動に発展。警察部隊により「騒擾状態」が宣言され管区機動隊総出での大捕り物となったがそれでも抑え込むには至らず、数時間後に治安出動命令が出された国防軍部隊により鎮圧されるまで少なからぬ犠牲者を出すに至る。

これは、中国軍占領下であった奄美諸島や宮古・八重山諸島も同様で、こちらは軍政下であったことや中国側の国民感情、武力使用基準などの原因があわさり「少なからぬ」が「多くの」と言い換えるのに適当な犠牲者が生じていた。

これを受け、中国国営放送は「日本帝国主義が本性を現した」と非難。

一方の日本国内では、各新聞社やＴＶ局は前日までとは打って変わって積極的対処を主張しはじめた。

かろうじて維持されていた外国サーバーを用いた匿名掲示板は幾度か処理容量が追い付かずクラッシュしたりもしたが、少なくとも日本国民はあっという間に意思を統一したといってもいいだろう。

この時点において、日本本土へと侵攻した中国軍部隊は熊本県水俣市―人吉盆地―宮崎県日向市の通称「Ｓライン（島津ライン）」にまで進出。

１個大隊規模の上陸部隊が四国＝高知県土佐清水市に上陸するなど占領地拡大の動きを止めていない。

一方の日本国防軍は、伊方原発対策と某国への対策のために呉に逼塞していた国防海軍第２艦隊が紀伊水道を脱出し紀伊半島沖に集結中の第１・第３艦隊と合流。比較的無事であった瀬戸内海側交通網を通じ、大部隊が関門海峡を渡りつつあった。

その数は約５個師団６万数千名。

その中には九州戦線でおなじみとなりつつあった１０式戦車だけでなく、旧式化が叫ばれる７４式戦車、そして百両単位の９０式戦車が含まれていた…

第四話　「東京＝傲慢　９月５日―Ｄａｙ＋４」（後書き）

【用語解説】

「日本標準時…」――太平洋戦争開戦時のルーズヴェルト大統領の議会演説の冒頭を意識している。

「主要四島への軍事侵攻」――中国側は当初から日中全面対決との意識があったために占領地を拡大できたものの、大義名分にある琉球独立とは何も関係ない侵攻は決定的に米国側の態度を硬化させていた。
琉球を守るための外郭陣地であり取引材料として奄美諸島を占領し、それでも足りないならと占領地を日本本土へ拡大させるという決断は軍事面からすれば正しくとも国際政治的には致命傷といってもよかったのである。
そしてこの動きは、アメリカだけでなくある国にも決断を促すことになる――

「虐殺と略奪暴行」――日本人という悪鬼を相手にし、さらに旧日本軍が犯した（とされる）蛮行をよく知っている彼らにとって報復行為は当然の権利ととられていた模様である。
ただでさえ現地の警察力は壊滅状態であった。そのため現地治安をゆだねられた者は全力を挙げてその維持にあたらねばならないのであるが…
中国軍にはその経験が決定的に不足していたか、その意思が決定的に不足していたのである。

「撃沈」――津波被災地からの脱出を図るため、生き残った瀬戸内海航路の船舶と国防海軍の輸送艦が動員された。

しかし、豊後水道封鎖状態や下関海峡の向こうで軍事緊張が高まりつつある状況を見越し、紀伊水道沖は日本側戦闘艦を狩ろうとする中国側潜水艦隊が待機していた。
運悪くその網にかかったのが、呉から出航した国防海軍輸送艦「大隅」とフェリー「さん・ふろーらる」を中心にした5隻の船団であった。
離脱に際して日本側は国際法に則り、急ごしらえで赤十字マークを描くなどの対策をとっていたものの、中国側の命令不徹底か功名心か、いずれかの理由で同船団は高知県沖の太平洋上で雷撃とミサイル攻撃を受けた。
通告済みという理由に加え、主力艦が被災地での救難活動に出払っていたため護衛艦はごくわずかで、海上保安庁の巡視船を含む3隻が撃沈。2隻が大破後沈没していた。
死者は、実際は民間人6500名にも及んだのだがこの時点において米国側は「大隅」乗艦の民間人のみをカウントしている。

「国防動員法」――海外在住の中国籍の人間も中国の戦時には政府と軍の命令により動員されるという内容の国家総動員法の一種。
日本在住の中国籍の住人の一部も中国大使館を通じた動員が行われ、日本側の一部団体とともに「戦争の早期終結と琉球独立の容認」を訴えていた。
しかし、日本本土侵攻という事実に勝利を確信した一部は略奪暴行に走っていた。

「指揮者」――表向きは中国籍の大使館職員。しかしその実態はお察しください。
年齢は20代半ば。90年代以降の愛国教育にどっぷり浸かっているクチである。

「日本国籍である『同志』」――初老の男性。日本の「政治の季節」

には乗り遅れたクチ。平和主義者であり、自衛隊を国防軍へと改組する際には大規模デモを組織した有力者である。
その真意は平和愛好であるが、その行動は一部の人々にとって都合がいいものであったようである。
作中では、今まで黙っていたくせに自国が有利になると文句を言い出した人々を変節として非難しているつもり。

「日本人には何をしてもいい」――作中での中国側の共通認識。
なぜなら過去に自国にひどいことをしたにも関わらず反省せず、自国の領土を不当占拠し続けた挙句、軍備増強に走りアジア諸国の感情を傷つけ、野心をあらわにしているから。
少なくともそのスローガンを信じているか、それを信じた方が都合がいい、あるいは勝ち馬にのりたいと思っている者が多数派であることは事実のようである。
（※　本作はフィクションです）

「デモ」――作中デモで誰が最初に罵り声を上げたのかは不明（拘束されていないため）。そのため台詞の真偽もまた不明である。
米軍介入を宣言した演説を受けて沖縄県内でもデモが起こっていたのだが、皮肉なことにデモを実施したのは米軍基地反対デモの主催者たちが多かった。しかし、彼らが相手にしたのは日本の警察ではなかった…

「治安出動」――旧自衛隊時代の防衛出動以上の禁忌とされた事柄。
その名の通り治安維持のために防衛力を行使することである。
デモにかこつけて少なからぬ武器が使用されたために決断された。
なお、武器がどこから調達されたのかは不明。

「Sライン（島津ライン）」――作中にる通り熊本県水俣市―人吉盆地―宮崎県日向市を結んだライン。

戦国時代の島津氏と大友氏の勢力争いラインをもとにしているとされる。かつてのオリンピック作戦における「進出限界線」とほぼ重なる。

この線を防衛線とすべく国防軍は計画的な撤収を実施した。しかし、震災に伴う津波の被害が僅少であったためか避難命令に従わなかった人々が相当数この線の南に残っている。

「土佐清水市」――豊後水道をのぞむ四国の高知県南端に位置する市。

大震災に伴う大津波により壊滅状態となっており、伊方原発攻撃と中国軍の日本本土侵攻に伴い避難命令が発令され、住民はほぼ存在していない。

「占領地拡大」――日本本土に侵攻されているにも関わらず日本政府が屈服しないため、政治的に行われた方針。

すでに国防空軍・海軍鹿屋基地は中国軍の制圧下にあり、奄美大島の空港類とあわせ本土空襲の用意は整いつつあったが日本側の航空戦力は防空戦力に特化しているため苦戦が予想され、また九州における国防軍戦力は計画に撤収しつつあるため目に見える打撃が与えられないままであった。

そのため、多分に政治的な要素（国民感情や米軍介入を前にした焦り）で四国への牽制上陸と北九州への侵攻が決定されていた。

「国防海軍」――旧海上自衛隊から改組。震災対応のために最低限の戦力を残して東海地方から四国沖に出動していたため対応が遅れていた。戦力は駆逐艦（ＤＤ）５５（南西諸島沖で３隻沈没）、航空機搭載駆逐艦（ＤＤＨ）６、潜水艦２５を中心としている。

現状、震災対応を切り上げ、日本海側の第４艦隊を除く第１～第３艦隊が紀伊半島潮岬沖に集結しつつある。

周囲には米軍の空母「ジェラルド・フォード」を中心にした第７艦

隊が待機している。

「９０式戦車」――１９９０年に制式化された旧自衛隊の主力戦車。４４口径１２０ミリ砲を搭載しているものの、２０年の技術的進歩を鑑みると１０式戦車と比べると威力不足は否めない。北海道でソ連軍の攻撃を迎え撃つことを目的に作られたため重量は６０トン近く、日本本土での運用可能域はそれほど広くない。あくまでも「北海道専用の戦車」といえる。本州においては富士教導団にのみ配備。数百両単位で配備されているのは北海道のみである。

「５個師団…」――震災対応その他のために６個師団あまりが導入されている現在、自由に運用できる戦力の半数近くになる。ほとんどが旅団クラスであるが、近年の軍事的緊張から急速に装備更新が進んでいる。

第五話　「永田町＝平和愛好者　９月６日―Ｄａｙ＋５」（前書き）

連続投下します。

※　本作はフィクションです。実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。
また、本作は娯楽を唯一の目的としています。

第五話　「永田町＝平和愛好者　９月６日―Ｄａｙ＋５」

――西暦２０１Ｘ年９月６日　日本列島　首都東京　永田町　国会議事堂

「では、賛成の諸君はご起立願います。――賛成多数と認めます。よって本案は可決、成立しました。」

議長が宣言すると、雄叫びのようなどよめきが沸き起こり、続いて拍手が巻き起こった。

参考人と記されたタグを首から下げた制服の男と、閣僚席に陣取っていた政府首脳陣が握手を交わし、首相とともに議場に対し一礼する。

そんな彼らのもとに、多くの議員が握手を求めて集まってきていた。傍聴席や放送席ではレポーターが興奮気味に話し続けている。

この２０日あまり、臨時国会は大荒れ気味の中続いており、度重なる余震の中でも次々に法案を可決成立させ続けていた。

その集大成がこの日成立した「防衛戦争決議」であった。

自衛隊法を改正する形で制定された国防軍法によれば、突発的に戦争が開始された際に行われた軍事行動については国会決議による追認と方針についての承認が必要とされる。

すなわち、武力行使の範囲・攻撃対象・作戦方針についてである。

今回成立したのは、目下進行中である「南西日本有事」における武力行使対象であった。

いわく、「侵攻国の軍事的施設と軍事力を対象とし、日本国の領域内および侵攻国の戦力策源地に対し、日本国が保有するあらゆる戦

力を行使し武力行使を行うことを認める。」事実上の全面戦争の肯定であった。
さらに使用される戦力の制限はなされていない。
――当然、この決議にあらゆる方法を用いて反対する者もいた。

「なぜ、こんなことになってしまったのだ…」

平和友好党党首　超野友夫は暗い思いで議場の熱狂を見つめていた。
彼の周囲では、同志である友好党員が不安に染まった表情でこちらを見ているが、彼はそれを気遣ってやる余裕がなかった。
あらゆる感情をごった煮にしたような彼の瞳は、議場のある領域でさかんに拍手を送っている人々を目にとらえ、感情を爆発させようとしていたのだから。

「裏切り者…平和の道を捨てて軍国主義者に阿(おもね)る裏切り者が…貴様らは何をしたのか理解しているのか!?
貴様らは大政翼賛会を復活させたのだぞ!!」

彼の側からみれば、拍手を送っている連中、つまり彼らの「同志」であった憲政擁護党の連中は憎むに値する敵だった。
彼らは、沖縄で生じた武力衝突を「平和裏に解決する」ことを目的に団結する約定を交わしたばかりであったのだ。

「国防軍を設けるなどというアジア市民への裏切りをした我々に対する反感を和らげるには、ともかくも平和的に事態を解決することが必要だ」

と主張した超野に対し、憲政擁護党は「平和憲法の再構築のために

協力」すると返答。
そのために突発的事態に伴う防衛決議を求める国防軍を受けた緊急集会において、決議は牛歩戦術や審議引き延ばし、友好関係のマスメディアを用いた世論の「啓蒙」ですぐには行われなかったのだ。
超野は確信していた。アジア市民の一員である中国の人々は、約束を守ると。

「琉球――沖縄に存在する他国の軍が脅威なのであって、わが中国に琉球をわが物にする意思はない。
しかし、日本政府が美国（アメリカ）に逆らえないのなら、我々は琉球人民の声を代弁する政府を設けることで平和裏に美軍（米軍）を立ち退かせよう。
あなたたちはその中にあって日本人民を導き、正しい道に引き戻すよう努力してほしい。」

超野に対し、中国側のメッセージはそう語っていた。
彼は感動した。
日本の度重なる過ちをもアジア的な優しさを持つ中国は許そうとしているのだ。
そのためには、琉球に対する日本のちっぽけなプライドなどない方がいいではないか。
沖縄の民意が反映されるようにするための独立、それも正しい選択だ。
超野はそう考え、国防軍などという暴力機関の行動を阻止しようと全力を尽くしていたのである。

しかし、事態は彼の予想を超える勢いで進行した。

まず、原発攻撃。
これで震災対策のために日本人らしく団結しつつも戸惑いがちだっ

た日本国民のほぼすべてが目の色を変えた。
一部の愛国の熱情にまかせた暴走であるとのことであるが、ここは一言何かいってほしいといった超野に対し、努力すると返答した中国側だが、それ以後は接触すらできなくなった。
めげずに超野はかつての伝手を使ってマスメディア各社と「琉球独立の正当性」を啓蒙した。
国名が変わったところで琉球人は中国人と同じく、同じアジア市民、地球市民であることに変わりはないではないかと。
反応は鈍かったが、正しさはこちらにあると彼は信じていた。

が、そういっているうちに奄美諸島に中国軍は侵攻。
中国と主義主張を同じくしているはずの社会主義党があろうことか対中強硬論へ大きく方針転換したのである。
許しがたい裏切りであった。
平和憲法の護持という戦後民主主義の義務をないがしろにする愚行だと超野は怒りの声を上げたが、対する社会主義党は一言「正気を疑う」と返答するだけだった。
何が正気か。
日本を再び戦争させるなという正論の、どこが正気を疑うのか！
ただ、正義の刃に怖気づき、過去の断罪を恐れているだけでないか。
日本帝国主義という人類史上最悪の犯罪的存在の復活を許してはいけないというのに！

しかし、まだ間に合う。
平和を、直ちに平和を！と超野は叫んだ。
しかし、中華人民の怒りは予想以上であったらしい。
それはそうだろう。３５００万・・・いや５５００万人だったかな？いやいや「多くの」人民を巻き込み…いやそうそう、南京大虐殺や細菌兵器戦・化学兵器戦を行い大陸で悪行の限りを尽くした旧日本軍への怒りはたとえ１０００年たっても変わるはずがない。

日本本土に加えられた「懲罰」にわれわれは粛々と許しを請うべきところを、忌々しい現在の民自党極右反動政府は軍事関連の法律２１案を次々に提出し数にものをいわせて成立させ続け――ああ同志の裏切りも痛かった、それにしてもころりと軍国主義者に騙される国民のなんという情けなさか――今日この日を迎えたのだ。

「今に見ていろ、軍国主義者め。もう手段は択ばない！！」

超野は高らかに胸を張った。

彼の頭の中には「平和」の一字しか存在していなかった。

第五話　「永田町＝平和愛好者　９月６日―Ｄａｙ＋５」（後書き）

というわけで投下いたしました。
感想などお待ちしております。
次回は逆サイドから見た「永田町２（仮題）」の予定です。

【用語解説】

「ご起立を願います」――すでに大勢が判明しているために行われた。

「タグ」――参考人を示す身分証明書。この場合、防衛省から参考人として出廷した武官である。

「臨時国会」――震災対応のために緊急招集された。憲法の非常事態条項により内閣には非常時の大権が付与されているものの、それは避けるべきものであるという不文律があった。
災害時においてそれはある程度正しかったものの、中国軍の本土侵攻という非常事態においては裏目に出、初動の対応の遅れにつながってしまった。
議員たちは各々それぞれの理由で熱意を発揮しており、２０日あまり不眠不休の議員も多い。

「南西日本有事」――国会内での今次戦役の仮称。
舞台が南西諸島周辺と九州付近であるためにそう仮称されている。

「侵攻国の軍事的施設と…」――この決議においては敵策源地攻撃の手段と範囲についてゆるい制限しか加えられていない。

この一点において制限を加えるか否かが臨時国会において大きな争点となっていた。
しかし、空挺部隊による強襲や対艦弾道ミサイル攻撃に対処するために制限を加えるべきでないという意見や明らかになりつつあった中国軍の「日本人への」蛮行により押し切られた形となる。
そしてこの決議はのちに大きな意味を持つことになる。

「平和友好党」――本作はフィクションであり実在の人物・団体・国家とは一切関係ありません。

「憲政擁護党」――同上

「民自党」――同上

「超野友夫」――平和友好党党首。徹底的な反戦平和主義者であり、かつての憲法改正において反対したもののこれを阻止できなかったことに責任を感じていた。
そのため平和のための力の結集を図っている。

「極右反動政府」――いわゆる「一部の国」からの見方であるが、超野はそれに同意している。
確かに、国防軍、Ｎシェア、敵策源地攻撃は平和非武装の理想と比べれば極右である。

第六話　「永田町＝現実対応　９月６日―Ｄａｙ＋５」（前書き）

※　この物語はフィクションです。実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。
また、本作は娯楽を唯一の目的としています。

第六話　「永田町＝現実対応　９月６日―Ｄａｙ＋５」

――西暦２０１Ｘ年９月６日　日本列島　首都東京　永田町　国会議事堂

「おめでとう。鬼怒川君。」

「ありがとうございます。閣下。」

防衛省統合幕僚監部付の無任所武官である　鬼怒川洋介一等海佐は背筋を伸ばして軽く一礼した。

相手である内閣情報センター長　渡良瀬敬三はああそのまま、と軽く手で制した。

「高い代償を払ったが、これでようやく反撃が開始できる。」

「本当に、現場にはずいぶん待たせてしまいました。」

「７０年以上も、な。」

渡良瀬の目に剣呑な光が宿った。

鬼怒川は、「きた」と思った。

この渡良瀬は、４０代半ばで内閣情報センター長という要職にある「政治家」だ。

民自党に合流する以前は、今はなき改進党にいたのだが、その頃から比較的タカ派な政治家として知られている。

自衛官――いやいや軍人である鬼怒川からみればいささか空想じみたといえる程度に。

そんな彼を心配してか、現在の海辺首相は彼を徹底して現実に向き合わせる内閣情報センターの長に抜擢したのだが、鬼怒川のみるところ、彼はその剣呑さに磨きをかけたようだった。

「これで、我が国と米軍の、例の協定は発効することになるな。」

「はい。」

「か・・・いやマルニの所有に至る道は開かれた。予定は？」

「すでに準備は完了しつつあります。３日以内に初号弾の実験が可能となります。ですが――」

「わかっている。ガン・アセンブリ型の、しかもプルトニウム型の弾頭は技術的には邪道ということはよくわかっている。だが、諸外国に意思表明を行う意味ではこの一撃は歴史を変えるだろう。」

鬼怒川は、頷くにとどめた。
同時に苦々しくも思っている。

民主主義国家においては、国民は自身の頭脳水準以上の政治家は選べない。
少なくともそう見えるものは。
そう述べた厭世家がかつていた。
まったく至言であると鬼怒川は思う。
現在の状況にしたところで、国民が自ら選んだ道を歩いてきたための苦境であるに過ぎない。
冷戦終結後、依然として軍事的・政治的緊張状態が継続していたこの極東アジアにおいて、日本国は諸外国と一定の軍事バランスを保つ努力を自ら放棄した。

だからこそ、８０年代まではおとなしくしていた近隣諸国がいらぬ野心を燃やすことになったのではないのか。

景気？

うん確かに大事だろう。

景気対策に注ぎ込まれた資金について否をいうつもりはない。しかし、どこぞのなんとかセンターとかポスター代とかに１０兆円を注ぎ込む前に、文書のコピー代とかトイレットペーパー代を隊員持ちにさせる異常な状況とか、官舎の耐震化にさえ事欠くような予算で保守点検を行えとするような異常な状態にもう少し目を向ける必要はなかったのか。

まあ今いっても詮無いことだが、そんな「無関心」が日本本土を軍靴で踏みにじられるという屈辱を生んでいるのに、今度は反動とばかりにまったく逆の方向へ走るとは――

戦略原潜？　原子力正規空母？　弾道ミサイル？　アホか。そんな金がどこにある。

現在の予算でやれ？

冗談じゃない。そんなことをしたら我々は「戦略兵器運用公団」になってしまう。

ＥＵみたく周囲が何十年かことによると１０００年単位で恩讐の彼方に殺しあいまくった結果の理解を交わしているならその選択もあり得るだろう。

だがわが国（「この国」などと他人行儀なことを言う連中が鬼怒川は嫌いだった）の周囲はまだ冷戦中なのだ。

予算を相応に上げる？

アホか。

国家を破産させる気か？日本はレーガンかブレジネフでも必要なほ

ど世界中に出張っているわけではないじゃあないか。
国防予算５０兆円とか笑い話以前に財務官僚が市ヶ谷に殴り込みに来るぞ。百人単位で。

ああだがまぁ、受けて立つのも面白いかもしれない。
確かに奴らは「怨敵」であるのだから。

そもそも文民統制（シビリアン・コントロール）と文民専制、いやいや文民による圧制（シビリアン・ティラノス）を同一視しているような世の常識が問題なのである。
いや戦後思想の一環である強烈な反軍思想の行き過ぎが問題なのであって――

「こちらが見たところ、向こうはあわてて増援を送ろうとしているようだ。」

「――でしょうね。」

いかんいかん。思考が脱線していた。

鬼怒川はあわてて渡良瀬の言葉の方向に意識を向けた。
内閣情報センターは、国内の保安関連の諸組織の一部を分離しそれにかつての内閣衛星センターを統合して設立された組織だ。
つまり、国産偵察衛星である「情報収集衛星」を運用し、その情報を分析する立場にある。
そして日米安保条約にのっとり情報提供された各種衛星写真やレーダー画像もその分析対象であった。

彼らは規模こそ諸外国に劣るものの、その観察対象を絞りつつ日本人らしい変質狂的な職人芸をもって情報分析を行っていたのである。

組織の冗長系がほとんどなくシステム的に無理が重なっているところを現場の人間に無理をおしつけているあたり、旧日本軍からまったく進歩していないともいえるが、今の状況ではそれがうまく働いているようであった。

そしてそんな変人集団が分析したところ、中国本土においてはいわゆる瀋陽軍区（東北軍区）と南京軍区の部隊が大々的に動きつつあり、また東海艦隊と北海艦隊の母港では赤外線反応が活発化しつつある。

米軍参戦前に日本本土へ増援を送り込むつもりらしい。

素直に引き上げればいいものだが、せっかく日帝を押し込んだにもかかわらず撤退するのはメンツが許さないらしい。

このあたり鬼怒川には理解し難いが、そういうものなのだと彼は納得することにしている。

語り得ぬことについては沈黙すべしと古の哲人もいっているではないか。

いや、国民感情かもしれぬな。

と、鬼怒川は思った。

わが国において、隣国の核保有要求がドミノ式に我が国の「核共同所有（Ｎ－シェアリング）」論を呼んだように、かの中国においても世論というやつは手の付けられない怪物であるらしい。

まぁ確かに、あれだけあることないこと吹き込まれていてその相手に一撃を加えられたのなら熱狂するのは当然か。

だが、何をするにも相手があることを、あの世界の中心を自称する連中は忘れているようだ。

とどのつまり、連中は「世界の中心に従うのは当然」と思っている。

だからこそこれだけ安易に武力の行使に及ぶことを求めたのだし、その内容だって「蛮族征伐」、３０００年前とまったく変わってい

ない。
だから簡単に征服地で好き勝手できるのだ。
おかげで――こっちも対応する羽目になる。

「例の発表が行われると、退路は断たれる。彼らが自暴自棄になることも考えられるが。」

「大丈夫です。」

鬼怒川は、その一点には自信を持って言った。

「ここは日本本土です。奴らに、落とし前をつけさせてやるのに、『わが軍』と日米同盟は十分な力を持っています。」

鬼怒川は、現実主義者だった。
軍人とはすべからく現実主義者であり、逆説的な平和主義者である。で、あるならば、彼は対応しなければならない。
アメリカ合衆国の保有する戦略原潜を「共同所有」することになる国防海軍にも。
米軍貸与と名前のラベルを張り替えた核物質を使い、かつての高速中性子炉で燃やして作り出した高純度プルトニウム２３９を用いて作り出した「初号弾」、それをネバダの砂漠の地下で炸裂させるという現実にも。

そして――そういった行動に今や国民の大半が快哉を叫ぶであろうという現実にも。

鬼怒川は憂鬱だった。
彼は、なぜ８０年近く前に日本列島が焦土となったのか、その発端をよく知っていたからである。

第六話　「永田町＝現実対応　９月６日―Ｄａｙ＋５」（後書き）

というわけで、日本側の反撃準備の一幕です。
書いててこの世界の未来が心配になってきました。

【用語解説】

「鬼怒川洋介」――統合幕僚監部所属の無任所武官という名の使い走りである一等海佐。現政権発足時に米軍との「Ｎ―シェアリング」に関する協議のために渡米し、帰国した。

「渡良瀬敬三」――若干４０代である若手政治家。タカ派。内閣情報センター長であり、その語り口と若手であるための人気はなかなかのもの。
軍備拡張を唱え、憲法改正を成し遂げて退任した前政権以上に強硬な「積極的防衛論」を持論としている。

「ガン・アセンブリ型」――二つの対象物質を円筒形の容器内の両端に配し、高性能爆薬により結合させることである反応を起こすに足る「臨界量」を達成する方式のこと。かつてはガンバレル型ともいわれた。インプロージョン型といわれる別方式に比べると装置が巨大になりがちである。

「プルトニウム２３９」――ウラニウム２３８が高速中性子を吸収することで生成される。

「マルニ」――高名な物理学者仁科芳雄博士の頭文字をとったある装置の暗号名、旧日本軍のそれと基本的に同じ

「情報収集衛星」――実質的な偵察衛星。作中においてはカメラ型とレーダー型に加え、センサー型といわれる早期警戒型も登場しており、弾道ミサイル防衛に威力を発揮することを期待されていた。しかし、震災対応に手いっぱいであったことと有形無形の妨害もあって防衛出動発令が遅れ、突発事態による弾道ミサイル迎撃は失敗に終わった。
なお、作中ではＧＰＳ衛星の補完用として準天頂衛星シリーズも実働中である。

「日帝を押し込んだ」――現在の中国国内でいわれている「名誉ある勝利」論の共通認識。
勝利の対価を認めるか完全降伏するまで戦闘を停止するべきでないという論陣が張られている。
主力部隊を派出している南京軍区や瀋陽軍区のおひざ元で過激かつ強硬であるが、北京をのぞく各地では強硬ではあるが過激ではない論調である。
しかし日本の降伏という「勝利の追及」においては一貫している。

「初号弾」――三沢基地から米国内に空輸済み。製造には青森県内に保管されていた高速中性子炉で生産された高純度プルトニウム２３９が用いられた。

「高速中性子炉」――通常の核反応動力炉においては、ウラン２３５やプルトニウム２３９の核分裂を促すために熱中性子炉と呼ばれる比較的低エネルギーの中性子を用いるが、対して高速中性子炉はエネルギー量の高い高速中性子をそのまま用いることで核分裂を起こさないウラン２３８という同位体に中性子を吸収させ、プルトニウム２３９に核変換する。
こうした炉を「転換炉」とも呼び、分裂する燃料であるウラン２３

５よりも生成されるプルトニウム２３９の方が多い炉のことを「高速増殖炉」と呼ぶ。

作中においては高速増殖炉において純度９７．５パーセント以上のプルトニウムが合計２２０キログラム以上製造され、保管中であった。

なお、それ以外にも純度を問わないプルトニウムについては国内に６０００トンあまりが貯留されている。

また、現代の兵器級プルトニウムの臨界量は作中世界においては１０キロあまりである。

第七話　「間章＝外交的異変　９月８日―Ｄａｙ＋７」（前書き）

つなぎのような話です。あまり進んでいません（泣）

※　作中に暴力的かつ作中登場人物の認識につき現実では不適切な描写が出てきます。そういったものが苦手な方には中盤から後半を読まれるのはお勧めしません。

こうした描写をするのが苦手ですので、さらりと書いておりますがあまり気持ちのいいものではありませんね。

※　本作はフィクションです。実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。また、本作はいかなる差別的事案についてもこれを許容するものではありません。

第七話　「間章＝外交的異変　９月８日―Ｄａｙ＋７」

――「はい。ではご質問を…そちらの方。
ＡＲ通信のイブラヒムさん。
これが両国間の同盟に相当するのか、ですね。
はい、現状では本条約は「相互安全保障条約」であり、あくまでも両国の極東アジア・太平洋方面での相互利益の追求と協調を両立させるための条約であります。
その点ではＹｅｓでありＮｏであります。
次は…旭新聞の阪東さん。
はい。目下継続中の「戦争」に参戦するのかですね。
先にも述べました通り、この条約は軍事同盟ではありません。あちらが適切に判断されることでしょう。
お手元にあります条文の通りあくまでも平和の維持こそが両国に求められる役割であると確認しています。
え？信用できるのか？
条約を結んだ時点でわが国は先方を信頼します。相互の信頼に基づく国際関係こそ、疑心暗鬼に基づくそれより永続の可能性が高いということは歴史が証明しています。
はいはい。その通りです。
では次…日日（にちにち）の山元さん。
Ｎシェアリングは核保有に相当するのか、ＮＰＴとの兼ね合いはとのご質問ですね。
わが国がこのたびＮシェアリングによりまして共同管理することになりました戦略弾道ミサイル原潜『長門』と『陸奥』、旧称『アラバマ』と『アラスカ』はあくまでもアメリカ合衆国海軍の所属であります。
従いまして運用も、所有も、いずれの面においても米国政府のそれによるものとなることは疑いの余地はありません。

しかし、我が国に対する核攻撃に対しましては『米国政府との同意に基づき』、『我が国に対する戦略的攻撃能力の剥奪に必要な最低限度の武力行使を行う』ことになります。
それに用いられる弾頭数その他につきましては、日米安全保障条約ならびに本次条約に基づく国防機密に相当しますので回答を控えさせていただきます。
ＮＰＴに関してではありますが、製造されましたＮ弾頭に使用される原料物質は米国から平和利用目的で購入された物質であります。しかしながらかかる時局に鑑みまして、原料物質を対外有償援助の一環として差額を購入、Ｎ弾頭を米国政府と我が国政府の共同所有物品としておりますので問題ないと考えております。
はい。我が国の独自弾頭保有が条約に違反する可能性ですね？
保有については、管理を米国海軍ならびに米国政府へ委託しておりますので問題ないと考えております。
この観点から申せば、仮に我が国国内におきまして米国政府からの委託に基づき弾頭製造が実施されましても、それは米国と我が国の共同管理下において実施されているものでありまして、我が国は濃縮許可を取得していること、そして米国につきましては言わずもがなであることを考えますれば問題ないものと考えております。
また、「仮に」いいですか、仮にいかな条約といえども我が国の安全に対する急迫不正の侵害に対しましては国家の生存権を優先することは国際法上の常識であります。
我が国独自の弾頭保有につきましては、日米安全保障条約におきます国防機密に相当しますので肯定も否定もいたしません。
はい。肯定も否定もいたしません。
では次、ロイターのユーグさん。
はい。ご質問はこの条約が今次戦役にもたらす影響についてどう考えているかですね。
我が国といたしましては、いかなる場合におきましても我が国の主権と国民の生命財産を粛々と守るという決意に変わりはありません。

ですので政府としましては…
個人的な意見ですか？
それについては回答を控えさせていただきます。
ですが、準備が整いつつあることは確かですね。
はい。
以上です。

以上で終わりです！
以上で日露平和条約ならびに日露相互安全保障条約の締結に伴います記者会見を終了いたします！！」

――西暦２０１Ｘ年９月８日　日本列島　九州　鹿児島市（中国軍占領下）

「どういうことだ！　これは！？　なぜこんなことになったのだ！！」

中国陸軍「対日」遠征軍司令　鄭又新大将が怒りの声を上げた。
占領下にある鹿児島市の中央部、鹿児島国際ホテル最上階のスイートルームからは、煙を上げている市内の様子が見て取れた。

普段ならば遠く桜島の絶景を楽しむことができるこの部屋は、現在の鹿児島においてはもっとも治安が安定した場所である。
それ以外の場所は、旺盛な――旺盛すぎる征服欲のはけ口として、帝国主義者への「懲罰」や義挙に立った軍への「慰労」に使われており、お世辞にも治安はよろしくない。
有り体にいえば、中華の恨みを晴らすための略奪暴行が行われてい

たのである。

兵士どもに与えるには高価すぎる美術品については司令部直轄部隊が「確保」したのであるが、それ以外については「各個人の自由」とされた。

そのため、上陸を果たした１０万もの兵士たちは「自由」を満喫したのであった。

日本人という鬼畜どもはそれをされて当然の立場にある。

それに、新たに中華のものになった土地では、あらゆるものが中華のものであるのだから何をしてもいいのだ。

お偉方がいずれ根こそぎ持っていくのならその前におこぼれにあずからねばならない。

本土でも日本鬼子を懲らしめているのだから奴らよりも苦労して、命がけの戦場に立った自分たちはさらに報われるべきなのである。

・・・こうした思考のもと、彼らは学校で教えられていた「日本鬼子の蛮行」をやり返すことにした。

腐っても先進国を名乗る豊かな国だ。恵まれない、しかし次代の覇権国家たる大中華はそうした「不正に入手された中華の富」を回収しなければならないのだ。

誰かが咎める？

かつてやられたことをやり返しただけだ。

野蛮？

日帝に言え。

たとえそうだとしても反省して心から謝罪しない奴らが悪い。

そう自己肯定を行った兵士たちの所業は、占領後に市街地から盛大に立ち上った黒煙や、道端で「制裁」された憎き日本鬼子どもの残骸、そして中華の偉大な血で日帝の悪しき遺伝子を清められた女性たちといった一目で分かる状況に集約されていたといえるだろう。

止める者はごく少数だった。
いや、率先してそれに加わったものの方が多いといった方がいいだろう。
何しろ、それが「正義」なのだ。
たとえ正義でなかったとしても、負ける方が悪い。

が、そんな状況に酔っていられた遠征軍は、先ほど冷や水を浴びせられていた。
思い通りになっていた現状が、思い通りにならなくなった。
この落差は兵士や士官、そして将軍たちを激昂させるのに十分だったのである。

寝起きらしい不健康的な表情をどす黒く染める鄭大将はそんな一人だった。
ここ数日の激務の後で「堪能」する栄誉を与えてやった女どもは下がらせてある。
見れば、急きょ集めた参謀どもは誰も似たような一部が整っていない格好であり、表情の裏には酒池肉林を邪魔された不満がありありと見て取れた。
それが逆に鄭の感情を逆なでした。

「日本鬼子は核で脅せばすぐに折れるといったのは貴様だったな！」
鄭は参謀の一人を睨みつけた。

「は、はい。」

皆も同じことをいっていたではないかといった風に参謀は周囲を見回すが、誰もが目をそらす。

鄭の怒りを買いたくないためだ。

「それがどうだ！われらの膺懲の一撃を受けても奴らは反省などせず、あろうことか大中華に牙をむいてきたぞ！」

「これは情報部の怠慢です！」

「そんなことは分かっている！」

自分の責任でないと叫ぶ参謀を鄭は一喝した。

「ここまではうまくいったのだ。何だ？何が間違っていた？」

鄭は、アルコールを急速に脳から追い出しつつ考えた。

「日本人め。あの情けなさや無定見さは擬態だったのか？　悪辣な。日本鬼子め。東洋鬼め。全アジアの恥め。」

今回の「義挙」に決定的な役割を果たし、軍区やひいては北京での栄達を遂げるという鄭の「ささやかな」望みの先行きは不透明になりつつあった。

が、彼は本当の意味では焦っていなかった。なぜなら――

――9月8日朝、モスクワと東京から世界が驚愕する発表がなされ

た。

「日露平和条約」・「日露相互安全保障条約」の締結と米国と日本間の「核共有協定（Ｎ－シェアリング）」の成立である。

長年の懸案であった日露間の領土紛争が双方一歩引く形で解決され、その代償としていくらかの資源開発協力を飲んだ日本は北方の国境地帯に張り付けていた戦力のフリーハンドを得た。

さらに世界を驚愕させたのは、日本の事実上の核武装に相当する「核共有協定」の内容だった。

弾頭数は公表されていないものの、日本側が予算を提供し、さらには原料物質や装置の「一部」を製造する形でベーリング海や北極海に米軍籍でありながら日米共同管理の戦略ミサイル原潜を配備する。

海中を行動する原潜を発射台とした弾道ミサイルは極めて排除が難しい核戦力のひとつである。

すでに配備されているオハイオ級戦略ミサイル原潜の名義ラベルを張り替える形でなされたこの発表は、事実上日本に相互確証破壊能力を与えたに等しいものであった。

中国側にとっては悪夢に等しい。

戦力においては圧倒的に勝るかと思われた対日武力攻撃は米軍参戦に伴い互角以上に持ち込まれつつあり、さらに北方から戦力が転用されつつある。

いくら本土の一部を占領しているとはいっても、海上においてはほぼ無傷の日本海軍と米艦隊が存在し、空においても圧倒的優勢とはいっていない。

しかも、切り札となるべき核兵器を使用すれば自動的に自国の本土に核弾頭が降り注ぐことになるのである。

情勢は今後どんどん悪化していくかもしれなかった。

すでに中国・インド国境地帯においては戦力の増強がなされつつあり、抜け目ないロシアも極東管区に戦力を集めつつある。

そして、中国に恨み骨髄に達しているベトナムやフィリピンも。

「このあたりが潮時かもしれない。」

一部の高官たちはそう囁きはじめた。

だが――

第七話　「間章＝外交的異変　９月８日―Ｄａｙ＋７」（後書き）

【用語解説】

「戦略弾道ミサイル原潜」――原子力潜水艦の中に複数の弾道ミサイル発射管（縦型）を設けた型。戦略型原潜と略称する。
海中を移動するミサイル発射台的な役割である。
その役割は、陸上の大陸間弾道ミサイルが敵の核攻撃によって破壊された際にも確実に生き残り、敵国に対して報復核攻撃を実施することにある。
そのために弾道ミサイル原潜は常に海上に一定数があり、いつ攻撃を受けても対処が可能な「核パトロール」を実施している。
（ミサイルの射程は５０００キロ以上に達するため必ずしも目標に接近する必要はなく、安全な自国勢力圏の海底に潜んでいる。）
潜水艦に対する攻撃力は比較的低いため、周囲に護衛の潜水艦がつくことが多い。
なお、こうした原潜や敵の艦艇を排除する目的で魚雷などを主力兵装としているものは「攻撃型原潜」と称する。

「『長門』『陸奥』」――オハイオ級弾道ミサイル原潜。旧称を「アラバマ」と「アラスカ」。オハイオ級原潜は戦略原潜として７０年代末から就役を開始し、冷戦末期の米軍核報復能力の主力を担った。
作中の「アラバマ」と「アラスカ」はオハイオ級原潜の６番艦と７番艦。母港は米西海岸のワシントン州バンゴール。
１９８５年および１９８６年就役と作中においては最古参に位置する弾道ミサイル原潜の一角である。
搭載している核ミサイルは１隻あたりトライデント?型ＳＬＢＭ（潜水艦発射型弾道ミサイル）２４発である。

本来は1発あたり10発の核弾頭を搭載できるが、核軍縮の一環として現在は1発あたり1基とされている。
作中においては、日米共同管理となり「長門」「陸奥」と改名。
代艦建造費用として日本側から一定予算が拠出される。
2隻いるのは1隻が常に海上で任務にあたるためである。
将来的には日本製の原潜を日米共同所有することも視野に入れて話が進んでいる。

「日露平和条約」――2201X年に締結された日露間の平和条約。
締結に伴い、まずは北方領土のうち歯舞・色丹・国後の三島が返還。
択捉島については日本側の潜在的主権を確認したうえで暫定的自治という措置がとられた。
この条約の締結に伴い、日本側は北海道に展開している北部方面隊から4個師団を中核とする大兵力を引き抜くことができた。

「日露相互安全保障条約」――相互不可侵と安全保障面での共同歩調がうたわれている。
その一環としてロシア側軍艦の北海道などの港湾での補給活動などが許可された。
日本側もロシア側基地の使用が可能となるなどメリットはある。
なお、返還された択捉島の基地群についての使用権についてはロシア側も保持。
この協定によって日本側は北日本海とベーリング海を用いた作戦が可能となり、ロシア側は日本というユーラシア大陸の「蓋」を逆に「出城」とすることができるようになった。

「鹿児島」――中国軍占領下。
住民は避難していたものの強制避難は実施できなかったため、少なくない住民が現地に残っていた。
占領初日に大火災が発生。散発的に火災が続いている。

占領地における治安状況はどこも同様であり、中国側の対日感情がいかなるものかを如実に物語っている。

「装置の一部」――核弾頭の原料物質は基本的に米国から輸入されたウランを核変換したプルトニウムが使用される。その加工と濃縮を日本側が受け持っているという暗示でもある。

「相互確証破壊」――一方が先制核攻撃を実施したとしても、必ずその報復として核攻撃を行われるという状況のこと。冷戦時にはいったん核戦争となれば「最低限でも」相互に国家の屋台骨が揺らぐほどの破壊がもたらされるという状態が成立していた。略称は「ＭＡＤ」とされる。まさに「狂った理論」である。

「核共有協定（Ｎ－シェアリング）」――共同で核兵器を管理する協定のこと。冷戦時には西ドイツと米国の間で協定が結ばれ、戦術核兵器を西独軍は「間接的に」保有していた。この場合、所有権はあくまでも米軍にある。今作の場合、弾頭所有権までも共有しているため日本側の事実上の核武装に相当していた。

「このあたりが潮時」――現状で南西諸島の大部分と南九州を占領しているためいくらかの譲歩を強いることができるという見込みから。

対日攻撃に投入されている兵力は陸軍に関しては一部であるが（約２０万名）、空海軍はその７割近くとなっている。そのため、もしこれが日米両軍による攻撃で壊滅する事態となれば長大な国境線の防衛が困難となってしまうという切実な事情があった。

この事態を抑止するために核カードをちらつかせていたのであるが、日米の核共有協定によって抑止のタガは外れてしまった。

第八話　「伊豆沖＝対潜艦隊　９月８日―Ｄａｙ＋７」（前書き）

ほとんどが説明文のような間章です。
今まで出番があまりなかった海上と海中についての説明になっております。

※　本作はフィクションです。実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。

第八話　「伊豆沖＝対潜艦隊　９月８日―Ｄａｙ＋７」

――西暦２０１Ｘ年９月８日　日本列島　伊豆半島　下田沖

艦隊は輪形陣を形成して航行していた。
外周を地方隊から抽出したＤＥと呼ばれる小型のフリゲート艦や「高波」型を中心にした汎用駆逐艦群が固め、内周には汎用護衛艦の対空型である「秋月」型や、いわゆるイージス艦であるミサイル駆逐艦「金剛」型、そして対潜空母ともいうべきヘリ空母「日向」型とその拡大型である「扶桑」型が位置している。

周囲は間断なく厚木基地から発進した哨戒機Ｐ３Ｃ「オライオン（オリオン）」が巡回し、時折上空にはシャープな格好をした戦闘機が飛来していた。
すべてを見渡すことができるのであればさぞかし壮観であろう。
しかし、それはできない。
天候が晴れであっても水平線という物理的距離の問題があるためだ。
ミサイルなどの誘導兵器が主力をつとめる時代にあってはかつての太平洋戦争中のように有視界の範囲に軍艦が密集するようなことはできない。
そうすればその分距離が近づきすぎ、超音速で飛来するミサイルに対応する時間が限られてしまうのだ。
音速の３倍近くで飛来する最新の対艦ミサイルなど、１秒で１キロも進んでしまうのだから当然ともいえる。

日本国防海軍においては戦時の１艦あたりの距離は最低でも３キロほど離れることになっている。
そのため、艦橋などといった水面から高い場所からみても輪形陣の

全体像を把握することは非常に困難であった。

しかし、そんな状況にあっても輪形陣の中央部からはその片鱗をうかがうことができる。

中央を構成しているのは、一般にも「見栄えがいい」艦艇ばかりであるし、輪形陣というのは中央部の重要な艦艇を守るために存在する。

つまり中央部ではそれだけ大型で重要な艦艇が密集しているという証左でもある。

事実、国防海軍が輪形陣の中央部に排していたのは同時多目標迎撃能力に優れたイージス艦「金剛」型４隻と、一見して空母であるヘリ空母「日向」型と「扶桑」型の４隻だ。

ヘリ空母といっても侮ってはいけない。

昨年の改装によってその飛行甲板には耐熱塗装が施されており、「扶桑」型などはスキージャンプと呼ばれる固定翼機の発艦に必要な設備すら設けている。

ようやく旧式機からの代替がはじまったばかりのＦ３５戦闘機Ｂ型を用いれば限定的ながらもＳ／ＶＴＯＬ（短距離・垂直離着陸機）空母としての運用すら可能であるのだ。

もっとも、肝心のＢ型はいまだに生産国であるアメリカですら配備がはじまったばかりであるし、国防空軍が保有するわずか数機のＦ３５もＡ型といわれる陸上機型に過ぎない。

こうした問題を解決すべく国防軍は野心的な計画に基づき、このヘリ空母たちに「攻撃力」を与えることに成功していた。

「発艦用意。」

航空機運用のために右舷側に寄せられたアイランド（島型艦橋）の後部には、航空機運用を統括する航空管制室が存在する。
そこから、艦上に向けて指令が飛んだ。
洋上での航空機運用は着艦の方が難しいためにこうした管制室はえてして艦尾を見やすい位置に存在している。
そのため、「扶桑」のサイドエレベーターに載せられて飛行甲板に上がってくる「それ」はよく見ることができた。

のっぺりした形状である。
全長は１１メートルほど。洋上迷彩色である群青に塗られ、ずんぐりしたボールペンのような胴体の左右には二重デルタ翼（三角形を二つ組み合わせた翼）である主翼と水平尾翼が突出し、機体後部には垂直尾翼があるという基本的な形状はよく見る戦闘機と変わりがない。
しかし、小さい。
そして、普通の戦闘機や支援戦闘機（戦闘攻撃機）であるのならあるはずのものが、ない。
その機体にはキャノピー（ガラス製の風防）と、コクピットが存在していなかったのだ。

三菱ＡＦＱ－２「強風」

この機体はそう呼ばれていた。
種類を示す「ＡＦ（戦闘攻撃機）」のあとにＱという字がついているものは「無人機」であることを示す。
この機体は、空対艦ミサイル２発または空対地（対戦車）ミサイル４発、空対空ミサイル２発を搭載して攻撃を行う能力を有している。
最大速度こそマッハ１．４程度であるものの、国防軍にとっては何より「海上で運用できる」という点こそが重要だった。
戦闘機のような空中格闘戦こそできないものの、空中のミサイル発

射台兼偵察ポッドとしての役割は全うできる。
攻撃可能範囲がそれだけ広がるのだ。
ミサイルの射程プラス８００キロから１０００キロ程度の攻撃範囲は、空母機動部隊のそれと実質的に同等である。
であるからこそ００年代後半から開発が開始された無人機システムの第二世代として就役しはじめたばかりのこの機体は大急ぎで量産が行われていたのであるし、この機を運用するためだけに４隻のヘリ空母の艦首には最新鋭の装置すら搭載されていたのだ。

発着艦表示灯が用意を示す黄色に変わると、飛行甲板に待機していた甲板員たちは小型の車両を用いて「強風」を艦の中央前よりの位置に移動させはじめた。
後方ではエレベーターが動き、次の「強風」を甲板に上げはじめている。
定位置に達した「強風」を甲板員たちは甲板のあるフックに装着しはじめた。
すでにエンジンはアイドリング状態で始動されていた。自動シーケンスに従ってフラップや尾翼の方向舵が左右に動作確認を行い始める。
降着用の前車輪に備え付けられた金具と甲板のフックを固定した甲板員たちは大急ぎで飛行甲板脇にある退避施設へと飛び込む。
すると、表示灯が青に変わった。

管制室といくらかのやりとりをして異常がないことを確認し、ジェットエンジンの高音が発艦レベルにまで高まっていることを肌で認めた甲板員は、スイッチをひねった。
すると、大電流がフレミングの法則に従って「カタパルト」上の機体を一気に加速。
最新の電磁カタパルトで十分に加速された「強風」は艦の中央軸線

上に放り出された。
艦首から空中に放たれた時点で「強風」は内蔵されたターボファンエンジンを全開にしている。

すぐに、艦内の多目的室に設けられた操縦装置を動かすオペレーターが操縦桿を動かし、「強風」は力強く空へ舞いあがっていく。
あとはその繰り返しだ。
今回の「強風」が搭載しているのは、主翼の左右パイロンに対潜水艦用の魚雷が2本と、機体下部の海面下を探るセンサーポッド。
磁気探知機と赤外線センサーで構成された簡易型にソノブイ（聴音ブイ）が数本という構成であるセンサーポッドはそれなりに重く、魚雷といっても射程の短い短魚雷でも2本を搭載するのが限界となる。
対艦攻撃時にはこの短魚雷とポッドが対艦ミサイル（ＡＳＭ）2発になり、限定的な対空任務の際には空飛ぶ対空ミサイルプラットフォームとして短距離空対空ミサイル4発ないしは空対空ミサイル（ＡＡＭ）2発を搭載するのがこの「強風」の基本構成だった。
無理をするのならもっと搭載できないこともないのであるが、それだとカタパルトに加えて使い捨てロケットブースターがなければ離陸（発艦）できないことになるからめったなことでは行われない。

「フォックス・シルバー（ＦＳ＝扶桑搭載機）３－３および３－４発進。続いてフォックス・シルバー２－１および２－２の収容作業に入ります。」

管制室ではルーチン通りに収容と発艦のローテーションが行われていた。

対潜短魚雷を搭載していることからわかるように、ここ1週間ほどの間日本国防海軍は対潜作戦を主として実施していた。

というのも、南西諸島と南九州が敵占領下に入ってから、中国海軍の潜水艦隊が活発な活動を行っているためだ。

その戦力は通常動力型潜水艦８０隻近くに加え、原子力潜水艦８隻、これらの大半が日本近海へ出動し攻撃の機会を狙っている。

海底の定置ソナーが知らせるまでもなく、その状況はすでに既知である。

かつての太平洋戦争において自国を飢餓状態寸前にまで追い込んだ潜水艦による通商破壊という悪夢が再現されるのを日本側は恐れた。

そのため、日本側は世界第二ともいわれるその対潜水艦戦闘能力の大半を海中に向け、これまでに多くの敵潜水艦を屠ってきている。

どういうわけか中国海軍の潜水艦隊は商船には目もくれず、巡視船や軍艦には貪欲に食らいついてきた。

大物狙い。

かつて旧帝国海軍の潜水艦隊が犯した悪弊だった。

開戦初頭に撃沈された3隻の軍艦のうち2隻は、そうした潜水艦の仕業だったのである。

国防海軍はこれを利用することにした。

見目麗しい大型艦を集め、潜水艦をおびき寄せるエサにすることにしたのだ。

躍り食いしたくなるような大型艦がひしめく大艦隊。

陸軍に比べて金食い虫でありながらも目立った成果を上げていない中国海軍にとっては涎どころか喉から手が出るほど魅力的な獲物だ。

しかし、それは死の罠。

創設以来対潜哨戒をその任務としていた海上自衛隊の後身である国防海軍はわざわざ寄ってくる潜水艦を見つけ次第叩けばいい。

――かくて、海上に集結した国防海軍の大艦隊は、１００機近くの対潜哨戒機を周囲に侍らせつつ、潜水艦狩りに狂奔していたのである。

まずは海底や港湾に配備された定置ソナー群が南西諸島沖から海上に進出する敵潜水艦群を探知。

続いて高速を誇る陸上配備の対潜哨戒機が海中に潜む敵潜水艦を磁気探知機で探知しソノブイで位置を特定すると、それを受けた洋上のヘリ空母群から無人攻撃機が飛来する。

そして頭上から対潜短魚雷が降り注ぐ。

もしもこの攻撃をかいくぐって目標である日本艦隊に接近できたとしても、こんどは水上艦から対潜ミサイル「アスロック」の雨が待ち構えているのだ。

しかも一昨日からは日米安保条約にのっとった米軍参戦に伴い、本職の空母機動部隊までもがこの潜水艦狩りに加わっていた。

冷戦時のソ連潜水艦群を相手にすべく磨き上げられた戦闘集団にとっては、旧式化した沿岸用通常動力潜水艦と少数の原子力潜水艦など獲物に過ぎない。

警戒すべきであるのはロシア製のキロ級やそれを基本とした新造潜水艦だったが、数は知れている。

さらに中国海軍にとってたちの悪いことに、北海艦隊と東海艦隊――いや南京軍区と瀋陽軍区の意地の張り合いは現場の潜水艦たちを数十隻単位で飽和攻撃というように組織だって行動させることを困難にしていた。

つまるところ、中国海軍潜水艦隊は五月雨式に獲物を献上しているようなものだったのであった。

「フォックス・シルバー２―３、圧潰音確認。目標撃沈。」

――太平洋沿岸に集結した日米の大艦隊に対する攻撃は、潜水艦が主体となって行われ、いたずらに損害のみを積み重ねていった。

中国軍にとっては、南九州に展開する占領軍という極上のエサに対し日本側が食いつくのを待っている形であったのだが、米軍参戦によって「３０００トン以上の大型艦だけでも６０隻以上」という常軌を逸した数に増えつつあった日米艦隊に対し恐怖が勝ったのである。

それでも、上陸橋頭堡に対していつか行われる強襲に備えて中国軍は威力偵察と銘打った主力艦攻撃を続行していた。

しかし――

第八話　「伊豆沖＝対潜艦隊　９月８日―Ｄａｙ＋７」（後書き）

いつかくる逆襲の時を待って雌伏の時を過ごす国防海軍と提督たちを描いていたと思ったら、「対潜無双」になってしまった…

解せぬ…

明日の更新は未定です。

【用語解説】

「高波型」――２００３年より就役を開始した汎用護衛艦（駆逐艦）。

むらさめ（村雨）型護衛艦の改良型として建造された。

外見上の違いはあまり見受けられないものの、高速化されたデータリンクシステムや戦術コンピュータ、ＶＬＳ（ミサイル垂直発射管）を対空用と対潜用で共用化しているなど質的な強化がなされている。

同型艦は５隻。日本製駆逐艦の常として対潜能力を重視しているが対空戦闘能力も高い。また、ステルス設計を取り入れた最初の日本艦でもある。

全長１５１メートル、満載排水量６３００トンと大戦中の軽巡洋艦に匹敵する大きさとなっており、大洋で作戦する米海軍を除けばこのクラスが「汎用」として量産されている日本の海上戦力の強力さを示しているともいえよう。

国防軍設立とともに駆逐艦に種別変更。なお、国防軍艦艇はいずれも艦名を漢字に変更している。

「金剛型」――旧称イージス艦「こんごう」型。
日本初のイージスシステム搭載型ミサイル護衛艦として１９９３年に就役した。その真価は搭載されるイージスシステムで、同時に３００以上の空中目標を識別し同時に５発以上の対空ミサイルを誘導してミサイル飽和攻撃を迎撃するという能力（初期型）を持つ。
２１世紀初頭からは弾道ミサイル防衛システムの一環としての改装が施され、宇宙空間から飛来してくる弾道ミサイルを迎撃できる能力も持つに至っている。
全長１６１メートル、満載排水量７２５０トン。
作中では改良型の「愛宕」型は弾道ミサイル防衛のために本土に残留。

「日向型」――ヘリ空母（ＣＶＨ１８１型）。かつてはヘリコプター搭載護衛艦と呼ばれた。旧海上自衛隊護衛艦としてははじめて艦体中心線を飛行甲板が貫通する全通式甲板を採用し、最大１１機のヘリコプターを搭載できるなど前級の「はるな」型をはるかに上回る能力を持つ。
ただし個艦防空用にＶＬＳを装備するなど次級の「扶桑」型のような純粋な空母とは言い難い。
作中においてはＦ３５戦闘機の導入に伴いＳ／ＶＴＯＬ空母化も検討されたものの艦体の大きさから断念され、そのかわりＵＡＶ（無人機）母艦としての能力が付与された。最大搭載機数は８機。
改装点は着艦ワイヤの設置と軽電磁カタパルトの設置など。

「扶桑型」――ＣＶＨ－１８３型。旧称ヘリコプター搭載護衛艦「ふそう」型。進水直後に国防軍が設立されたため即座にヘリコプター空母へと艦種が変更されるという珍事が生じている。
作中では対中軍事緊張の増大からＳ／ＶＴＯＬ空母化が構想され、艦首斜線上にヘスキージャンプが追加され、ＵＡＶ用カタパルトが

艦首部にかけて設置された。突発的な開戦に伴い艦載機になるはずだったＦ３５Ｂ型はまだ納入されておらず、現在はＵＡＶ母艦兼艦隊旗艦としての役割を果たしている。

全長２４８メートル、満載排水量２９６００トン（改装後）と旧帝国海軍の「瑞鶴」型航空母艦に匹敵する大きさを誇る。

ＵＡＶは最大２０機搭載可能。

作中では本格的な固定翼機搭載型の航空母艦（６万トン級）が計画中で予算も成立済みであるが、平和友好党（第五話参照）などからは予算の無駄と批判の声が大きいうえ、三連動大地震発生という現状から今後は不透明である。

「Ｐ３Ｃ『オライオン』」――国防海軍の主力対潜哨戒機。冷戦時は２００機近くがソ連潜水艦隊に対しにらみをきかせていたが、冷戦終結にともない機数が削減され、後継機の国産機Ｐ－１の増加とともに順次退役していた。作中時点では機体延命にともなって退役をとりやめ全体機数を増加する方針がとられ、７０機ほどが現役である。

「対艦ミサイル」――空対艦ミサイル（ＡＳＭ）と艦対艦（ＳＳＭ）が存在。今作において最新の対艦ミサイルはＡＳＭ－３で、最大速度マッハ５を誇る。固体ロケットブースターで加速し、燃焼終了後の空になったブースターをラムジェットエンジンとしても利用する方式をとっている。弾頭重量は高性能炸薬２５０キロほどである。重量があるため、作中のＵＡＶ「強風」では２発しか搭載できないが、Ｆ－２改支援戦闘機では４発、Ｐ－１哨戒機では最大１０（機首爆弾倉に２）発の大量搭載が可能となっている。

「Ｆ３５」――アメリカ製の第５世代ステルス戦闘機。

ベストセラー戦闘機であるＦ１６戦闘機を代替しつつ海軍や海兵隊

の要求を満たそうとしたうえ、開発を国際共同で行ったために開発が遅れ価格の高騰を招いた。しかし性能は高く、ステルス機であるため善し悪しである。

作中では日本にはA型の空軍型と、垂直離着陸が可能な海兵隊型こととB型が導入されているが、機体納入の遅れからA型が数機存在するのみである。

「島型艦橋」――全通甲板の邪魔にならないように片舷側に艦橋を寄せ、横から見るとまるで島のように見える艦橋。作中においては前艦橋とレーダー用マストが一体化し、その後方に煙突、後部艦橋（航空機管制室）と続く。

「サイドエレベーター」――航空機やヘリコプターを飛行甲板に上げるエレベーターを甲板の中央ではなく艦の舷側に設けたもの。エレベーターの上げ下ろしで航空機の運用を邪魔しないようにこのような形をとっている。

舷側に大きな穴をあけるようなものであるため、荒天下は一段低くなっている格納庫に海水が入らないようにシャッターがおろされるようになっている。

「三菱ＡＦＱ－２『強風』」――国防海軍初の無人戦闘攻撃機。戦闘機というよりは空中のミサイル発射台として開発された。

基本となったのは２００９年に初飛行した無人機ＴＡＣＯＭ（全長５メートルほど）で、これを基本に先進技術実証機（２０１５年初飛行）の開発の成果やすでに運用されていた無人ヘリ運用システムのデータをフィードバックして機体を大型化するなどして開発された。

海外における無人機が安価な戦力であるのに対し、「強風」はある程度は安価ではあるがあくまでも小型の艦載機として作られた。

ステルス性能はオミットされているが、その分飛行性能の改善や兵

装吊下パイロン４ヶ所の設置など一定の攻撃力を保持できた。
作中前年初頭に初飛行し、対中緊張の増大から大急ぎで量産が行われた結果先行量産型を含めた２７機が作戦に投入されている。

「電磁カタパルト」――当初は将来の航空母艦用に開発が行われていたものだが、その性能を小型のＵＡＶに限定することで強引に実用化されたもの。日本が世界の最先端を走る超電導磁石を用いたもので、小型であるが高出力。ただし大型化は難しい。
作中においてはＵＡＶ母艦計画に伴ってヘリ空母に設置された。

「フォックス・シルバー」――艦載機の識別用につけられた接頭辞。ＦＳの略だが、戦闘中に言い間違えないように頭文字に特定の単語をつけるという米軍の方式を踏襲している。これは共同作戦の都合上の措置である。
そのため座標と間違えないようにフォックスロットではなく「フォックス・シルバー」と言い換えられ若干本末転倒気味となっていた。

「圧潰」――水圧に負けて潜水艦が押しつぶされること。
潜水艦は魚雷や爆雷が命中すると圧潰を起こして沈没する。

「３０００トン以上の大型艦だけでも６０隻以上」――大洋の中央部で作戦するのでなければ１０００トン程度のコルベットと呼ばれる小型艦でも十分である。しかし、日本の駆逐艦群はいずれも満載排水量が５０００トン以上と大型で、良好な航海性能と長期海上作戦性能を有している。大型であるということはともすれば沈めにくいということでもあり、また多数のミサイルや防空システムを搭載することができるということでもある。
攻撃力はより小型（３０００トン級）の中国海軍艦艇と同等とはい

え、その真価はこうした目の見えない部分に出ている。

第九話　「八代＝反抗期　９月９日―Ｄａｙ＋８」（前書き）

番外編を独立させる作業に四苦八苦していたら間違って消してしまいましたので再投下。
お待たせしました。
第九話を投下いたします。

※　本作はフィクションです。実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。

※　作中人物の認識につき一部現実においては不適当と思われる表現が登場いたします。そうしたものが嫌な方は閲覧をご遠慮ください。

第九話　「八代＝反抗期　９月９日―Ｄａｙ＋８」

――西暦２０１Ｘ年９月９日　日本列島　九州島中部　八代平野

――「島原の海をのぞむ台地は南九州とは打って変わって水に満ちている。
巨大なる阿蘇をはじめとする山々に源を発する河川はあるいは地面に出で、あるいは地下に潜んで、時に思わぬ場所に清浄な水を発するのである。

こうした河川は大陸とは違って滝ともいうべき傾斜をつたって流れ落ち、淀みなく田畑を潤したあと海に注ぎ込み、ここでも豊穣を約束する。
まさに天に愛されているといってもいい大地である。
まったく、世界に冠たる大中華のものになっていなかったことが不思議なくらいだった。

それもこれも、悪の極みたるあの倭猿どもがこの土地を不遜にも独占していたためだ。と兵士は思った。
わずか８０年前、祖国を滅亡の淵にまで追い込み、大地を荒らしつくし、人を殺しつくし、そしてあらゆるものを奪いつくした連中。
それでいて反省するという人として最低限の義務すらないがしろにした人面獣心の世界の恥。
その怨念をおさえて未来のために手を差し伸べた我々に、仇で答えた愚か者ども。
懲罰を与えられるのは正直いっていい気味だ。

しかし奴らの現状を維持する能力だけは認めてやってもいいかもしれない。
この大地を大中華の偉大なる領土とする栄光の一翼を担えたことは自分の誇りだ。
英雄として祖国に凱旋し、この大地で「奪還」した富で成功をおさめることができるのも奴らが愚かにも中華から収奪した富をため込んでいたためだし、中華の血を吸い肥え太った愚かな民へ直接「懲罰」を加えその対価として快楽を得られたこともまた奴らの愚かさのためだった。
この分なら、数か月を経ずしてトウキョウ、いや、中華東京（トンジン）となる悪徳の都を解放し慰労をねぎらわれることになるだろう。
そうなれば、さらなる栄光と快楽が自分たちを待っている。

――祖国に帰ったら、ここに家族と住もう。

不浄な遺伝子を残した倭猿どもは駆除したし、従順な連中の奉仕もある。
ここでならば、大陸と違い自分はうまくやっていける。
いや、大陸でも家を持とう。
日本人どもがずるがしこく作った技術だの特許だのも大中華のものとなるのだ。美帝（アメリカ）の度重なる妨害をおしのけ、中華民族の資本は世界に雄飛することになると新聞もいっていた。
だから」――

「やめろ！私は民族差別主義者の戯言（たわごと）を聞きにきたんじゃない！」

司令官が首を振りながら叫び、朗読は一時中断された。

「そうですか？これはまぎれもなくわが特戦群（特殊作戦群）が入手した一般的な敵兵の手記ですが。」

「にわかには信じられん。誤解しないでほしいが私は君たちに対し含むところもない。だが君たちがいささか偏った思想を持った敵の手記を抽出したのではないかと思っているのだ。」

なるほど。と真面目に頷いてみせた連絡武官に、ひとまず場の空気が緩んだ。

アメリカ陸軍第２５師団第１ストライカー遠征旅団の幕営にやってきた秀才型の日本軍人は、読み上げていた紙を手元に置き、ひとくち茶を口にした。

グリーンティーだ。八女茶というそうで、日本軍が持ち込んだ地元の銘菓とあわせると実にうまい。

コーヒー中毒であった司令部の一同にも好評な逸品だ。

「遺憾ながら、これが『我々の敵』なのです。閣下。」

噛んで含めるように連絡武官はいった。

「極端に申し上げれば『かつて自分たちはひどいことをされた。だから今も満足できない現状であるのであり、相手に復讐してもいい』というのが彼らの論理であります。」

「理解できなくもない。」

いやらしそうに口もとをゆがめた幕僚の一人がそう混ぜ返した。

現在司令部を置いている町立体育館の一室には、遠征部隊の士官の多くが集結していた。総司令部こそ神奈川のキャンプ座間に置かれているが、迅速な指揮のためには前線近くに指揮の拠点が必要となる。

久留米市の日米統合指揮司令部（ＪＩＣＨＱ）、熊本の国防軍第一統合任務部隊司令部（ＪＤＦ－ＴＦ－１ＨＱ）に加え、前線近くの八代には日米陸軍の連絡所を兼ねて米陸軍第２５師団第１ストライカー遠征旅団と日本国防陸軍第２師団（旭川）の前線司令部が二つ並んで設けられていた。

空軍基地や海軍の軍港のような存在は両者にとっては必須である。海軍は艦艇を運用する都合上定期的な整備が必要となるし、空軍は言わずもがな航空機は基地がなければ運用できない。

しかし、陸軍は違う。陸軍部隊は「駐屯地」に存在している。場所に依存せず、いかなる場所に赴いてもそこに移動して作戦を継続する。この文字からもそうした陸軍部隊の特質がよく表れているといえるだろう。

そして、二つの国家の陸軍はこうして八代に一時の居を構えていたのであった。

もともと共同作戦に否はない。

この６０年あまり、日米両軍は共同作戦を主眼にその軍を作り上げていた。

旧自衛隊時代から国防軍は在日米軍の補完戦力であったし、米軍は世界各地に展開するという役割からして現地の同盟国軍との共同作戦を考慮している。

実施され始めたことこそ最近であるが、大震災においても、そして今次戦役においても共同作戦はうまく機能しているといってもよかった。

そうなると、次に必要になるのが情報の共有である、

ことに敵の情報について同盟国軍に対し隠蔽を行うことは利敵行為に等しい。

そうした理由で、日本国防軍は続々と日本入りを果たしつつある米軍部隊に連絡将校を派遣し情報提供を行っていたのだった。
そしてそうした情報は、えてして常識レベルのものになることが多い。
軍事情報についてはお互い専門家である。
しかし、国境を接することで感じる相手への理解はどうしても日本側に勝るものがないのである。
今回行われていたのは、後方に潜入した国防軍特殊作戦群（特殊部隊）が確保した敵兵の手記などからみた敵の士気とその由来についての講義であった。
連絡武官にとってみれば、確かにいささか偏見に満ちているものの、米軍の上級士官が拒否反応を起こすことは少し想定外であった。
そこへこの一言である。

「それが偏見やプロパガンダによるものであることを除けば。」

わざと意地の悪い表情をしていた士官が肩をすくめた。
アメリカの軍人にはこうした男が多い。
友人とは遠慮なくたちの悪いジョークを言い合える関係であると考えているのだった。

そうしたある種の「気遣い」に連絡武官は「大げさな微笑」でこたえた。
地方本部といういわば広報出身である彼はそれなりに空気は読める方であった。

「問題は、敵が明らかなプロパガンダを信じたがっていることです。」

連絡武官は言った。

「知ってのとおり、中国軍の士官と兵士の間には都市の知識階層と農村民という決定的な開きがあります。経済的にも教育的にも。」

全員が頷いた。

「ありがとうございます。しかし、両者とも両者の理由でプロパガンダを信じたがっています。

都市民は『そう信じた方が都合がいいから』、農村民は『純粋にそう信じるように誘導されたから』です。

強権的な国家を存続させるためには、思想的な統制が必要です。

かつては毛主席やら赤い理想を信じていればよかったのですが、国家の発展を重視し資本主義を導入してそれらを本質的に裏切ってから、中国は本質的な矛盾を抱えるに至りました。

社会主義の理想を掲げる一党独裁の政府自体が思想の唾棄するところである資本主義の悪魔になってしまったのです。

となれば、思想的に必要とされるのは『政権の正当性』です。

『悪魔のような敵と戦い、勝利した』という事実、そして『現在も敵から自分たちを守っている』という事実を国民に納得させる必要があります。」

「そしてその被害者となったのが、日本人か。いささかコミックの見すぎじゃないかね？

それとも『ツーチャンネル中毒』とでもいおうか？」

旅団戦闘団司令（典型的な東部白人のＷＡＳＰだった）もいつもの調子を取り戻したらしく冗談交じりに手を挙げてみせ、彼なりの『予習』の成果を披露し連絡武官や日本びいき組の笑いをさそった。

「いえ、事実はコミックよりも奇であるものです閣下。かの国の治安予算は我が国の国防費を超えており、かつ行政機構の腐敗の度合いはワシントンポストをお読みならよくお分かりのはず。」

政府御用新聞の名前でまた少し笑いをさそってから、連絡武官は急に真面目な表情を作った。

「それだけ社会矛盾や不満が鬱積しているのです。しかし、反発などすれば天安門事件の二の舞ですし夜中にドアを勢いよくノックされて『行方不明』になりかねません。
ですが、政権の正当性の根拠となっている『悪の日本人』に対する反発を示すことは簡単には止められません。
しかし、こうした鬱憤の発散は予想を超えて広がり始めた。となると政府としてはおさえにかからないといけません。
いつ矛先が自分の側に向くかわからないためです。
ですがそれが逆に反発を生む。『悪の日本人をなぜかばう?』と。
この段階で矛先はこちらに向きます。」

「どういうことだ?」

「簡単なことです。彼らは自分たちも話半分でいっていたはずのプロパガンダを逆に信じてしまったのです。
それを否定するような情報や言説は国家の正当性を否定することですから存在しないも同然です。
そして政府がおさえこめばおさえこむほど『悪をかばう』としてプ

ロパガンダの国粋主義的な部分を刺激する。

『信じたいことを信じ、それが自分にとって都合がよければ熱狂する』のですね。それが自分は悪くなく、周囲の環境や無理解が悪いのであればなおさら。

このポジティブ・フィードバックがエスカレーション―事態の加速度的な悪化―を生むのです。

極端なことをいえば、彼らは『鬱憤を晴らす先が政府でも、日本でも、どちらでもいい』のですね。」

「それでは、何か？今回の中国人の激発は、つまり――『反抗期』か？」

バカな。そんなことがあるわけ、と士官の一人が顔色を変えた。

「反抗期とは言い得ての妙ですね。その通りです。

なんだかんだいって、彼らもそれなりに自分たちに関わりのある自国政府より、子供のころから『悪魔』と教えられている外国政府の方が憎みやすいのでしょう。

子供の反抗期の衝動が向かう先は親ではなく、それ以外の周囲の大人や同級生であることも考えれば――」

「だから、こんなことができるのか？」

旅団戦闘団司令は広い指揮机の端に置かれたタブレット端末にちらりと目をやった。

そこに映し出されていたのは、スナップフィルムか出来の悪いエログロ映画のような、現実の画像。略奪、暴行、放火、なんでもござれ。

これも特殊作戦群が集めてきたものだった。

「でしょうね。敵は『悪魔』だそうですから。向こうは分かっていないのかもしれませんよ。『なぜ自分たちが侵略者呼ばわりされるのか』と。」

「他国の領土や富を自分のものだと言い張り、強引に横取りする、それが侵略でなくて何なのだ。」

「正義、でしょう。それが欲望を肯定する理由であるだけだとしても。」

むしろ、なぜそうした事態の本質を理解しようとしなかったのか、それが連絡武官にとっては疑問だった。
まぁ、自由や良識というものが普遍的な価値を持つとアメリカ人は信じたいのかもしれないが。

「なぜ、こんなことになったのだ――」

それはこちらの台詞です。
という言葉を連絡武官は飲み込んだ。

――この2日後、はるばる欧州から飛来したアメリカ陸軍第1機甲師団、アメリカ本土から投入された第10山岳師団、そしてハワイ駐留の第25師団は、日本国防陸軍の7個師団ならびに空海の戦力

とともに総反撃を開始した。
対するは、中国陸軍１２個師団および航空部隊。
世に云う、「八代大戦車戦」の開戦である。

第九話　「八代＝反抗期　９月９日―Ｄａｙ＋８」（後書き）

【用語解説】

「八代平野」――熊本県南西部に広がる平野。海岸線をつたって北上するルートと南東の人吉盆地方面からの九州自動車道ルートの合流地点という要衝に位置し、北上すれば熊本市と阿蘇山という日本側の兵力集積拠点に達する。
そこから北上すれば北九州の平野部に達するため中国軍はここを主攻ルートとして選択。
対する日米もここに防衛線を構築していた。

「中華東京」――すでに中国本土では戦勝後の日本併合後のことが話題とされていた。このあたりは日露戦争前夜の「七博士意見書」の頃とにているかもしれない。またマスメディアというものがいかなる性質を有するかという証左でもあろう。

「特殊作戦群」――旧自衛隊時代末期に設立されたその名の通り「特殊作戦」をする部隊。その任務は敵後方への浸透と情報収集である。
作中においては山岳が多い九州においては特に威力を発揮していたが、中国軍に通じた残留住民と現地に残留した自主防衛組織の争いに巻き込まれたりという椿事も多く発生していた。
作中時点では多数が鹿児島県内に潜伏。四国方面においても土佐清水方面への偵察活動に従事している。

「第２５師団第１ストライカー戦闘団」――ハワイに駐留するアメリカ第２５師団の中にあるストライカー戦闘団のひとつ。
かつての旅団戦闘団をスリム化したもので、高性能なストライカー

装甲車を用い、独立して戦闘を行うことも可能となっている。この部隊の真価は、世界のいかなる場所にあっても戦略航空輸送を用いて迅速に展開を行い、3日以内に戦闘を開始できるという機動力であろう。

作中においては第25師団ごと九州へ派遣され、日本側防衛線に追加配備されていた。

「日米統合指揮司令部」――前線における日米両軍の統合指揮のために設けられた司令部。総反撃を前に九州の久留米市に前進。米海軍佐世保基地も指揮下においており、アメリカ太平洋軍司令部とも直結連絡回線が確保されていた。第1・第2統合任務部隊の双方と在日米軍の戦力を指揮下においている。

「第一統合任務部隊」――今次戦役において陸海空の戦力を一元的に指揮するために設置された。

主として九州の実戦部隊を指揮下におく。もともとは西部方面隊司令部に所在していたものの、大規模反撃を前にして前線近くに前進した。

なお、第二統合任務部隊は三連動大地震対応のために設置されており引き続き東部方面隊司令部のある市ヶ谷に所在。

「第2師団」――北海道から抽出された精鋭部隊。

旭川に所在していたものの、日本海を突っ切り博多湾から現地に投入された。主力となる戦車は90式戦車といささか旧式ではあるが、旧自衛隊時代にいちはやくシステム化された師団であるなど常に最新のメンテナンスを受け続け、練度も非常に高い。

「政府御用新聞」――首都に所在しているため、基本的に政府の政策には全面肯定することが多い。

「アメリカ陸軍第１機甲師団」――ドイツに所在。その名の通りアメリカ陸軍の中でも戦車を主力とする数少ない師団のひとつである。

「第１０山岳師団」――アラスカに所在。アメリカ陸軍の中でも山岳戦を専門にした唯一の師団である。

「７個師団」――日本国防陸軍のうち第２師団・第５旅団・第１１旅団（北部方面隊）・第９師団（東北方面隊）第１３旅団（中部方面隊）・第４師団・第８師団（西部方面隊）が投入された。
また、第１４旅団と第３師団が中国地方に前進し後詰をつとめる。震災対応にために投入されているほかの部隊と沖縄本島に押し込められている第１５旅団もあわせれば、日本国防軍の総力を結集したものであった。
この部隊が消滅すれば、日本側は兵庫・大阪県境にまで後退する計画となっていた。

「中国陸軍１２個師団」――さらなる増派がなされる予定だったものの間に合わなかった。それでも支援部隊を含めれば５０万近い大兵力である。

第十話　「八代＝状況開始　９月１１日―Ｄａｙ＋１０」（前書き）

お待たせしました！
しかし本格戦闘には突入できない（泣

第十話　「八代＝状況開始　９月１１日―Ｄａｙ＋１０」

――「ごらん下さい！
ここクマモトには在日アメリカ軍第１軍に所属する第２５師団が集結しています！
現行のＭ１Ａ２エイブラムス戦車だけではなく、最新鋭のＭ１Ａ３スーパーエイブラムス戦車の姿も見受けられます！
その横には、日本軍のタイプ１０戦車がタイプ９０戦車とならんで待機しています。
６００マイルもはなれたホッカイドウから移動してきた部隊と、これまで逼塞を余儀なくされていた日本西部の部隊がそろって待機しているあたり、日本軍の本気具合が見受けられますね。

・・・はい！その通りです！

この迅速な機動には、日本側の船舶輸送路に加え、シンカンセンのルートが用いられました。
専用の高架軌道を使うシンカンセンは、１か月前の大地震で大きな被害を受けました。
私たちがよく知るマウント・フジをのぞむトウカイドウシンカンセンはいまだに復旧のめどすらたっていません。
しかし、５０年以上をかけて整備が続いたシンカンセンのルートはこれを代替する日本海側のルートが存在しています。
ここを通り、韓国海軍の妨害をものともせずに戦車の迅速な輸送が成立したのです。
さすがに時速２００マイルで走行はできませんが、専用軌道という強みをいかして鉄道輸送が行われ、オカヤマやヒロシマといった大都市を経由してキュウシュウへ移動するのにわずか１日！
第２次大戦初期のドイツ軍の西方電撃戦を彷彿とさせる移動速度で

す！

・・・はい。はい！

こうした輸送路へのテロは散発的に発生しています。

しかし、発効が前倒しされた戦時軍法に加え、殺気立ったといってもいいくらいに怒れる日本の自警団によって未然に防がれるか、盛大な銃撃戦に発展し、結果として輸送路は機能不全レベルにまでは至っていません。

先ほど申し上げましたシンカンセンはあくまでも軌道の一例でして、日本本土にはかつての帝国時代以来張り巡らされた長大な鉄道輸送路と、かつては無駄の象徴ともいわれた自動車用道がすみずみにまで通っています。

これらすべてを破壊するには、文字通りこの２０万平方マイルの島々の隅々にまでバンカーバスター（地中貫通爆弾）を投下するか補修復旧を行う日本人すべてを殺しつくすという方法しかないでしょうね！

歴史が証明している通り、日本人たちは敵に対してはまったくすさまじい闘志を燃やします。

ですのでテロルやいやがらせ程度の爆撃では彼らの怒りをなだめるには至っていないようですね。

今日インタビューをしたクマモトのビジネスマンは、『火事場泥棒や裏切りを許せるほど我々は人間ができていない。過去にあぐらをかく連中はこの島から生きて帰ることはないだろう』と感情をたかぶらせていました。

・・・はい。

怒り、わめき散らすのではありません。

怒りが極まり、逆に冷静になっているようで、外見はまったくふだんのままです。

言葉を交わさなければわれわれ西半球の人間には普段の柔和な日本人と区別がつかないほどです！
情報統制はされていますが、それでも入ってくる虐殺や略奪の情報、そしてインターネット上の書き込みが時折報じられ、日本人の戦意をかきたてているようです。

はい。会戦が行われるとみられているのはこの・・・私たちがいるクマモト城から見えるでしょうか。あいにく地平線がかすんでいるために残念ながら見られませんが、このクマモトから３０マイルあまり南にあるヤッシロ平原。
この中部キュウシュウの中心都市であり、４００年以上の歴史を誇る城下町はぎりぎり重砲や戦域ロケットの射程外ですが、時折爆撃機が飛来し、市民は空襲警報のたびに身をかがめる日々を送っています。
航空機だけではなく、中国本土では台湾海峡向けに配備されていた中距離弾道ミサイル部隊が移動を開始したとの報道もあり、主要都市への核ミサイル攻撃を警戒してパトリオットミサイル部隊や戦闘機部隊が常時待機状態にあります。
その中でも、最新鋭のイージス艦アタゴとアシガラはワカサ湾とニイガタの原子力発電所周辺に待機してＢＭＤシステム（弾道ミサイル防衛システム）で空をにらんでいますが、相変わらず海上の艦隊や移動した部隊の一部と連絡はとれません。

はい。
全体的には「かたずをのんで戦況を見守っている」というのが日本側の印象です。
しかし、熱狂する中国側の市民とは対照的ですが戦意は勝るとも劣らないというところです。

シンガポールで行われている日中間の停戦交渉が妥結したとしても、

中国側はもちろんですが日本側も止まるとは思えないでしょう。

え？おや――おっと・・・！！
地平線が光りました！！

あちらには日米の地対地攻撃部隊がいたはずです。
詳しくは機密とのことですが、重砲ないしは多連装ロケットシステム（ＭＬＲＳ）の斉射が行われたとみられます！
いよいよはじまったようです！！

あっ。広報士官が呼んでいます。
アリガト！　イマイキマスヨ！！スミマセン！

これより私たち従軍取材班は日本陸軍第２師団とともに戦地ヤッシロ平原へ入ります。
以上、クマモトからＧＮＮ　アラン・リチャードがお伝えしました！！」

――西暦２０１Ｘ年９月１１日　午前６時１１分　日本列島　九州島　八代平野

「状況、はじめ。」

日米両軍による攻勢作戦はこの無味乾燥かつ万感の思いが籠った一語にて開始された。

現代戦において戦線という概念はただ灰色が黒でないという程度の曖昧さをもって語られるが、これは２００年ほど前のように派手な軍装の歩兵が隙間が見えないくらいの密集隊形で行進しながら射撃を行ったり、１００年ほど前のように長大な塹壕を掘ってにらみ合うようなことがなくなってしまったためである。
もちろん、町や都市などの拠点を占有し占領するためには歩兵を歩かせなければならない。
土地を確保したのなら取り返されないように番人がいるのだし、土地に暮らす住人を力で従わせるには最後には人と人とが向き合わなければならないのだ。

この原則からすれば、中国軍と日米両軍が対峙しているのは八代市内、国道3号線沿いの日奈久（ひなぐ）から坂本までの小高い丘陵地帯といえるだろう。
九州の反対側に位置するもうひとつの前線、耳川古戦場付近と結べば、ほとんど同緯度となる。
しかし、この九州を横断する「戦線」において攻勢正面となれるのは、この丘陵交じりの幅１０キロほどの海岸低地しかない。
そのため、両軍あわせて２０万余りがひしめく戦場は、まるで冷戦時のエルベ川沿岸のように戦闘用車両で満ちていた。
その様子は現代によみがえったアレクサンドロスの重装歩兵軍団のようですらある。

中国側はここを攻勢正面と定めた理由がある。
海岸沿いを進撃してきた薩摩半島から上陸した部隊と小林盆地を経由して進撃してきた志布志湾から上陸した部隊が合流できる位置にあり、さらにここを突破できればあとは熊本平野から筑紫平野を経て北九州に一気になだれ込めるという絶好の位置にある。
対して、宮崎県側からの攻勢は山岳地帯を経由して大分県側へ抜けてもさらにまた山越えをせざるを得ない。

山越えを2回するよりも平野を突き進む方が楽なのは子供にも分かるし、距離的にも前者の方が適している。

何より、こうした限定された攻勢正面における突破戦は冷戦時のお手本であった旧ソ連軍同様、中国軍にとり「縦深攻撃」戦術を発揮する絶好の舞台であった。

俗にスチームローラーと称されるこの戦術は、簡単に言えば戦車などの機甲部隊が敵を押しつぶし、攻撃の衝力がなくなった時点で後方に控えていた同様の部隊を前線に投入、再び前進を継続しあとは同様に繰り返すという物量と火力、そして速度の極みのような戦術だった。

難点といえばその性質上敵よりも多数の兵力を持っていることが望ましいことだったが、大陸国家にとっては比較的容易なことである。物量と火力で押しつぶす。今も昔もそれが中国軍の基本戦略構想（ドクトリン）であるのだ。

対する日米両軍にとって、ここは背水の陣も同様である。

もっと北にいけば事情は違うのだが、裏を返せばこの「戦線」を突破されれば、日米はそれなりに広い熊本平野で平地になれた中国軍とがっちり組み合うことになってしまう。

しかも少数戦力で。

逆にいうなら、この敵の戦力の展開と機動が制限される区域においてなら、日米両軍が磨き続けてきた火力を存分に投射して多数の敵に対抗できるのだ。

米軍は湾岸戦争をみてもわかるように攻勢のエキスパートであるし、日本はといえば実戦経験こそないもののここは彼らの本土である。

そして、彼らもまた世界最強のソ連機甲軍団に半世紀以上の間備え続けてきた防衛戦のエキスパートだった。

――だからこそ、日本側の指揮官である川波省吾一等陸将は旧自衛

隊時代の言葉で攻勢を開始したのであった。
「作戦」「戦車」「爆撃機」こうした単語すら使うことを禁止されながら耐え続けた自衛官たち。
その思いを引き継いだ男たちの士気は、天を突いた。

第十一話　「渤海湾＝爆轟　９月１１日―Ｄａｙ＋１０．１」（前書き）

お待たせしました。ちょっと視点がかわりますが、一本投下いたします。

※　本作品はフィクションです。
実在の人物・団体・国家などとは一切関係ありません。
また、作中に残酷な描写が出てきます。そういうものが嫌いな方は閲覧をご遠慮ください。
本作はいかなる戦争・差別行為もこれを許容するものではなく作中の描写はフィクションであることをここに言明しておきます。

第十一話　「渤海湾＝爆轟　９月１１日―Ｄａｙ＋１０．１」

――西暦２０１Ｘ年９月１１日　中国大陸　山東半島　青島

１隻の大型船が航行していた。
全長は３００メートルを超えており、広い幅と船体後部に寄せられたブリッジを有している。
甲板は平坦ではなく、いくつかの白い半球体をくっつけたような格好をしていた。
そして船体横に記されているＬＮＧの文字がその船の正体を端的に示している。

ＬＮＧ――液化天然ガスタンカー。
目下世界の火力発電業界において主流となりつつある天然ガスを運ぶ新世代の海のキャラバンである。
中国大陸本土では石炭火力発電が主流であるのだが、大気汚染対策に加えて新規建設が進む核電（原発）群の本格稼働はまだはじまっていないために急遽これらのＬＮＧ火力発電所が増設されつつあるのだ。
残念なことに、米国で行われているようなシェールガス開発という手段はプラントメーカーである日本との対立が続いているためになかなかとれない。
せめて技術導入をと力を尽くしたのだが、日本人は極端に「技術窃盗」を警戒しており、不愉快な話ではあるが首を絶対に縦には振らなかった。
そのため中国政府は中東各国に加えてアフリカ諸国との協力関係を密にし、自国印の液化天然ガス獲得に血道を上げていたのであった。

だが、そうした成果も今となっては怪しい。
対日開戦に伴い、湾岸諸国に加えてあれほど援助し友情を確認し合ったアフリカ諸国ですら中華に対する態度を硬化させており、何より英連邦諸国とアデン湾上のＮＡＴＯ軍艦隊は中国海軍の護衛艦艇を露骨に警戒しはじめていた。
中立宣言を行い、輸出を停止する処置をとった国すら出始めている始末だ。
そうでなくとも港にとめおかれたり、強引に出港して海上でＮＡＴＯ軍艦隊に拿捕されるなどの有形無形の妨害が入っていた。
まったくもって、日帝の悪辣な陰謀はすさまじい。

この日、青島に入港できたＬＮＧタンカーはそんな中でも運良く開戦前に出港できた一隻で、航路を大回りしてようやく本土に到着できた一隻だった。
本来ならば上海か杭州湾岸に接岸するはずであったのだが、海軍の要望で船は東中国海（シナ海）で進路を北へと変えた。
中国海軍北海艦隊の本拠地、青島。
航母「遼寧」の現在の母港であるこの地には、新造ドックとそれに電力を供給する発電施設が付属している。
さらには渤海湾沿岸の工業地帯もＬＮＧの不足が出始めていたのだ。
このあたりならば、日帝本土に上陸しているわが勇士たちと海軍艦艇の哨戒圏内であるし、重要な軍需物質積み出し港である天津や大連などの邪魔をすることもない。
中国国家海洋局の当局者たちは、九州南部へ向けた兵站線を維持することに四苦八苦しており、鹿児島の石油備蓄基地には原油しかおいていなかったことやその扱いについて政府と軍と国営企業が泥仕合を演じたこともあって「輸送船は目的ごとに出入りする港を限定する」という「駅伝方式」を選択していたのであった。
おかげでタンカーは海上で3日を待たされた。
いかに、韓国政府が対日参戦の意向を示しているからといってこれ

は気分のいいものではなかった。
そのためか、入港を前にした船員たちの顔には安堵の表情が浮かんでいた。
・・・その刻までは。

「何だ？」

船員の一人が首をかしげた。
おいどうした。という声に一言断ってから、船員は渤海湾の半濁した海水を見やる。
鯨か？
確かに何かが船体をたたいたような感じがしたのだが。

再び首をひねり、船員は入港作業に戻ろうとした。
次の瞬間。

――巨大な衝撃がタンカーをおそった。
下から突き上げるような衝撃波は、船員を1メートルあまり空中に放りだし、そして甲板にたたきつけた。
慌てて、船内に乗り組んでいた海軍の軍人たちがわらわらと甲板に出てきた。
戦時国際法に完全に違反している行為であったが、海賊対策という名目で乗船していたのだ。

「テロか！？いや・・・」

今は戦時だった。
船員は愕然となった。

まさか、潜水艦か?!

おのれ日帝。

衝撃でしたたかに打ち付けた後頭部をさすりながら、再び立ち上がろうとしたとき、船員は再び衝撃を受けた。

今度はひとつではない。

畜生、やりやがったな。

船員はあらん限りの罵倒を口の端にのぼらせようとして、そして気付いた。

ごうごうという音が聞こえる。

それが何か思い浮かんだそのとき、船員の顔から血の気が引いた。

あわせて聞こえる発砲音。

海面を射撃する兵士たちだ。

船員はそれを速やかに止めるべく息を吸い込み――

――同　東シナ海上　日本国防海軍　攻撃型潜水艦（ＳＳ）「剣（けん）龍（りゅう）」

「爆発音、連続できます。位置検索――青島港です。」

「さらに連続。天津港、大連港いずれも爆発を確認。海底地震計からの情報――きました。
爆発威力約3．2メガトン。」

「『ヴァージニア』より通信。これより攻撃は第二段階へ移行する。」

「『テキサス』発射はじめました。」
「『ハワイ』『ノースカロライナ』『ニューハンプシャー』攻撃準備完了。」

「『蒼龍』『雲龍』より観測結果の詳報が入っています。モニターに映します。」

かつて、日中中間線と称された海域、かろうじて日本領という微妙な立ち位置にある沖縄本島の北方にその潜水艦は潜んでいた。
ひっそりと息を潜めつつ、しかしその中枢たる発令所の中は押さえきれない興奮に満ちている。
それもそのはず。
彼らはこの1週間ほど海中で忍耐を強いられていたのだ。
目の前を彼らの本土へ向かう勝ち誇った連中が通過する間もじっとこらえて。
音はしぼりに絞り、空気がよどむのをまったく無視し、ただひたすら前に進み続けた彼らは、朝鮮半島沖合や尖閣諸島のはるか沖に達した時点で「荷物」を放出。
来たときと同様にゆっくり引き返した。
余分な荷物がなくなったために帰りはある程度楽ではあったが、それでも神経をすり減らすことに変わりはない。

幸いというべきか、彼らは敵の潜水艦には遭遇していない。
哨戒機にもだ。
それが彼らの「攻撃」方法が間違っていないことの証左であるのだが、逆にいえば慎重に選ばれたその方法こそが彼らを焦らした。

「やりましたね。艦長。」

海軍特有の、「ちょう」にアクセントをおいた呼び方で呼ばれた内藤裕一郎一等海佐にとってもそれは同様だった。
彼としても、ひげをそるのにも気を遣い、風呂に2週間も入っていない状況はつらいものであったのだ。

「ああ。大成功だ。」

だからこそ、してやったりという表情を彼は部下である副長に向けることができた。

「通信によりますと、少なくとも主要5港湾に対し甚大な打撃を与えることに成功。
混乱に乗じれば戦果はさらに拡大することができるでしょう。」

本土の超長波通信施設から送られてくる情報は、東シナ海の海底に設置されたＳＯＳＡＳ（海底設置型ソナー群）網に加えて海底地震計の観測結果を偵察衛星のそれと重ね合わせたものだった。
海中にいながら受信ができる電波通信システムはいささか使い古されているが、その情報をまとめるために超高速インターネット衛星「きずな」までもが動員されていることを考えるといささか奇妙な感はある。
だが、それらの成果はきわめて大きい。

まるで見ていたかのように、こうして時間を見計らった飽和攻撃が可能となったのだから。

――かつて海上自衛隊と呼ばれていた国防海軍の潜水艦隊は、あまり知られていないが世界有数の強力な潜水艦部隊である。

防衛大綱に隻数が縛られているために、技術の継承と常に最新鋭の艦をそろえるという贅沢きわまりない選択をした海上自衛隊は、その保有する潜水艦をすべて艦齢２０年未満の艦で統一していたのである。

通常の潜水艦が４０年ほど、下手をすると原潜などは半世紀も使い続けられるのに対し、これはそのすべてが新鋭艦ですといっているも同然である。

だからこそ、中国海軍の軍拡に対応する形であっさり「6隻追加」だの「１０隻追加」だのということができた。

何しろ、年に1隻は必ず作っているのだ。

まだ使える艦をわざわざ解体するまでもなく、そのまま現役にとどめておくだけで隻数は増やせる。

もっとも、乗員の数に限度があることもまた事実ではあったが。

こうして増強された潜水艦隊は、艦齢２５年未満の艦が練習潜水艦も入れれば３０隻。

中国海軍の通常動力潜水艦の3分の1ほどであり、同じ頃に作られた新型艦でいえばむしろ日本側の方が多かった。

そして、原子力潜水艦というやかましい（当然だ。原子炉を冷却し続けるためにタービンをガンガン回し続けねばならない原潜と、エンジンを止められる通常動力潜水艦のどちらがうるさいかはちょっと考えてみればわかる）艦ではないうえ、ＡＩＰ動力――非大気依存水中動力を搭載して飛躍的に行動半径を増大させた国防海軍は海

の忍者として大物を狙った。

軍艦？

そんなものは大物狙いの連中に任せておけ。
商船？
いい線だが今はまだ早い。
タンカー？

うん、まぁいい。
だが、それだけではもはや足りない。

――狙うのは、中国大陸沿岸の工業地帯。そしてその心臓部である大規模港湾だ。

これもあまり知られていないが、中国は資源輸入国である。
自国内でも石油は出るがそれだけでは足りない。
まして希少資源は。ことによると食料も。

中国は輸入資源のために国内で資源を加工し世界に売るという加工貿易国家であるのだ。
日本と同様に。
陸路での資源輸入はまったく足りない。
効率が悪すぎるのだ。
はるか天山山脈を越えてタンクローリーの車列を連ねることなど考えたくもない。
なお、頼みの綱ともいえるロシアからのパイプラインは、国内に直接入ってこないうえにあろうことか日本側勢力圏の対馬海峡を通って海上輸送せねばならない。

ゆえに、中国にとっての空気であり水である資源を取り入れるための口、大規模港湾は封鎖の対象となり得る。

日本側は、歴史に忠実だった。
彼らをかつての大戦で追い込んだものが通商破壊戦、もっといえば「Ｂ２９から投下された大量の機雷による港湾の封鎖」にあることを熟知していたのだ。
現代においても「関門海峡で機雷発見」だの「新潟港で機雷発見」といわれるように、日本本土の港湾は機雷で埋め尽くされた。
そのため、みすみす失血死していく本土に物資を搬入することすらままならなくなっていたのである。
運良く外へ出られたとしても、米潜水艦隊が手ぐすね引いて待ち構えている。
だからこそ、開戦時には世界第３位の立派な商船隊を誇った日の丸商船隊は終戦時にはわずか５０万トンあまりまでうち減らされ、港で朽ち果てる有様となってしまっていたのだった。

日本側はその再現を狙う。
といっても、空中からえっちらおっちら機雷を投下する必要はない。
日本には、そんなことをせずとも「自分から目標に近づいていき爆発する」という恐るべき機雷が存在する。
そしてその敷設部隊も。
旧軍のトラウマからか世界最大の掃海部隊を有する国防海軍は、同時に世界最大の機雷戦部隊を有しているのである。

投入されたのは、９１式機雷および１５式機雷。
その敷設には秘匿名称「１５式掃海具」と呼ばれる特殊無人潜航艇が用いられた。
これらの機雷は音響・磁気・接触の複合感知式である上、自らは音をたてずに海底から上昇する浮力を利用しつつ目標へ「音もなく」

接近、爆発するという恐るべき性能を持っている。
かつてのソ連艦隊による海峡部突破を警戒して開発されたこの機雷たちは、もとは航空機投下型であったが、運用の変化にあわせて改良が施され、実に数百発が現役であった。

敷設に用いられた１５式掃海具はその名の通り海中を航行し機雷を発見除去する自律型の無人潜航艇でもあるが、それだけではない。海中を連続数週間も航行し、まるで海中を走る列車のように引き連れた機雷たちを目標の港湾前面に敷設する機能を有した、機雷戦用の特殊潜航艇であるのだ。
大容量のリチウムイオン電池を搭載することで行動可能日数を飛躍的に増大させ、かつプログラミングに従って時には海上を航行する民間船舶の下にはりつき定置ソナーをごまかし、また海中雑音と聞き間違えるくらいに推進器を絞り込むことで警戒の網の目をくぐり抜けることで、彼らはまんまと港湾の前面に機雷の敷設に成功していたのだった。

もちろん、中国側も対策を行っていないわけではない。
だからこそ、この知能化機雷たちにはある指令がセットされていた。

「合図があるまで沈黙せよ。しかる後に、特定の大型船舶を狙え」
と。

目標は、第一に大型のＬＮＧタンカー、第二にガソリンなどの軽質油タンカー、第三に重油タンカーで、第四位に弾薬などを運んでいるかもしれない補給艦である。
軍艦などはそれよりも下位に設定されている。
潜水艦や特殊潜航艇による奇襲を警戒してもうけられていた海中の網「防潜網」の外側に敷設されるはずだったため、日本側は「威力」を狙ったのである。

もっとも、中国側はその補給線を維持するために防潜網を埠頭の近くに設置するか一部解除するかなどしていたために後から考えればその必要はなかったのであるが。

ともかく、そうして配置についた機雷たちは、「指令」を待った。
そして数日の後、解除信号が送られた。
はるか数千キロ先まで届くといわれる鯨の声や海底火山の活動音でもある低周波の信号は、機雷群を目覚めさせ、そして手近にいた入港しつつある「目標」へ殺到した。

ここで考えてみてほしい。
１０万トン（重量トン）級タンカーとは１０万トンの燃料を運べるタンカーであると大まかに考えれば？
そしてそれに搭載された可燃性の燃料が一気に爆発したとしたら？

その威力は、単純計算で１００キロトン。
これは、戦略核ミサイルの弾頭のそれに匹敵する。
そして、こうしたタンカーの近くには、石油タンクやＬＮＧタンクが存在している。
その量はタンカーのそれをはるかに上回る。
１００万トンを越えるところなど当たり前のように存在しているだろう。
そこにもし「核弾頭が炸裂したら」？
当然、炎上するだろう。
衝撃波によりタンク外壁が破壊され、漏れ出した燃料は大量の熱量により気化し、ほどよく空気と混ざり合い、そして――

大爆発する。

単純に計算すれば、１カ所あたり１０メガトン――広島型原爆５００発分の威力の大爆発が生じることになる。
これだけの大爆発を受けて無傷な港湾施設は存在し得ない。
その１０分の１くらいあっても同様だろう。

こうした惨劇を想定して燃料タンク群には十分な防備が施されるのが常となっているのだが、残念ながら高度成長期の日本同様、否、それ以上に中国本土においてはタンクの品質にいささかの問題があった。
それに、核攻撃を想定してタンクを作れなどとは無茶である。

また、中国海軍は旧日本海軍同様、「正面装備にこだわり足下はお粗末きわまりない」という新興海軍特有の悪弊を持っていた。
予算不足に泣いていた旧海上自衛隊未満という機雷戦戦力はその最大の犠牲者であったのである。

――この日、中国大陸沿岸の９カ所の港湾において大小の爆発が発生。
うち６カ所では核攻撃もかくやという巨大なキノコ雲が立ち上り、ついで米海軍の「ヴァージニア」級攻撃型原潜部隊と退役間近の「オハイオ」級対地攻撃巡航ミサイル原潜から放たれた「タクティカルトマホーク」巡航ミサイル群が残る獲物を食らいつくしていった。
大連、天津、青島、寧波、そして杭州湾（上海）。
中国大陸への物資の輸出入を司る大規模港湾および海軍軍港の実に７０パーセント近くは、たった一度の攻撃によって壊滅的な打撃を受けたのだった。

核攻撃に匹敵する被害に蒼白になる中国当局に対し、日米は「これは核を使わずに実施した『人道的な』報復攻撃である」との声明を発表した。
それは、原発に対する質量弾頭攻撃を「人道的な警告」と自画自賛した中国側発表への痛烈な意趣返しであった。

なお、被害者数に関しては両陣営で発表される数字は食い違っている。
そしてこの時、陸での戦いも第一の佳境を迎えつつあった――

第十一話　「渤海湾＝爆轟　９月１１日―Ｄａｙ＋１０．１」（後書き）

【用語解説】

「青島」――中国山東半島の先端部にある港湾都市。渤海湾の入り口に面しており、１９世紀末から２０世紀にかけてはドイツ第二帝国の租借地として繁栄した。そのため現在でもビールが有名である。中国海軍北洋艦隊の主力を有する軍港都市となっており、空母「遼寧」の母港もこの港である。

「ＬＮＧタンカー」――液化天然ガスタンカーのこと。石炭と違い天然ガスは煤煙などがほとんど生じずかつ火力も大きいため、火力発電においては設備を安価におさえつつ発電量を増大させられるという一石二鳥のメリットがある。
石炭火力発電でも煤煙や窒素酸化物対策を施せば効率は高いものの、関連技術や設備の費用がかさむため日本などの先進国にしか用いられない。
中国では大気汚染対策と資源の有効活用を目指して原子力発電に力を入れてきたが、日本で生じた原発事故の影響もあり計画は遅延。このため増大し続ける電力需要をまかなうためにＬＮＧ火力発電を推進した。
しかしそれが逆に資源価格の高騰を生み、本質的に資源輸入国である中国財政の逼迫を助長している。

「航母『遼寧』」――中国海軍の練習空母。中国では航空母艦のことを「航母」と称する。旧ソ連の未完成空母ワリヤーグを購入後独自に完成させたものであるが、着発艦可能な設備と武装を持つなどその完成度は比較的高い。
ただし、作中時点で建造開始から４０年近くとなっており上海で進

められている国産空母よりも戦闘能力は圧倒的に劣る。
とはいっても空母の真価はその艦隊指揮能力のほかは艦載機の攻撃力であるので戦力価値は高いといえよう。

「鹿児島の石油」――鹿児島県に存在する志布志国家石油備蓄基地と串木野国家石油備蓄基地のこと。貯蔵量は合計で６７０万キロリットルに達している。
地下岩盤式の石油備蓄基地のため外部からの攻撃に対しては耐久性が高い。
中国軍は無傷で手に入れたこれらを用いて日本本土攻撃部隊の補給をまかなおうとしたものの、石油精製施設が半壊していたために計画は頓挫。
そこで宙に浮いたこの「戦利品」をどうするかで軍と政府、および国営企業が不毛な争いを繰り広げていた。

「アデン湾のＮＡＴＯ艦隊」――ソマリア沖に出没する海賊に対処し、かつ緊迫するイラン情勢や印パ情勢に対応する目的でスエズ運河の出口（紅海とアラビア海の間）からのびる海上交通路の要衝アデン湾には北大西洋条約機構加盟各国による海上護衛部隊が展開している。
これには日本と中国も部隊を派遣しているものの、米軍の第１５任務部隊と合同作戦をとる旧海自・現国防海軍部隊に対し独自派遣である中国軍はアフリカにおける露骨な新植民地政策のために警戒を受ける立場にあった。

「剣龍」――旧海上自衛隊の「そうりゅう」型潜水艦４番艦。全長８４メートル、水中排水量４２００トン　水中速力は２０ノット以上。最大の特長は潜行中もスターリングエンジンと呼ばれる高効率エンジンを稼働させることでのためにわざわざ充電のために海面にまで出てディーゼルエンジンをまわすという面倒かつ敵に見つかり

やすい危険を冒さずに連続2週間あまりの潜行継続能力を有していることにある。
もちろん戦闘航海中は継続潜行能力は低下するが、フランスなどの原子力潜水艦をも上回る巨体をいかした余裕のある設計でこれを最低限におさえこんだ。
武装は魚雷発射管兼ミサイル発射管6門。本級からはよく「コーン」と音をたてているアクティブソナーは廃止されている。
作中登場の「蒼龍」「雲龍」は1番艦と2番艦。通常動力潜水艦としては世界最大である。
ちなみに中国海軍の増強に伴い、主蓄電池を鉛蓄電池からリチウムイオン電池に換装し一気に蓄電量を2倍に増強する計画であったが開戦には間に合わず6番艦の「海龍（かいりゅう）」以降に搭載されるのみである。

「爆発威力」――海上からの攻撃を想定せずに地上式のタンクを設置していたのが仇となった。さすがに核攻撃を受けることは想定されていないとはいえ、一気に爆発したLNGと石油などは港湾に甚大な被害を与えていた。
爆発威力の推定には、爆発により生じる地震波の測定によってなされる。
これは冷戦時に核実験の威力推定のために開発されたシステムによるが、今回は日本側が敷設していた海底地震計による精度の高い測定がなされた。

「ヴァージニア」――米国が誇る最新の攻撃型原子力潜水艦。
全長114.8メートル　水中排水量34ノット（推定）
冷戦時に開発された最強の攻撃型原潜「シーウルフ」級があまりに高コストとなったためその廉価版として建造された。
とはいってもその性能は非常に高く、最大潜行深度と最大速力以外はむしろ性能が向上している。
最大の特長として、スクリューではなくポンプ式の推進器を持つた

め推進器音が非常にとらえにくいことがあげられる。
また、冷戦後の世界情勢を考慮して特殊部隊の運用設備も有する。
大型化したタクティカルトマホーク巡航ミサイルを運用するため１２基のＶＬＳ（垂直発射型ミサイル発射管）を有する。作中で巡航ミサイル攻撃を行ったのはこのＶＬＳからである。
なお、作中の「テキサス」「ハワイ」「ノースカロライナ」「ニューハンプシャー」はいずれも本級に属する。

「リアルタイムの情報伝達」――作中に描写された海底地震計を通して伝えられた情報は、まず沖縄本島から超高速インターネット衛星「きずな」を通じて本土へ転送。これを偵察衛星などの情報をもとに分析し、日本本土の超長波通信施設から海中の潜水艦に向けて送る。
これを受けた潜水艦群は所定の作戦に基づき一斉に攻撃を開始したという流れである。
中国側の哨戒圏外にいる潜水艦からは逆に指向性電波を用いた通信が沖縄に向けて送られ、これも衛星経由で日本本土へ送られていた。

「日中中間線」――沖縄本島と中国本土の中間近くに位置する海域に引かれた線。
２１世紀に入り天然ガス田問題をきっかけに激しいつばぜり合いが起こった海域でもある。作中の「剣龍」は軍事施設でもあった天然ガス田施設を破壊する任務もかねてこの海域にいた。

「贅沢きわまりない」――実際に海上自衛隊時代から1年に1隻のペースで潜水艦を作り続けている。建造場所は主として神戸である。

「艦齢２０年未満」――旧海上自衛隊でも水上艦が基本的に４０年使い続けられることを考えればこれがどれだけ異常なことかわかる。
このため、日本の潜水艦群は常に最新の艦を備え続けることができ

た。

「原子力潜水艦はうるさい」――原潜用の原子炉は、高出力を出すために発電用原子炉のような２０パーセント濃縮のようなものでなく９０パーセント近い濃縮率を持つ不完全な核兵器に近い核物質の塊でもある。

そのため熱密度も高く、冷却には常にポンプで冷却水を送り込み、余分な熱をとらねばならない。

その動力としてタービンをまわし発電せねばならないのだが、当然のことながらそれによって生じた廃熱と蒸気とタービンによる雑音を完全に消去することなど不可能である。

このため防音ゴムやタイルなどを用いて音を押さえ込むのであるが、通常動力潜水艦に比べれば圧倒的にうるさいことは確かである。

そもそも原潜は外洋において無限の航続力を持つからこそ意味を持つのであって、大陸棚の２００メートル程度の浅い海ではそのメリットは半減してしまう。

「大規模港湾の封鎖」――大型化する輸送用船舶を発着させられる港湾は限られる。そのため、大規模な港湾がその機能をマヒさせれば頸動脈を締め上げられたような効果を期待できる。

中国においては経済特区に隣接する港湾と北京など大都市の玄関口となる港湾の二つがそれである。

なお、内陸部に物資を輸送する河川交通網や長江以南については今回は攻撃の対象外となる。

「９１式機雷」――冷戦時に巨大化するソ連太平洋艦隊に対処すべく日本が開発した世界初の複合浮上式機雷。

作中に記されたように、海底に沈下しつつ目標のスクリュー音や反応を検知すると自ら浮上しつつ目標へ忍び寄り、艦底で起爆。竜骨をたたき折り一撃で大型艦をも沈めることができる。

もともとは、超大国の圧力に屈して通行自由な国際海峡とせざるを得なかった津軽海峡や対馬海峡などを通る敵艦を標的とし、対潜哨戒機により散布する予定であった。
しかし冷戦の終結により使用が想定される事態は激減。かわって、仮想敵国の港湾を封鎖するという太平洋戦争時の米軍がやったような運用法が浮上した。
これにあわせ、機雷戦を行える掃海艇や掃海母艦、潜水艦による運用を可能とするべく改良が行われ現在に至る。
作中においては、９１式機雷に加え、その発展型として炸薬量を増大させつつ全体を合成樹脂によって覆った１５式機雷が開発されたという設定。
なお、実際の９１式機雷は材質はおろか炸薬量やその運用法・装備数も含めてすべてが機密のベールに覆われており筆者も常識的な妄想しかできないでいることを付け加えておく。

「１５式掃海具」――自走（自航）式の無人潜航艇。本来は光ファイバーケーブルや海上ブイを介した無線誘導などで掃海母艦と連携しつつ長期間にわたり自力で海中を捜索、発見次第遠隔操作で海中の機雷を処理することを目的に開発された。
しかし貧乏性な日本はこれに機雷敷設能力を付与。
結果、今回の作戦に投入された。技術的には海洋研究開発機構（ＪＡＭＳＴＩＣ）の無人プローブ「うらしま」シリーズの応用型である。
作中では２０～３０発もの機雷を牽引しながら1～2ノットの超低速で海中をゆっくりと進み、魚群や艦影に紛れながら港湾に接近した。
実は海自の潜水艦が巨大なのはこんな感じの機雷戦装備を持っているからじゃないのかな～というのは筆者の想像である。

「オハイオ級」――原子力弾道ミサイル原潜を改装したもの。ＳＬＢＭ（潜水艦発射型弾道ミサイル）ランチャーであったＶＬＳの中にトマホーク巡航ミサイルを８基詰め込み、１隻あたり１００発以上の巡航ミサイルを発射できる対地攻撃のエキスパート。冷戦期の「レッドオクトーバーを追え！」で思い切り非難された先制攻撃用の潜水艦であるが、米国は世界の警察であるので問題ない（らしい）。

作中では、攻性機雷戦の結果核攻撃に匹敵する打撃を受け混乱する大陸の軍港群にこれでもかと打撃を与えている。

終章――「宴のあと」　Ｄａｙ　ａｆｔｅｒ　？？（前書き）

現下の情勢があまりにも困ったものですので、ここらあたりで完結といたしました。
読者の皆様、申し訳ありません。

後書きの用語解説において個々の場面の流れを記しておりますので、ご参照くださいませ。

終章――「宴のあと」　Ｄａｙ　ａｆｔｅｒ　？？

――２０１Ｘ年１月２０日、沖縄県那覇市に、３機の航空機が降り立った。
日本国や中華人民共和国、そしてアメリ合衆国の首脳が乗った政府専用機たちである。
その目的は「極東紛争」と呼称されるに至った国際紛争の戦後処理について話し合うためだった。

この頃、すでに日本本土からかつて中国軍と呼ばれていた軍勢は一掃されていた。
９月に発生した「八代大戦車戦」において日米連合軍と南京軍区部隊を中核とする中国軍が激突し、日米の最新兵器群の威力に加えて高千穂方面を迂回した日本側山岳機動部隊が中国軍後方へ回り込み補給部隊と歩兵部隊を蹂躙した結果、機甲部隊主力は壊滅するに至ったのである。

陸上における大規模戦闘はこのあと起こらなかった。
起こったのは、掃討戦だった。
日本側の臨時戦時立法に基づき編成された「日本自主防衛隊」、いわゆる民兵たちがその主力となった。
というのも、大戦車戦の直後に新潟県新潟市において「東韓人民共和国臨時政府」なる組織が独立宣言を行っており、そこに明らかに外国勢力が関与していることが判明したためである。
自称「良識的な」人々が集結し、現役国会議員を旗頭にした彼らは「ファッショ独裁に害された日本政府の無効」を高らかに宣言し、「中華民族の一員であり韓民族の領導により形成された大和民族の正しい歴史を直視した東アジア共同体の一員として」日本列島の正当政府として「中華大家族への復帰」を要望したのである。

彼らの保有する軍事力（明らかに大韓民国軍所属である「義勇軍」）は、潜水艦を通じて送り込んだ特殊部隊によって東京電力柏崎刈羽原子力発電所を制圧。
これに呼応し、東京都内において「東韓進駐軍」を名乗る武装勢力による大規模騒乱が発生した。
国内の１００万ともいわれる在日本外国人が提供された武器により武装し蜂起したのだ。
彼らの主張は端的に言えば以下のようになる。

「日本は我々のものである、黙って従え。」

悪夢であった。
曲がりなりにもこれまで隣人として振る舞っていた人々が敵に回ったのである。
しかも、その主張は日本という存在の否定であった。
これに対抗すべく、日本政府は禁忌に手を染めた。

「民兵を主力とした国内戦」

これが日本政府、というよりは国防軍の解答であった。
陸上自衛隊時代から貯蔵していたものに加え、北米大陸から緊急輸入した歩兵火器により武装した民兵たちは次々に戦力化され、国防軍部隊の間接的指揮下においてその数は１２０万を数えるに至ったのである。
そして彼らはあまり練度が高いとは言いがたかった。
「ケースＰ」あるいは「コソヴォ」――起こったことはこの一語で表現される。
この頃海外放送などを通じて明らかになりつつあった中国大陸における在留邦人の惨状が、惨劇に拍車をかけた。

国内において虐殺と虐待と悲劇と喜劇が荒れ狂う中、次に事態が動いたのは太平洋だった。
日本側による種子島水道に対する機雷散布が行われ、俗に第１列島線と呼ばれる日本列島から琉球諸島にかけてのラインが閉じられることを恐れた中国側は東海および北海艦隊の全力出撃に踏み切ったのだ。
日米連合は、ペルシャ湾における英国オイルメジャータンカーへの攻撃を理由に参戦を決定したＮＡＴＯ諸国軍を待たずに、七十数年ぶりの艦隊決戦へと踏み切ったのである。
初撃は、中国軍による対艦弾道弾の飽和攻撃。
核弾頭を用いたＥＭＰ（高エネルギー電磁パルス）攻撃は一定の効果を上げたものの、日本側対潜艦隊は中国側の潜水艦隊を狩り出し続け、２隻の原子力空母を守り切ることに成功する。
中国側占領下島嶼群から発進した航空部隊と米空母艦載機が死闘を展開する中、日本側はまたしても「戦略的奇襲」に成功する。
厚木基地から発進したＰ－１およびＰ－３Ｃ対潜哨戒機部隊合計１００機あまりによる対艦ミサイル攻撃がそれであった。
空中給油まで利用して無理をした結果、攻撃隊が発射した対艦ミサイルはその数１１００発。
わざわざロートルなＦ－４支援戦闘機まで持ち出して行われた第２撃において４００発あまりが投射された結果、中国側の迎撃網は飽和した。
結果、中国海軍の主力艦隊は壊滅。
すでに東シナ海に展開していた日米の潜水艦隊は敗走する中国艦隊を逃しはしなかった。
そして、太平洋上の海中からは、対艦弾道弾の発射された基地に対して１１発の「トライデント」ＳＬＢＭと５０発の２００キロトン級核弾頭が飛翔しつつあったのである。

こうした状況をみた中国本土では、反政府運動が荒れ狂いはじめた。はじまりは特に政府には反抗的であった瀋陽軍区。かつての満州国を領域とする中国東北部管轄の軍区である。

彼らが黙認した結果、中国本土では恐怖が伝染しはじめた。

なにしろ、２０万を数えた在中国日本人の大半は、政府による景気のいい宣伝に乗せられた彼ら自身によって虐殺あるいは暴行され尽くしていた。

自身の行為に対する報復を避けるためにも、誰か「責任転嫁先」が必要となったのだ。

まったく勝手な話だが、彼らは彼らなりに情勢を冷静に見極めていたのだろう。

こうした動きに対し、南京軍区や北京軍区は動揺。

上海市において行われたデモに対する発砲事件がインターネット中継で全国に報道されたことをきっかけとして全国において「伐軍運動」が伝播していったのである。

そして１１月２０日、霧のたちこめる北京天安門において大規模デモが発生。

これに対して警備部隊が発砲したことを理由に暴徒と離反した警備部隊は「革命」を呼号し政府中枢へと襲いかかった。

最終的には８日後に瀋陽軍区部隊が北京に入城することで事態は収拾されたものの、それでおさまらないのが南京軍区だった。

何しろ彼らは多くの戦力を日本本土へ置き去りにしている。

しかも、情勢は明らかに「悪いのは戦争をそそのかした軍部の一部である」という流れになっていた。

主戦派であった北京系官僚や政治家たちも北京を脱出し、彼らは「正当な戦争の継続」を主張していた。

中華は、南北とそれ以外に大きく分裂したのである。

1月現在、日本本土においては「売国奴」どもに対する度が過ぎた報復の嵐が吹き荒れており誰もがそれを見て見ぬふりをしている。ことに、日本本土侵攻に積極的に協力した人々や、日米連合の出動を妨害した集団や一部地域への目は厳しく、自治体や県の分割すら視野に入れられる憎悪が充ち満ちていた。

中華は、どさくさに紛れた抜け目ないロシアを後立てに独立を宣言した東トルキスタンや独立独歩路線を歩む四川・チベット系、そして南北に分裂していた。

それ以外の諸国は、どさくさにまぎれてうまい汁を吸ったロシアと、最悪の時に最悪の選択をした結果明確に敵対したと認識され国際的な非難を浴びる某国、そしてともかく強国としての威信を示すことができたアメリカとそれぞれ対照的である。

鋭い視線と殺気に満たされた会場で、三人の首脳が文書にサインをする。

握手は――当然苦虫をかみつぶしたようである。

日本本土や中国本土において繰り広げられた悲劇の清算には、おそらく数十年が費やされることだろう。

とにもかくにも、このようにして「夏」は再び過ぎ去ったのだった。

「どうしてこんなことに？」

そう問われれば、誰もが多かれ少なかれ首をかしげることだろう。

ただし顔をしかめながら。

つまりは、戦争とはそういうものだろう。

【完】

終章――「宴のあと」　Ｄａｙ　ａｆｔｅｒ　？？（後書き）

とりあえず、予定していた流れのみを投稿いたします。
「このようにならないこと」を願いつつ、本稿を閉じさせていただきます。

【用語解説】

「八代大戦車戦」――９月１１日から１２日にかけて発生した大戦車戦。正面からスチームローラーのように突破を図る中国軍部隊に対し、日本側の７４式戦車を中心とした部隊は防御戦闘を展開。上空では九州北部の各空港から発進した制空戦闘機部隊が制空戦闘を展開していた。
側面から中国側防衛線を食い破ろうとする米軍部隊は数の劣勢から攻めあぐねていたものの、日本側がかき集めた野戦特科（砲兵）部隊が中国側の砲兵および野戦対空装備を「狙撃」しはじめると形勢は互角に推移。
それでも開戦後３時間あまりで熊本城をはるかに望むまでに戦線中央部は後退していたが、その時点で勝負は決した。
宮崎・大分県側から山岳地帯を機動するという中国側の常識を越えた機動により日本側の１０式戦車部隊および１４式高機動戦闘車部隊が中国側後方に出現し、同時に制空戦闘の終結を待たずに支援戦闘機部隊が現地に投入されたためである。
これにより中国軍主力部隊は壊滅。
しかしながら、撤退時に戦術核兵器が使用されたために日本側１個師団および米軍２個旅団が壊滅状態に陥った。

「日本自主防衛隊」――八代大戦車戦において勝利したものの大被害を受けた日本政府が国防軍の補助線力として急遽編成した民兵部隊。
現地警察や消防団を武装化したものから、三連動大地震による避難者たちの中から志願者を募ったものまで多種多様な構成員を有する。補助線力であるために保有火器は旧式な小銃や対装甲ロケット弾などのほかは、軽トラックの荷台に機関銃を載せたものなどである。しかし、戦争に「適応」した日本人の反応は抑え込まれていた怒りもあわさり激烈で、多くの悲劇を列島上に出現させることになる。

「戦時立法」――軍事刑法を主とする「戦争を行うための法律」のこと。
ゲリラなどの即刻処刑やスパイ行為の防止などが行えるが、最大の特徴は「戒厳令」の発令を可能とすることにある。これにより、いわゆる平和運動や言論の自由を盾にした輿論戦は暴走した日本側民兵部隊による過激な弾圧対象となった。

「東韓人民共和国臨時政府」――日本側の良心的勢力が結集し、戦争の終結と日本側の譲歩による東アジア共同体建設を目的に行動しはじめた組織。
本部にして臨時首都は新潟県新潟市。中国側の動員によって集結していた民兵たちが領事館を中心に蜂起し、新潟市の中心部を占拠していた。
名の由来は、「日本は百済の末裔である韓民族の移民によって建設された」「中華の文明を受け入れて平和裏に発展する」「日本なる軍国主義的な名前を捨て去り、歴史的に正しい東韓列島を国名として冠する」という設立宣言に由来する。
その実態は中国政府の傀儡組織であり実権はないに等しいものの、高官に就任した良心的政治家たちは満足していた。

彼らは日本政府の無効を宣言し、人民解放軍ならびに朝鮮半島の南北両国による進駐を要請しており、のちに日本人の多くの怒りを買うことになる。

「東韓進駐軍」――中国軍の日本本土侵攻に伴い組織されたとされる武装組織。
三連動大地震により警戒態勢が緩んだ地域や日本海側を経由してもたらされた武器を手にした在日本中国人およびそれに相乗りした人々によって構成される。
中国「軍」は彼らを「東韓列島唯一の合法的武力」として認知したとされ、それ以外の国防軍は「中華大家族からの分離主義者」と断じている。
各地の送電線や官公庁を襲撃し、終戦までに１８００回を越えるテロ事件を起こしたとされる。
その報復を受けることで壊滅した。

「日本は我々のもの」――そもそも日本は中華の文明によって教化され、百済からの移民によって建設された。そのために中華大家族の一員である。
しかし軍国主義にかぶれた日本人は中華に大きな被害を与え、なおかつ反省していない。そのため当然の権利として懲罰を行い、正しい道へと引き戻すことは聖なる義務である。
これが中国側の主張であり、それには中国側以外の賛同者も多かった。

「コソヴォ」――旧ユーゴスラビアを構成していた自治共和国。人口の９割をアルバニア系が、１割をセルビア系が占めていた。そこ

で何が起こったのかは歴史書を参照されたい。端的に述べるなら、かのリヨンの虐殺者が述べたように「一瞬の恐怖はかえって人道的である」という言葉が示唆に富んでいるといえよう。

「在留邦人の惨状」――開戦以後、現地公安当局による拘束を受けていたものの、八代大戦車戦における「虐殺」に怒り狂った人々の前に「差し出された」。そこで起こったことは、彼ら自身が悲劇と信じる過去の歴史以上であったとされる。
終戦までに生き残った在留邦人は１０００名以下であった。

「種子島水道に対する機雷散布」――中国本土近辺に対する機雷散布は、９月１１日の大爆発の間を縫ってすでに完了していた。１００機の知能機雷による封鎖に続き、中国側兵站基地となっていた奄美諸島および先島諸島近辺の封鎖が計画され、さらに５００機以上の機雷が散布される予定だった。
これにより、中国側の安全に通過可能な水道は宮古水道に限られることになる。

「東海および北海艦隊」――すでに海上に出ていた艦隊に加え、崩壊した軍港に残存していた３０隻あまりが出港した。この過程で４隻が機雷に接触し沈没。南海艦隊から北上を試みた原潜部隊にも２隻の被害が出ている。
すでにドック群が破壊された中国側にとって、これが残された海軍力のすべてであった。
なお、この間も太平洋上の巨大な「標的」へと殺到し続ける中国側潜水艦隊は狩り出され続けており、中国軍首脳が中止命令を出すまでにその数は３分の１に激減している。

「対艦弾道弾」――陸上発射型の弾道ミサイルであるが、目標を海

上の空母機動部隊などの艦隊とするもの。ただし発射後に命中までは１０分あまりの時間がかかるため、照準の都合上から実際の弾頭は核弾頭に限定される。

このとき発射された弾道弾は四川基地および吉林省通化基地などから５０発あまりであった。

これを日米側は「核攻撃」と認定。のちの報復攻撃へと繋がることになる。

なお、執筆開始当初は通常弾頭ないし劣化ウラン弾頭と考えていたものの、運用予想図と称するＣＧ映像がネット上に出回り明らかに核弾頭が搭載されていることを知った筆者はいろいろな意味で腰を抜かしたことを付記しておく（早期警戒衛星に探知されると即座に報復核攻撃を受けそうなものを作ってどうするんだ…）。

「ＥＭＰ」――高エネルギー電磁パルス。核爆発に伴って生じる強力な電磁波で、電磁誘導の法則に従って電子機器を焼き切ることができる。これにより迎撃装備を作動不能にさせるつもりであったようだが、冷戦時に対策を施されていた日米の艦隊にはあまり通用しなかった。この爆発により、奄美諸島のインフラ設備は甚大な被害を受け、かえって中国側の兵站を混乱させることになる。

「守り切る」――日本側の艦隊は攻撃力よりも対潜・対空能力を重視していたうえに、米空母２隻から発進した航空機群計１００機あまりが防空戦闘を展開したいた。そのために日本側は対潜戦闘に集中できた。それでも、駆逐艦「冬月」と「暁」が轟沈するなどの被害を受けている。

「対艦ミサイル攻撃」――厚木基地に集結した日本側の対潜哨戒機

部隊はフル装備の対艦ミサイルを装備し、海上を大きく迂回して奄美諸島沖の戦場へと突入した。
射程４００キロを誇る日本ご自慢の対艦ミサイルは中国側の迎撃ミサイルの射程外から艦隊に殺到したのである。
そして、１１００発という数に加えてステルス対艦ミサイルを多数含んだ内容は中国側の対応能力を超えていた。
これに時間をあわせて日米艦隊からも多数のミサイルが発射されており、とどめに行われた支援戦闘機部隊の突入により最終的には３０００発近い対艦ミサイルが中国艦隊に殺到した。

「核弾頭が飛翔」――対艦弾道ミサイルの使用とＥＭＰ攻撃をもって日米両軍はこれを「核攻撃」と判断。同害復讐の原則から報復攻撃を実施した。
発射を担当したのは日本国防海軍がレンタルした原潜「長門」であるとも、米国原潜であるともいわれるが、発射地点は沖縄本島南方であり、中国側の早期警戒衛星および迎撃システムの対応能力を超えた。
核弾頭５発がミサイル基地上空におけるＥＭＰ攻撃を担当し、残る４５発のうち通化基地周辺には８発、中国東北部のミサイル基地および空軍基地には合計１２発が使用される。残る１２発は四川省における対米弾道ミサイル基地群に、最後の１３発は南京軍区の各基地に対し使用された。数が多いのは、一発で巨大な威力を持つ弾頭を用いるのではなく「まんべんなく破壊をふりまく」ためである。
なお、弾頭数は、中国側が使用した対艦弾道弾の数とあわせられている。

「瀋陽軍区の黙認」――容赦なく核による報復が実施されたことと、中露国境地帯の緊張により瀋陽軍区はいち早く情勢の不利を悟った。

そのため、インターネット上の検閲を緩め、世論の形勢を許したのである。

「革命」――世論の形成を見た北京軍区および公安当局は、「政府中枢への責任転嫁」を決意し反抗。しかし日米による報復を恐れ暴徒化した人々は政府中枢に襲いかかり「宴」を楽しんだ。これに伴い、政府中枢は実質的に消滅する。
この状態にあわてた瀋陽軍区部隊が2個軍を割いて介入しなければ、さらなる悲劇が発生していただろう。

「分裂」――いくら敗北を悟ったとはいっても、自身の身の破滅を意味する謝罪はできない。そのため、今や中華の敵とされた南京軍区にはそうした人々が集まり形だけでも交戦の継続を主張せざるを得なくなったのである。
作中1月現在、反乱が相次いでおり、特に戦略拠点となる三峡ダム付近では激しい戦闘が継続している。

「県の分割」――ことに先島諸島と沖縄本島における対立は熾烈であった。

「報復」――お察しください。

「悲劇の精算」――日本本土で繰り広げられた宴においては、多くの「巻き添え」が生まれており恐怖と憎悪が蔓延していた。
これに加え、日本全体が日清戦争後に逆戻りしたような好戦的感情に充ち満ちており、この後の日本の軍拡は必至であろう。
また、敗北することになった中国側に対する視線は厳しく「変節」を考慮に入れても雪解けが訪れるには世代交代を待たねばならないと思われる。

あとがき

まずは読者の皆様、お読みくださいましてありがとうございました。

この作品は一昨年に「現実的なシナリオ下においての日中間の前面衝突はどんなものだろう?」とふと思ったことをきっかけにして考え始めたものです。

巷の作品では、尖閣諸島沖や大きくとも先島諸島などの沖縄南部での激突を考えたものは数多くありますが、多くが「そこで止まる」という考えのようです。

しかし、それで止まるでしょうか?

私にはどうにもそうは思えなかったのです。

すさまじいばかりの反日教育に加え、たとえば大気汚染がひどいのも自分たちが貧しいのも、果ては郵便ポストが赤いのも日本人が悪いといわんばかりの政府発表を見る限り、彼らは日本という存在を完全に屈服させない限り満足しないのではないかと。

ナショナリズムに酔った群衆がいかにたちが悪いのかはおそらく皆様よく存じておられることと思います。

今回は、彼らがその誘惑を我慢できなくなるであろう舞台、今すぐに起こってもおかしくない大災害を想定にいれ、それから先の流れを極力現実の延長戦として書いてみたつもりです。

ですが、あまりにも早く国際情勢が推移し、状況のいくつかは現実が作品に追いついてしまった感も否めません。

もちろん外れていることも多いのですが、現代においてもっとも動きの速い内容を扱うことにいささかためらいも感じはじめておりました。

そのため、終章と題して描写した後の流れの概略を記し、もって本

稿を閉じることにいたしました。
その内容を読んでいただければ、「いかに危ない内容を書いていたのか」よく分かっていただけるかと思います（汗）
そしてその内容ゆえに、いつでも削除を検討していることを付記しておきます。

少しでも背筋が寒くなっていただければ、幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4858bq/

夏再び一本土決戦２０１X年一【一応完結】

2015年5月14日10時31分発行